

庄内

特集 むかしの食生活をさぐる



第5号

庄内の昔を語る会

巻頭言

「庄内の昔を語る会」会長 野海 正治

八月上旬の台風、豪雨は、特に南九州に未曾有の災害をもたらし、私たちの庄内にも大きな被害を与えました。城山や前田用水路も一部決壊し、がけくずれ、家屋・田畑の浸水と、農作物への影響も甚大なものがあります。被災された方々へ心からお見舞い申しあげ、一日も早い復旧を祈ります。

会誌「庄内」も五号を発刊するはこびになりました。これも皆様方のご協力の賜と深く感謝申しあげます。

今回も前号にひきつづき、瀬戸山先生からは「庄内開田の父坂元源兵衛翁」の玉稿をいただき、郷土の先覚者の事業にかける情熱と苦難の一生を再認識、また坂元徳郎氏の「庄内探訪」も五回目を迎え、その史跡項目も四十九を数えます。横山哲英氏は、安永城の縄張りによって明らかになった意外にも大規模な往時の城の全体像を詳細に述べています。知られざる郷土の史跡を明らかにし、祖先の築きあげた尊い遺産を後世に伝える義務を切に感じます。

五号では、衣食住の食をとりあげ、ふるさとの昔と今の食生活の変遷を考えようと「食生活をさぐる」特集号としました。予想以上にたくさんの方から、貴重な体験談、感想等お寄せいただき、今さらに昔の食生活のきびしさ、切実さを痛感させられました。

原稿等ご協力いただいた皆様に厚く御礼申しあげ、今後ともご指導、ご支援をお願い致します。

平成五年神無月

目次

巻頭言

平成四年度の歩み 昔を語る会書記局 1

特別寄稿

庄内開田の父 坂元源兵衛翁(その二) 妻ヶ丘 瀬戸山 計佐儀 2

研究

庄内史跡探訪(その五) 東区 坂元徳郎 7

安永城の縄張り図をよむ 若葉町 横山哲英 22

講演のあらまし

庄内を中心とした方言を考える 高城町文化財保護委員 市園辰夫 26

かくれ念仏と殉難僧釈無涯 正定寺住職 尼子章長 26

戦前戦後に生きる 郷土作家 大河原光廣 27

庄内町情報

「八月豪雨、十三号台風」の産業被害とその対策 平田 和田輝男 29

庄内地区婦人会の集い 東区 新穂照子 30

庄内地区年齢別人口動態 庄内地区市民センター 31

庄内中学校 クラブ活動の現状 町区 溝口修一 32

庄内小学校 庄内ミニバスケットボールクラブ 庄内小 岡田新一 34

文芸欄

隨筆

私のふるさと考 宮崎市 坂元陽介 36

大河内昭爾氏によせて 町区 山元昭平 37

心に残る二つのことば 鷹尾町 得能哲夫 40

短歌

つれづれに 町区 南崎喜美 42

青春の回想(その二) 東区 黒木 聖 43

俳句

庄内俳句会 44

四季雑詠 上川崎 福島 ハル子 45

保護司 西区 菓子野 美和子 45

子や孫に語り伝える話

庄内の昔 東区 棕田 泉 46

戦後の態襲踊り 東区 鎌田康正 53

車大工 町区 重久政雄 58

甘茶の葉 東区 福留フミ 59

新町純良の昔話 平田 新町純良 61

こめんめし、びのさら 町区 坂元清景 65

私の戦後 小林市 向井サエ 67

南州神社最初の祭り	西区	有嶋義武	68
鶏卵と甘藷のこと	町区	汾陽綾子	69
飛行機見物	今屋	鵜島善市	70
近衛騎兵の想い出	宮島	土屋忠則	72
農家の下男	宮島	今村勇	74
幼い頃の思い出	東区	黒木ツミ	75
私が子供の頃聞いた話(その三)	宮崎市	長友壮二	76
特集 むかしの食生活をさぐる			79
肥後兼行・牧ノ瀬正雄・大久保平・吉村アイ・田上順子・竹下ツルエ			
原いつえ・花盛林・新町純良・大重トシ・黒木ツミ・水谷文江			
高妻ヒサ・熊原光善・鵜島善市・新留茂・原口ミサヲ・坂元キミ			
瀬戸山計佐儀・田村ミツエ・土屋忠則・今村勇・熊原ヨシエ・鶴村肇			
福留利行・福留ユキエ・入来ミネ・村永強・赤池実年・乙丸トシ子			
臼杵通夫・山口耕二・和田盛行・金田光子・長友ハツ子・柳田佳子			
樋口タミ・福島ハル子・坂元信六・長峯泰彦・田中ヨツ子			
読者よりの便り			127
編集後記			129

表示題字 大河内 浩 爾

表紙写真 乙房神社境内の田の神さあ

カット 片ノ坂 登

平成四年度の歩み

庄内の昔を語る会書記局

会員数も六十名を越し、協賛者も月日を追って増加しつつあることは、会の発展向上にとって喜ばしい事です。

特に、平成五年三月「宮崎庄内会」に招待を受け、この会の近況など語り、多くの幼な友達と会い、昔を懐しむ機会に接したことに對し感謝とお礼を申し述べます。

今年度計画した講演会、発表会、史跡探訪（宮之城方面）には会員外からも多数参加頂き、これも町民のこの会に對する関心と期待の表われと意を強くしている所です。

なお、私達の郷土の史跡顕彰への積極的な努力は市当局にも理解して頂き、市の補助金と会員の献身的な奉仕によって、他に類を見ない立派な史跡案内標石柱の竣工となりました。

会誌「庄内」第四号の「庄内空襲をふりかえって」の特集は市内外の史談会や郷土史を愛する人々から数々の賛辞を受けたことは特筆すべきことであります。

原稿をお寄せ頂いた多くの皆様に紙上ながら、心から厚くお

礼を申し上げます。

年月日	曜日	諸行事	内容
4月23日	土	総会行事 講演	司会 萩原忠子氏 庄内を中心とした方言考 市園辰夫氏
6月8日	月	編集委	「庄内」編集方針、計画
6月22日	月	編集委	原稿集約（第一回）
7月20日	月	編集委	原稿集約（第二回）
8月3日	月	編集委	原稿集約（第三回）
8月6日	木	講演会	殉難の僧釋無涯 尼子章長師
8月17日	月	編集委	編集事務
9月7日	月	編集委	原稿読み合せ
9月12日	土	城山探訪	学校週五日制協力行事（坂元徳郎氏外3名参加） 文昌堂へ
9月24日	木	会誌四号原稿発註 講演会	戦前、中、後を生きてきて 大河原光広氏
10月3日	土	講演会	大河原光広氏
10月15日	木	編集委	ゲラ刷り校正
11月7日	土	理事作業	庄内ふる里祭展示（歴史コーナー） 会誌販売（一四〇部）
11月8日	日	理事事務	庄内空襲をふりかえって 発表 清水貞三氏
11月24日	火	昔を語る会	於帖荘園 参加24名 発表 清水貞三氏
11月27日	金	後、懇親会	於帖荘園 参加24名 発表 清水貞三氏
11月29日	日	会員作業	史跡案内標石柱建立起工（石黒石材店有志9名参加） 釣磯院、稚児校、山久院
11月29日	日	会員作業	史跡案内標石柱建立起工（於帖荘園）
12月3日	木	竣工式	史跡案内標石柱建立起工（於帖荘園）
12月7日	月	編集委、理事会	年末反省会（於帖荘園）
12月12日	月	編集委、理事会	会誌五号編集方針、三月史跡探訪計画
2月15日	月	編集委、理事会	理事参加（五名）於庄内地区公民館
3月20日	土	城山創生意見交換会	理事参加（五名）於庄内地区公民館
3月20日	土	宮崎庄内会	宮崎へ、会長以下一名参加
4月5日	月	理事作業	釣磯院敷地測量（三名）
4月9日	金	史跡探訪	宮之城方面
5月10日	土	理事会、編集委	総会行事、会誌五号特集
5月15日	土	会計監査	監査（藤村、津曲氏）会長、書記、会計

特別寄稿

庄内開田の父

坂元源兵衛翁（その二）

妻ヶ丘 瀬戸山 計佐儀

三、源兵衛の鴻業

(5)、開田事業の功績

源兵衛等が首唱して庄内観瀾書院を創立したのは明治十八年であったが、その翌年には今の関之尾の南前水路から取水して川崎八町歩を開田し、農民の生活を潤した。そして、それに引続いて住民の要望により、関之尾開田を計画して、二十年頃着工した。この関之尾二十町歩の開田事業は十年の歳月を経て竣工したので、六十戸の農家はその恩恵を受けるに至った。その寝食を忘れた絶倫の精力と事業意慾、抜群の智力は、誠に驚嘆に値する。

この用水路は滝の上流から取水する隧道を掘削し、のちのち

は小田川を越えて今屋、谷頭や野々美谷に及ぶ開田計画であったが、一帯は白砂とボラ土で、破壊し易く水洩れする特殊土壌地帯であるため、工事は難工に難工を重ねた。まず庄内川の関之尾の滝の上流から二百間の隧道を掘削し、関之尾まで水を引くのに十年もの年月を費やした。関之尾開田の成否は滝の上流の隧道の成功か失敗かにかかっており、当時資金のなかった源兵衛は土地の関係者と協議の上、成功の暁には一畝歩当り三円の報酬ということで契約した。そして人夫賃は、工事終了後に精算することで関係農民たちが人夫で働き、愈々隧道掘削を開始した。そしてそれは、稍大き目に掘り始めたが、それは関之尾だけでなく将来下流今屋方面にも送水開田する用意のためであったのである。

滝の上部の湾曲した所を取水口とした隧道工事は半ば順調に進行したが岩盤にぶち当り、工事は難渋を極めた。しかし、これも掘削しないと他に取水の方法はないので、兵右衛門や貞助などの迫田家と相談の末、不撓不屈の精神を以て初志貫徹を期し、岩盤掘削に三年の歳月を経て漸やく岩盤部分を克服した。隊道の高さは五尺、幅は三尺である。当時は現在のように立派な文明の利器はなく、人力とノミだけの作業だったので工事の進捗は思うに任せず、人間の意志と岩石と何れが固いか、正

に両者の根比べであった。しかし遂に人力が勝利したのである。

ところが岩を掘り抜いて土砂の掘削に掛った途端に上部の土砂が崩壊して、隧道を埋め尽して進退に窮したが、その重い土砂の除去にはキンツ（山芋を掘る道具）を多く使用して木の根を切り、隧道内の土砂と共に落し、そこから南に向け土砂捨て隧道を掘削し、女滝の下に出てここからその土砂を投棄した。重い土砂を除去するために上部の土砂を取り崩した所に穴が開いて、遂に青空が見えて来た。それは岡の上の窪地に当る所であった。

岩石の部分と軟土の部分とが百間（約二百メートル）あるし、摺鉢山の下方は石で張り切って作り、上から更に土を運んで埋めた。これ等のことで工事は予想外に多くの労力と日数を要した。

この工事には約十年の歳月を要したが、これも関之尾の農民たちが自分等の土地を開田したいという一心からの協力の賜であり、完成の喜びは一通りではなく、着工以来の一方ならぬ辛苦の末、明治二十九年に美田二十町歩が造成されたのであった。

源兵衛は更に工事を上の段迄一気に貫通すべく高低の差を測量し、岡の中腹を回って水路開削を進めた。そして既に現在の

山之神社のところまで進んでいた。

(6)、前田正名への協力

時恰かも大臣の陸奥宗光と意見が対立して農商務省の次官を辞し、元老院議員に勅選されてはいたものの閑暇を啣っていた鹿兒島出身の前田正名まさなは、全国を行脚あんぎゃして産業開発に日夜を分たずに精励していたが、三十一年に宮崎県下の開田事業を計画して先ず高木原用水路事業を計画したが、余りに経費が莫大のため断念し、県庁を訪ずれ、土木課長の塚本常哉に相談したところ、高崎と金田かなだに適地があると推薦されたので、早速測量を開始しようと計画中に、前田の共鳴者だった庄内村の茶業者・南崎常右衛門が源兵衛のことを話した。

土地の名望家、坂元源兵衛は、先述の通り十年來谷頭や野々美谷方面の開田計画を進めて計画以来既に六千円を投じていたが、工事の困難と資金不足のため事業遂行に難渋していた。源兵衛の計画では、その用水路事業を本格的に遂行すれば、三、四万円を投資して約五百町歩の開田が可能の見込みであった。

前田は南崎の仲介で直ちに源兵衛に会い、現金五千円と開田の報酬八町歩の外に関之尾には永久無料で前田用水路から給水するという条件で権利を買収した。

前田の開田事業に対しては源兵衛もその子の英俊も全面的に

協力したが、しかし前田は必ずしも源兵衛の進言を採用しなかった。田舎者の考えとして、その着想と技術を蔑視した節が見られる。

いわゆる前田用水路の工事は大事業であり難工事であった。そして地区農民たちはその恩恵を受けること極めて多かつた。そしてその功労は稍もすれば独り前田正名一人に帰せられ勝ちであるが、その計画は源兵衛の発想に基ずくものであり、その工法に於いては前田方式は殆んど失敗に帰し、地質を知悉していた源兵衛の水流し工法に因つて初めて事業は成功を見たものであるから、資金こそその大部分を前田が調達したものの、功績の半分は源兵衛に帰せらるべきものであろう。

この大事業が完工したのは明治三十五年であったが、源兵衛の齢は既に六十二歳に達していた。当時は人生五十年にも達すれば、楽隠居して余生を樂しむのが常であったが、彼はこの年にして小田川のほとりに隠棲した。しかし発明利発の彼は水車を考案して自作し、自家の飯米を精白すると共に近隣農家の分も精米して喜ばれた。

(7)、三島地頭の遺徳碑建立

都城地頭の三島通庸は明治維新の版籍奉還後に赴任して来て、庄内の開発に偉大な功績があったので、源兵衛はその顕彰、報

謝のため石碑の建立を思い起って、直接地頭の身辺にあって勤仕した彼は、同じく良く地頭を知る区民を多く集めて座談会を開き、その話すことを子の英俊に記録させた。



三島通庸遺徳の碑

そして英俊はそれをまとめて碑文の原案を草し、これを庄内出身の岩満仲太郎大佐が漢文で綴って更に庄内出身の宮越正良警視が墨し、それを関之尾石に刻んだのが庄内小学校正門右側に建っている「遺徳の碑」であり、その篆額は明治時代の政治家で總理や大蔵大臣などを務め、わが国経済の発展に功績の大きかった鹿兒島出身の公爵、松方正義の筆に成るものであった。

建立の年月は明治四十一年四月である。

四、彰徳

(1)、陶像

源兵衛は隠退十五年後の大正五年七月二十二日、溘焉しうえんとしてこの世を去った。享年七十七歳といえど、當時は長寿であった。墓は庄内オミケン（御妙見）墓地にあるが、今は坂元家の納骨堂内に合祀されている。

彼の逝去後十七年たった昭和八年に黒田甚兵衛なる石工がいて、彼は他所から移住して来た仁じんであったが源兵衛の業績と遺徳を聞いて痛く感激し、これを顕彰すべく、都城小松原に窯場を持っていて当地方で著名な陶工に依頼して、源兵衛の陶像を建立したいと提唱した。（当時小松原に窯場を持つ陶工は、伊集院の苗代川焼の流れを掬む朴休丹はくきゅうたん、後に飯田直助であったが、飯田は陸軍少佐だと偽ったり金泥を塗って焼く凡俗の焼物を焼いていた。しかし、その何れであったかを確かめる便縁よすがは今はない）。

この企画に同調したのは源兵衛の恩恵を多大に受けている田人ひと（同一水系の水田耕作者）たちで、親愛会と土地の青年会の若者衆も一も二もなく賛同して、関之尾の滝の西の岡（今は運動公園）の上に建設した。

「庄内開田の父・坂元源兵衛翁」は袴を着した等身大の陶像



坂元源兵衛翁の陶像

で東方を向い、地区農民のために生涯を捧げた開田を眺めて会心の笑えみを湛たえているように建っている。

しかし、以上の通り文献などにも見え人にも語り継がれて来た黒田某の建立説は誤伝であるとする異論が最近出て来た。庄内居住の七十歳、坂元清景氏によれば、昭和三十年に五十五歳で没した父一二は須木村の生れで関之尾に住み、源兵衛の絶対的な崇拜者であり英俊翁の県会議員、国会議員出馬の際には常にその参謀であったが、当時用水路を利用する田人たちが集落毎或いは個人間で水争いが断えなかったのを一二が憂慮して、昭和六年の頃、皆が仲良く助け合っているよう関係農民に呼びかけて、二百余人を擁する庄内親愛会を結成し、推されて彼は

会長となり、汾陽栄一（昭和三十六年没）が副会長兼会計となり、陶像を建立したのは昭和八年のことであった。

清景の子供時代の記憶によれば、この親愛会で銅像建立の議が起つて度々坂元会長宅で協議が催された。当時上方から来て関之尾居住の黒田甚蔵なる石工がいたが、彼は陶像に関する知識もあつて莫大な経費のかかる銅像よりも陶像がよいと話したので、小松原の陶工に依頼して陶像を焼いたという。

陶工の朴休丹は信仰心も厚く、一メートル高さの大きな華瓶の小松原焼を市内の小学校や県立の中等学校、主要な神社、仏閣に寄進した人であった。彼は朝鮮の役の後に島津義弘が招聘して伊集院の苗代川に居住させ、士族の待遇を以て焼物に専念していた陶工の末裔であり、明治維新後に禄を離れて都城に移住して来て、小松原に上り窯を設けて焼いていたので、恐らくはこの陶工の作であろう。朴は戦時中に日本姓に改めさせられて田中姓となり、次男正弘は都城年見川の水を利用して養鯉業を久しく営み、その組合長を二十年続けていたが昨平成四年に死亡し、長男某は宮崎の月見ヶ丘で小松原焼を製造して九州一円に販路を拡げている。

子供の清景は、藁に包まれた陶像が多くので地区民に見守られ、地元の青年男女の手で現地に運ばれて行ったのを目撃しており、

除幕式典も盛大であったが、父の一二が会長だったので、当時小学四年生だった清景と二年生だった妹のキリの二人で除幕の紐を引いたことを昨日のように記憶しているという。

そして沢山の来賓の中には、源兵衛翁の長男で元代議士の英俊を初め、清水清次、蒲生才蔵、東喜之助郡長、池田募県副議長、湯之前庄内郵便局長らが居られたという。祝賀会では太鼓三味線が鳴り響き、唄と踊りが続いてナンコ大会も催されて大賑いだったという。無論当時の新聞にも写真入りで大々的に報道されたそうである。

これらのことを目睹した坂元清景が昭和六十年のころ、度々源兵衛翁が夢枕に現われて寝苦しい夜が続いたので、関之尾に行つて見たら陶像周辺の樹木の枝葉が覆い被さっていたので、早速枝拂いしたり掃除をしたりしたところ、その夜から安眠出来たという。

(2)、川上神社

源兵衛の開田は川崎を初め、関之尾その他に多く、亦、前田用水路工事の大事業協力など多大なものがあつたので、区民は齊しく彼の遺徳を偲んで陶像を建立したばかりでなく、関之尾の川上神社に神として合祀したのは昭和三十一年七月のことであつた。

研究

庄内史跡探訪（その五）

東区 坂元 徳郎

庄内史跡探訪を続けます。

番号は創刊号からの通し番号です。

四十六 山田別荘跡

下川崎の集落に北面する母智丘の山裾にミッタレンタン（水垂れ谷か）と呼ばれている谷があります。急斜面をえぐったこの谷からは豊富な水が年中絶える事なく音を立てて流れています。昭和五十年頃上流水源地がゴルフ場として開発されるまでは付近の人達がそれぞれ竹樋やパイプで自家に引き込み飲料水や家庭水として利用していました。

大正の中頃、このきれいで豊富な水に目を付けたのが庄内の町で呉服屋を営んでいた山田善作氏でした。

氏はこの水を利用して人工滝や池を造成してその脇に別荘を

建て家族や従業員の憩いの場所としました。

当時こんな大掛かりな観光保養地を造ると言うことは大変珍しいことで近隣の人達を驚かせたと言う事です。

現在は一面杉山で当時を偲ぶことは出来ませんが庄内の言わば観光保養施設第一号として記録に止どめたいと思います。

なお山田別荘について快く取材に応じて下さった生き証人の一人山田芳郎さんが次のように話されました。

※ 大王町在住 山田芳郎さん（七十七才）の話

下川崎田中さん宅の南側山の斜面に母智丘の山を水源とする湧き水が今も音をたてて流れ下っています。昔からここを「ミッ



現在のミッタレン谷

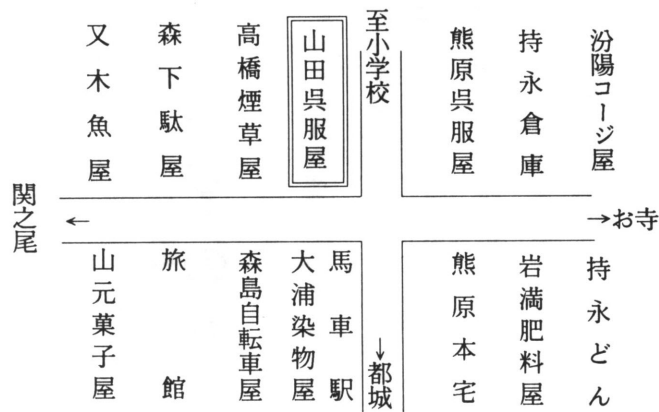
タレントン」と称しています。

川崎の多くの家は近ごろまでこの谷の水を引いて家庭用水に
していました。近ごろ母智丘ゴルフ場が出来て薬剤散布の関係
もあり飲料水としては利用しなくなりましたが今でも豊富な水
が流れています。

大正八年、私の父善作がこの豊富な水に目を付け保養施設の
建設を思い立ちました。

私は善作の末っ子
で当時3才で事のい
きさつはわかりませ
んが語り伝えられて
いることをお話しし
ます。

私の家は庄内の町
の十字路、現在の本
商店のところで呉服
屋を営んでいました。
今の山本陶器店の所
は熊原呉服屋、その
筋向かいは熊原本宅、



当時の十字路附近



山田別荘の人工滝

徳永酒店の所は大浦染め物屋と馬車駅でした。

当時庄内の町は大変賑やかで山田や西岳の人達も庄内に来て買物をしていましたので日用品屋さんや軒を並べていました。呉服屋も何軒ありました。盆や正月は門前市を為すような賑わいを見せていました。

このような活況の中で父善作もある程度の財を為したようでした。店にはたくさん売り子の姉さん達や小僧さん達がおり忙しそうに働いていました。

父はこれら従業員の慰安の場所を兼ねた別荘造りを始めました。いわゆる「ミッターランタン」の豊富な水を利用して人工的な滝を造り楽しもうと言う訳です。谷の上のほうから横のほうに水を誘導して岩盤をうまく利用して滝を造り下には大きな池が出来ました。そして噴水も出来ました。キット鯉やあひるもいたと思います。

そして今は田んぼになっていますが谷の出口の南前用水路の縁に家建てました。人々はここを山田別荘と言いました。

現在あちこちに保養地が出来て人を楽しませていますが、この時代父がどんな考えでこれを作ったのか判りません。完成したときは多くの人達が見に来たと言います。今様で言うところ「庄内観光保養地第一号」と言う事でしょうか。

その後しばらくして日本全土を震撼させた大恐慌が襲来しました。山田呉服店もそのあおりを食らって倒産しました。

そしてこの別荘も熊原どんに売却し私達は都城に転居しました。私が庄内尋常高等小学校高等科の時でした。その後この別荘は「熊原別荘」と言うようになりましたが、これもいつのころにか解体され人工滝も無くなりました。今は滝の上部にあった展望台の横の大きな岩がそのまま昔の名残を止めています。

四十七 庄内観瀾舎跡

庄内小学校下、現農協敷地南端の石倉の建っている所に庄内観瀾舎がありました。

観瀾舎の西側は釣墺院と言う古いお寺の跡で苔蒸した墓石が林立しておりその中を観瀾舎に通ずる細い道がありました。

鍵形に建てられた細長い二棟の舎屋は剣道場と柔道場で、それぞれ二十坪位の広さだったでしょうか。

裏は直ぐ崖が下っており生い茂った大きな孟宗竹が舎屋を包み込むようになっていました。

毎週土曜日になると都城に通う庄内の中学生が集まり上級生の指導の元で厳しい心身の鍛練が行われました。そしていわゆる国家有用の幾多の先輩を世に送り出して来ましたが、太平洋



観瀾舎跡（現在農協石倉）

戦争終結と共に学校側の強い指導もあり、約六十年間に及ぶ観瀾舎の歴史の幕が閉じられました。

※観瀾舎の事について筆者のごく見近かにある資料や先輩からお聞きした事等薄くなった記憶を辿りながら私なりに纏めてみました。

庄内観瀾舎について

一、郷中教育

明治維新の大業を成し遂げ、新しい日本創出の原動力となった幾多の志士のうち、その主導的役割を果たしたのは我が薩摩藩の人士でありましたが、これらの人士を養成して世に送り出したのが、いわゆる薩摩藩の「郷中教育」の成果によるものであった事は広く知られているところです。

この「郷中教育」は、ある限られた区域（方限）毎に、武士の子弟が自主的に自治組織を作り、武士としての心身鍛練と団結心を養い国家有用の人材養成を目的として運営されて来たもので、その組織の掟は極めて厳しく、厳格な長幼の序のなかで、質実剛健の気風醸成には特に力が注がれ、いわゆる薩摩気質の根源をなすものでありました。

二、創設の気運

我が庄内に於いては、明治二年鹿児島から三島通庸公が地頭として赴任され、役館を城山の下に構えられて、主に土木事業の推進、産業の奨励、教育の振興など、庄内新郷設立に努められ偉大な業績を残されて明治四年東京に移されましたが、明治三年には鹿児島から三原叢五先生を招聘し、現在の末原齒科の

所に学舎（寺小屋式）を設立されて大学、論語などの素読、剣道の授業などを行い庄内の人材育成に尽くされました。

この三島公の薫陶を享け、又三原先生から指導を受けた我が庄内の先輩達は、「郷中教育」の中で成長された両先生から直接指導を受けたことにより、その思想信条を自然と享け継いで育ったであろう事は容易に推量されますし、庄内観瀾舎もこのような土壌の中でその創設の気運が高まってきたものであろうと思われます。

三、観瀾書院の創設

創設についての細かな資料は見当たりませんが、三原先生から直接指導を受けた私の祖父坂元英俊（文久三年生、昭和三十一年没、九十四歳）の回顧録の中に次の記事が見えますので転載します。

「明治十八年丸目健蔵、満木藤蔵ノ諸氏ト共ニ庄内村教育振興ノ道ヲ立テ、川崎分教場ヲ廃シ、同家屋ヲ移転シテ観瀾書院ヲ建ツ。院長坂元源兵衛、副院長丸目健蔵、満木藤蔵、教師島田丑弥太、杉村実徳、桂木弥一郎、堀 愿、坂元英俊ナリ。コレ即ち今ノ観瀾舎ノ嚆矢ナリ。」

※「観瀾舎」の名称の意味について

漢和大辞典によりますと、瀾とは「横に波頭の連なるなみ」また孟子の詞に「必観其瀾」＝必ず其の瀾を観よ とあります。この詞には前後があつて、これを要約すれば「望を大きく持てば持つほど小さな事をなおざりにしてはならない。」となりましようか。

従つて、観瀾舎とは大志を抱く青年たちが将来に向かつてその基礎的学習を行う舎と言う意味で名付けられたものと思ひます。

四、舎屋の場所

明治五年、明治新政府による学校制定令により庄内の郷校（小学校の前身）が設立された時、三原先生は初代校長に任用され、それまでのいわゆる「学舎」の舎屋は川崎分教場（共立学校か）として移転活用された様です。その後、明治十八年、観瀾書院の創設に伴いこの舎屋として再び移転されたもの様であります。

当初の舎屋の場所は、城山下付近とありますが確かな場所は分かりません。その後いつのことか分かりませんが、現在の農協支所の南側、釣璜院墓地東側の敷地に移され、舎屋も柔道場と剣道場兼学習室の二棟に整備され（当初より二棟だったかど

うか不明)、名称も「庄内観瀾舎」と改称されて、向学の子弟の勉学の場或いは心身鍛練の場として活用されて来ました。

(この時改称されたものか、どうか不明)

五、運営の変遷

創設当時の観瀾書院においては、数人の教師が小学校を終えた子弟に中等の勉学指導をしていたようですが、明治の後半頃になりますと、都城中学校、次いで都城商業学校、都城農学校と公立の中等学校が創設され、庄内からもこれらの学校に入学するいわゆる「中学生」が現出し、「庄内観瀾舎」も自然的にこれら「中学生」を対象とする自主的な集会、鍛練の場として変貌してきました。

明治の終わり頃から大正時代、昭和初期の頃までは、主に学校の予習、復習など学習を中心として運営されていたようですが、日本が軍国主義一色に塗り潰される昭和の動乱期に突入しますと庄内観瀾舎も自然に国策に沿った方向で、厳しい精神鍛練を主軸とする運営に変わって参りました。

六、戦時中の運営

集会は毎週土曜日の午後、全員が集まり「観瀾舎精神」を朗



明治42年の観瀾舎生

唱して始まりました。記憶が薄れましたが大体次のようなものでした。

観瀾舎精神

国家的観念を得せしめ、国家有用の人物をつくる、即ち人間養成にあり

一、質実剛健の人たるべし

一、リョウレイ勇健の人たるべし

一、豪気木訥の人たるべし

一、不言実行の人たるべし

一、忍耐果断の人たるべし

朗唱が済むと上級生の指導の元で柔、剣道による厳しい鍛練が行われました。特に夏冬の猛稽古は、他の類似団体の追隨を許さない激しいもので庄内観瀾舎の名声は広く郡内を風靡したものでした。またこのスパルタ式鍛練を耐えぬく観瀾舎生は、これを大きな誇りともし、軍国日本の中堅として生き抜く自信を深めたものであります。神社の清掃も観瀾舎生の鍛練の一つで日曜日は朝暗いうちから眠い目をこすりながら諏訪神社の境内を掃除したものでした。

また月に一回ぐらいは観瀾舎精神注入という鉄拳制裁があり、兩戸を閉め切った柔道場で、正座して並ぶ下級生に対し上級生

の容赦ない鉄拳が喰りました。また墓地や神社等寂しい場所への真夜中の肝試しもしばしば行われ、物に動じない豪胆な人間づくりも観瀾舎の運営方針の一つでありました。

特に師走十四日の四十七士吉良邸討ち入り記念の夜は「義士傳」なものがあり母智丘神社において一年間の総決算が行われ、真夜中の境内で激しい観瀾舎精神注入があり下級生にとってはこれが年間最大の試練の夜でありました。

帰着後は町長さんや先輩方の差し入れによる温かいゼンザイが振る舞われる習慣が続きました。

このような激しい心身鍛練の場としての庄内観瀾舎は戦時軍国主義下に於ける模範的な結社として高く評価され、幾多の先賢を輩出して来ました。

七、解散

昭和二十年太平洋戦争終結と共に、日本旧来の体制は大転換を余儀なくされましたが、庄内観瀾舎も当然その対象となり、学校側から解散について強い指導を受けることになりました。

昭和二十一年、中学五年生であった私達は観瀾舎の解散について何人かの有力先輩に意見を求めましたが、結果は「何とか存続すべし」が圧倒的でありました。

しかし学校側の指導は更に強く「旧態依然たる柔道、剣道は即座に中止すべし。集会については学校の許可を受くべし。鉄拳制裁以ってのほか。」と強く解散を求めて来ました。

このような状況の中で、毎土曜日の集会も従来のような厳格なものではなく、当時流行し始めた野球やラグビーの練習等で何となく時を過ごすやり方によって参りました。

昭和二十二年三月私達は中学を卒業しましたが、観瀾舎については正式に解散宣言をすること無く次の下級生山元一信氏等に全権を譲り舎を後にしました。

その後も一、二年間は惰性的に集会は続けられたようですが昭和二十三年に六三三制、男女共学等学制改革が実施され庄内観瀾舎も自然消滅の形で終焉を遂げました。

その後、放置されていた舎屋は現中学校敷地に移され学校施設として利用されましたが、時を経ずして解体され今は全くその形を留どりません。

あとがき

本稿は筆者のごく身近にある乏しい資料と先輩から聞いた話や、観瀾舎生としての自分の経験等を思い起こしてまとめたものです。

まだまだ皆さん方の手元には埋もれた資料や記憶もお有りと思います。みんなでこれを寄せ合い、より精密な観瀾舎の歴史を後世に残したいものと思います。

なお、昭和六十四年の早春、有志十人位で観瀾舎卒業生名簿作成に取り掛かりましたが七十%位の進行で現在頓挫しています。

頓挫の理由は、庄内出身中学生（中商農）全員が観瀾舎生でなくその確認が難儀なこと等です。

なお観瀾舎の当時の標板、神棚、書類が行方不明です。印鑑は私が保管しています。

四十八 庄内南洲神社の由来

庄内小学校正門前を左に折れて三〇〇メートル位西に進むと右手に大きな鳥居があります。そして一〇〇段位はあります。うか、急峻な階段を登り詰めた所に社殿があります。これが西区の鎮守様庄内南洲神社です。

まず、神社入り口に建てられた案内板を見てみましょう。

南洲神社の由緒

昭和二年は西南の役（明治十年の役）五十周年に当たり記念



南 洲 神 社

行事が各地で行われた。当時の庄内町を中心とした旧庄内郷関係者に、西郷南洲翁の遺徳を偲び併せて翁と死を共にした旧庄内郷戦没者の霊をまつり、これを後世に伝えようとの機運が高まった。

幸いにそのとき諏訪神社の改築があり古い社を譲り受け、加うるに棟梁の美技をもって旧城山の一角のこの地に願望の社殿が竣工したので、鹿兒島の南洲神社に分霊を請願して、昭和四年五月遷座が行われた。

祭 祀 者

西郷南洲翁他旧庄内郷戦没者五十六名

神社創建いらい住民厚く敬愛し祭礼とどこおりなく行われたが、過ぐる日中戦争および太平洋戦争に際し出征者の無事帰還を祈願し又、夏の六月燈や秋の相撲大会に近郊近在から老若男女あいつどい、喜びも悲しみもこの社頭で共にしてきた。しかるに五十年を過ぎた昭和五十三年十月思いもかけぬ出火により、社殿が全焼する憂きめにあった。しかし、永い年月朝夕親しんできた当西区に於いて、まもなく社殿再興の要望が起こり、協議して区民一同の協力を仰ぎ再建することになった。まもなく浄財結集して昭和五十五年十二月竣工し一同安堵することができた。以後わが西区の鎮守として崇敬するところである。

昭和六十二年二月一日

西南の役一一〇年を記念して

庄内町西区自治公民館建之

資料提供 故元国会議員 坂元英俊（所蔵）

以上が案内板の内容ですが、この内「鹿兒島の南洲神社に分霊を請願して昭和四年五月遷座が行われた」とあります。その経緯について述べます。

私 先年、老朽化した居宅を改築するに当たり、ガラクタを

整理していましたが押し込みの奥から「南洲神社諸関係帳簿」と書かれた蓋付きのがっしりしたけやきの箱が出て来ました。

中には、昭和四年、庄内南洲神社設立委員と鹿児島南洲神社事務所との間で取り交わされた分霊に関する書類等が詰まっています。

南洲神社といえは庄内町西区の鎮守様です。その鎮守様の創建由来について西区の人達は当然周知の事とは思いましたが念の為西区公民館長伊地知義夫氏に関係書類をお見せしましたところ、「実は神社創建について明確な資料が無くて困っていたところだった」と大変喜ばれ、早速前記案内板の設置を実行された次第であります。

これより先、この資料の発見については新聞でも報道され、多くの人の関心を集めました。特に鹿児島南洲神社ではびっくりされ、早速、宮司の鶴田正義先生を始め西郷南洲顕彰会理事長村野守治先生、西郷南洲顕彰館長児玉正志先生、神社の禰宜の方一名、一行四名の方がわざわざ庄内にお見えになり神社参拝の後資料の調査等が行われた次第であります。

このことについて鹿児島南洲神社宮司の鶴田正義先生が西郷南洲顕彰会の機関紙「敬天愛人」に「都城南洲神社について」

と言う題で寄稿されておられますのでその一部をお借りしますと

「南日本新聞に《都城南洲神社由来明らかに、文献見つかる》という見出しの記事が目に入って、思わずはっとした。いささか虚を衝かれた感じであった。というのも、これまで南洲神社といえば、鹿児島島の御本社をはじめ、沖永良部和泊町と山形県酒田市にある三社のみと思いついていたので、まさか隣県にあらうとは思ってもみなかった。誠に迂闊で不明を恥じるのみである。

記録によると昭和四年に創建されたもので、私が御本社に奉職したのが九年だからそれより四年前のことである。然も神社の書類はほとんど戦災により焼失しているので、戦前の詳細は知られていないものが多い。何はともあれこの都城南洲神社にぜひお参りせねばということになり……云々」

これによると鹿児島島の御本社の書類は戦災により焼失しており、庄内に南洲神社があることすら知らなかったということですから今回のこの資料は誠に貴重な資料であったと言わざるを得ません。

また「……このように短期間の間に再建されたのは、（注……昭和五十三年に消失、五十五年に再建したことを指す）住民の熱

意がいかに深いものかを証するものというべく、百余年経ても南洲翁への敬慕の念と、戦いに殉じた同郷先輩への畏敬の思いは脈々と引き継がれていることひしひしと感じた。…云々」

とあり、百余年を経た今でも庄内の人達の南洲翁や殉難者に対する敬慕の念は変わっていないことを感じ取って頂きました。

さて、それでは〈何故庄内に南洲神社か?〉ということですが、残された資料はこのことについて触れていませんので、勿論断定は出来ませんが、私なりに推測出来る二つの事について述べてみます。

その一、当時庄内町の各区にはそれぞれの鎮守様がありました。

例えば東区には豊幡神社、町区には八坂神社がありそれぞれの鎮守様として区民から崇敬され大切に管理されて来ました。そしてそこは区民の集会の場所であったり憩いの場所でもありました。特に夏の六月燈はそれぞれ趣向をこらして盛大に行われて来ました。そしてそれは氏子である区民の神社を中心とした心の結集の時でもありました。

ところが西区にはこの鎮守様がありません。西区住民の間に、鎮守様の必要性を感じ神社創建の機運が自然的に沸いて来たで

あろうことは、区毎の対抗意識が強かった当時の民情を察する時、容易に推測されるところであります。これは当初設立委員の全員が西区有志からなっていることから推測できます。

その二 明治二年都城地頭として乗り込んで来られた三島通



現在の社殿

庸公は都城の人士の排斥に遭い、やむなく庄内に役館を構えられて専ら庄内の町造りに情熱を傾けられたことは周知の史実であります。この三島通庸公に全幅の信頼を置き都城地頭として拔擢推挙したのがかの西郷隆盛翁でありました。当然ながら三島公が西郷隆盛を尊敬し心服しておられたであろうことは推測に難くないところであります。また三島公に直接仕えた庄内の人士が三島公を通して他郷の人達以上に西郷隆盛翁を敬慕したであろうことも容易に推測できるのであります。

この様な環境の中で西区の人達が特に西南戦争で多くの僚友を失い万死に一生を得て生還した従軍者の皆さんが、最も素直にそして最も身近かに思い付いたのが、西郷隆盛翁と西南戦争で戦死した僚友の霊をまつる南洲神社の創建ではなかったのでしょうか。(以上)

なお、南洲神社の社殿は、大正十四年たまたま建て替えられた庄内町社諏訪神社の社殿を譲り受け、有志の寄付により現在地に建設され、直ちに鹿兒島南洲神社に分霊を請願しました。しかし鹿兒島南洲神社からは「霊を粗末にして尊厳を失する虞れあり」と言う理由で許可して貰えず空しく四年が経過しました。

そして昭和四年、鹿兒島に人脈のある元国会議員、東区の坂

元英俊を設立委員に加えようやく分霊が成功したということでもあります。

いずれにせよ、我々は、我々の先祖が西郷隆盛翁を敬慕し、そして庄内出身五十六名の殉難者を丁重に慰霊してきた心を心として崇敬保存に努め、これを後世に引き継いでいく義務と責任を痛感する次第であります。

関係資料の一部



別紙南洲神社御分神願之件
承認致候三付諸事ハ御係諸
君御来社ノ上ニ御協議可申上候也

昭和四年二月廿四日

虎兒島市上龍尾町

南洲神社々務



坂元英俊殿
外ハ名



御分靈願

今般十年ノ役從軍者其他有志相謀リ當町
西區字内城一三二六番地御堂ニ建設ニ付
舊庄内御別紙幾死者御分靈相願ニ承
久保存崇教致度美同御承認致成下度
此段連君ノ以テ相願美也

昭和四年五月三日

清水 清次

棉田新之丞

浦生才藏

坂元英俊

東喜之助

南洲神社
々務所
中

本願之件承認ス

追而御分靈祭典ハ昭和四年

五月五日執行

昭和四年五月五日

南洲神社々務所



舊序内御我記者人名

棕田 司

福留源右卫門

鬼塚綱長

東野孝之丞

山元政九郎

山元市介

村田正作

秋永四郎兵衛

有田貞助

龜沢傳助

渡月山十郎

大峯猪之七

黒木才之丞

野口嘉太郎

梅村休藏

山下直助

外村清太郎

見玉甚之丞

丸目清作

満行太兵衛

池田重之

太田善太郎

池田藤彦

中村直右卫門

池田一三

松元傳右卫門

有島助右卫門

齋藤與八郎

齋藤伊左卫門

永山篤明

宮里直右卫門

佐藤善兵衛

推屋貞四郎

源田平右卫門

瀬戸口與之進

新田直右卫門

田中柙藏

立山行友

横川彌兵衛

園田柙助

山之上八郎

丸目助太夫

松浦小太郎

迫田休八

坂元正之助

牧五右卫門

時任行吉

森次兵衛

川崎藤四郎

池田善太郎

前田佐太郎

寺崎傳兵衛

桑山助七

折田十郎

榎正藏

拝啓

先設南洲神社并却町内丁且役

戰歿者中分靈之儀ハ首尾能ク

御鎮座祭終了相成リ有志者一統

ノ冲積神ニ達セシ中湯之ノ事ニ

存上依程々回中分靈預ニ對シ承認

申要求ニ別紙之通取計申候間

仰了知被下度在申答迄 敬具

昭和四年五月十日

南洲神社々務所

坂元英俊殿
東喜之助殿

蒲生才藏殿

南洲神社存神乃旧江内御十五段戦死者靈
申度并出費施費

五月三日庄内費一行表 掃部主、坂元英俊、内北信次、

一、金九千弍、 庄内、御城間自佛車賃

一、金四回五丁弍、 御城、靈岳間自佛車賃

一、金九千弍、 庄内、

一、金十八弍、 靈車賃

一、金十三回十五弍、 御存良勝列、庄内、

一、金十八弍、 靈車賃

一、金四回五丁弍、 伊地紙峻、土産物、菓子、一折

一、金九千弍、 靈車賃

一、金四回五丁弍、 南洲分靈所鏡代上宮店、

一、金九千弍、 庄内、

旧庄内御戦死者分靈所鏡代上宮店、

一、金三回

一、金三回五丁弍、 厨子三個代

一、金三回五丁弍、 片鏡三個、裏面刻字十五字代

一、金九千弍、 厨子包用布切代

一、金九千弍、 分靈所、表裏、裏、社務所油、

一、金二回、 タクシー二回分

一、金三回五丁弍、 香島中江、島林、惣宿、御神

一、金八回、 在作、券代

一、金三回弍、 東、西、分、宛、電、報、押

一、金三回、 香島島、御城間自佛車賃

一、金二回、 敷根、夕、食

一、金三回五丁弍、 御城、庄内、自佛車賃

昭和四年五月十日

一村會計部

安永城の縄張り図をよむ

若葉町（東区出身）横山哲英

一、はじめに

縄張り調査とは、草木生い茂る山中をくまなく歩き回り、そこに残された地形の中から、昔の城の姿を見出だしていく作業のことをいいます。ですから、そうした調査によってつくられた縄張り図は、当時の城の構えを「見る」ためのものではなく、「よみとる」ためのものなのです。

私達の住む都城盆地には、中世に築城された山城が数多く点在しており、現在、そうした城の縄張り図作成が徐々に進んできています。縄張り図が出来て、ようやく都城盆地の山城の複雑なつくりや、良好な保存状態が臆気ながら分かってきた、というのが現状です。

今回は、そうした山城の中から庄内町所在の「安永城址」を取り上げ、その縄張りをよんでいきたいと思います。

二、安永城の城域

現在、安永城もしくは庄内の城山と聞いて皆さんがイメージ

されるのは、忠霊塔の建っている本丸（内城）跡だと思えます。しかし、城として機能していた戦国時代（今から約五〇〇年ほど前）は、一体どの辺りまでが安永城の範囲だったのでしょうか。考古学では、そういった城の範囲のことを「城域」といって、城郭研究の中でも特に重用視しています。安永城の場合、「本丸（内城）」・「二之丸」・「取添」・「金石城」と、無名の二つの曲輪によって構成された主要曲輪群と、外堀によって確保された緩衝地帯を合わせた約七十九ヘクタール（図一）が、その城域であったと考えられています。ですから、本丸跡に立って北側に見える独立丘と、そのずっと北に広がる台地一帯が、当時は安永城であったわけです。



第1図 安永城の城域

庄内の乱の際、この地も戦いの舞台となりましたが、いずれの戦もこの城域の外で行われていることを考えると、わずかな数の伊集院軍が、数々の自然の要害を利用しながら、この広い安永城を守り切ったことが分かるわけです。

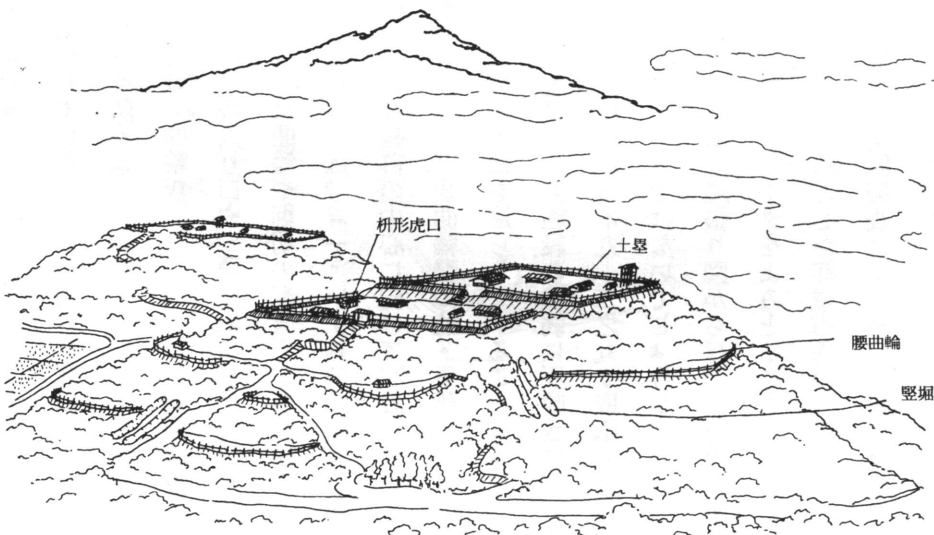
現在でも、諏訪原台地と安永城を切り離していた堀切（外堀）の名残りを見ることができませんが、広大な安永城の雄姿を保存・活用していくためには、今後、こうした遺構の整備・公開が必要となってくると思われます。

三、安永城の縄張り

さて、縄張り図からよみとることのできる（城郭を構成している）遺構には、どのようなものがあるのでしょうか。大まかに分けると、曲輪・堀切などの外柵と、郭・土塁・升形（虎口）・竖堀・腰曲輪などの内柵の二種類があります。

安永城の主要曲輪群は、「本丸」（図三のⅠ）・「二之丸」（Ⅱ）・「取添」（Ⅴ）・「金石城」（Ⅵ）と、無名の二つの曲輪（Ⅲ・Ⅳ）から構成されています。しかし、現在では、金石城の破壊がかなり進んでおり、昔の面影はなくなりつつあります。けれど、本丸をはじめとした残りの曲輪は、今も昔ながらの姿を奥深い繁みの下で保ち続けており、その保存状態の良さと遺構の素晴らしさは、国内でも有数のものだといわれています。

ます。また、城と諏訪原台地を区切る堀切（外堀）の残存状態の良さも考えると、安永城の外柵は、城として機能していた時



図二 安永城イメージ図

代の姿を、そのまま現在に伝えているといえるのです。

では、各曲輪ごとの保存状態はどうでしょうか。まず、本丸（曲輪Ⅰ）の場合、現在、忠霊塔が建っている平坦面（郭）につながる入り口（虎口）（図三の1・2・4・8・10）と、入り口を防御するために置かれた腰曲輪（5・6近辺と10・11近辺）、腰曲輪の間を断ち切って、敵が横に移動するのを防いだ堅堀（7・1近辺）などが分かっています。これらの遺構からよみとれるのは、本丸が、北西側に複雑な防御網を敷いた大口を、北東側に仮屋（平時の居館）からの登り口を備えた、かなり防御の固い城塞であったということです。

次に、二之丸（曲輪Ⅱ）は、現在、畑地となっている平坦面（郭）につながる入り口（虎口）（12・13・14）と、腰曲輪（15と14近辺）が残っています。それによると、二之丸の構えは本丸ほど堅固なものではないものの、東側に向けて何重にも腰曲輪を巡らして、警戒している様子が窺えます。

曲輪Ⅲ・Ⅵは、これまで絵地図等にも表れてこなかった曲輪ですが、この縄張り調査で、曲輪と曲輪の間を区切る大規模な空堀（16・17・25・26）の存在が明らかになり、独立した曲輪であることが判明しました。

取添（曲輪Ⅴ）は本丸と同じくらい残存状態の良い曲輪です。

ほかの曲輪では確認できなかった土塁（21・23）が西側を中心に築かれており、入り口も升形虎口（クランク状になって、敵の直進を防ぐ構造）（22）になっています。

金石城（曲輪Ⅳ）については、発掘調査の成果と合わせて、東側からの入り口や、腰曲輪などが分かっています。

こうした曲輪や堀切の配置や、各曲輪ごとの遺構から、総じていえることは、（一）いずれの曲輪も主要な入り口を求心状に（主要曲輪群の中心に向けて）設けていること、（二）備えの弱い部分（主要曲輪群の北・東側）には、空堀や腰曲輪、土塁などを何重にも巡らしていること、（三）城の増築過程が各曲輪の規模や防御施設の強弱に反映されていること（面積や防御施設の規模が、本丸↓二之丸↓取添・金石城の順で小さくなる）ということではないでしょうか。

このように、縄張り図からは、当時の様子を想像する上で重要な、数々のデータをよみとることができるわけです。今後、安永城をはじめとした都城市内の城郭は、こうした縄張り調査の成果と、発掘調査による補完を繰り返していくことで、当時の姿に近付けていくことができると同時に、郷土の歴史を物語る貴重な資料として、広く活用されていくに違いありません。

（筆者は都城市教育委員会埋蔵文化財調査員。）

安永城
 宮崎県都市市庄内町
 調査日 1991年11月30日～12月2日
 作図 八巻孝夫
 ※都市基本図 1/2500(昭和58年測量)
 を拡大して使用した。



第3図 安永城の縄張り

講演のあらまし

平成四年五月二十三日

演題 庄内を中心とした方言を考える

高城町文化財保護委員 市園辰夫

諸県の方言はいくらか異なり、アクセントも違うが、歴史的にみたさつま方言は、島津氏が三州の守護として任せられて以来、七百年もつづき、改易もなかったので言葉が固定して特異な方言となったであろうと思われる。幕府の隠密の潜人がむずかしかつたのも当然である。

意志の疎通を図るに全国共通の標準語が必要なことは言うまでもないが、感情を表わすには、その地方の方言ですばらしい実感を伴った表現となる。(不幸があつて悔みに行った時、「ごっすらゆねかんしたげなが」と、薬石効なく亡くなられたそうですを端的に言い得て妙である。「とっばかえっ逃げたが」「つがらんね話しじゃが」等等)。方言でなければ言い表わせない、心情をびったり表現できる方言、郷土の社会生活と

地方感情の累積された伝統のなかに生きてきたものであるから、ことばそのものが歴史であり、方言は無形文化財である、とまで言われている。

当地方は薩摩藩同様封建性の強い土地柄で、方言にも、身分差別的なもの、命令的なもの、男尊女卑の方言が多く産まれたのも特色の一つである。(相手によって敬語の使い方も異なる例)更に事例をあげて諸県方言の特徴をさぐる。長い言葉を短かく(加久藤、後藤等)短かい言葉に接頭語、接尾語をくっつけて意味を強める。(倒けた。たまがる等)、促音、重語、類似語、音韻の変化によるものなど。

身近かな具体的な話に、日常使っている方言を改めてみつめ直す機会となった。

平成四年八月六日

演題 かくれ念仏と殉難僧釈無涯

正定寺住職 尼子章長

薩摩の念仏禁制

浄土真宗(一向宗)が薩摩藩に伝わってきたのは、室町時代

中期といわれている。念仏禁制の宗教統制がとられたのは、戦国、江戸時代を通じて明治初年にかかるから、およそ三百年あまりの長い間、薩摩藩所領全域にわたって念仏弾圧の嵐が吹き荒れた。慶長二年（一五九七）島津義弘の一向宗禁制命につき、宝永六年（一七〇九）宗門改め方を設け、嚴重に取り締まられていく。水責め、火責めなどの拷問、入牢、闕所、斬罪、など悲惨な殉教史が綴られていく。

積無涯しむがゐの殉教

薩摩藩の念仏弾圧も、領民の念仏の声を根だやしできず、地下にもぐった信者達は生命を賭して法灯を守りつづけた。

本願寺の秘密布教の命を受けた了随は、万一発覚の場合の後難をさけるため、乗海寺積無涯と名乗り、安政三年（一七七四）大分日田から熊本を廻って薩摩川内地方に入り布教をつづける。椎茸講、仏飯講など薩摩領北辺部の門徒の教導に当った。今尚残る「かくれ念仏」は当時の布教のきびしさを物語っている。安政四年（一七七五）の春、師は薩摩藩の追跡を受け、飢肥領清武から天領であった本庄の宗久寺に潜伏したが、密告する者があって高岡から数十名の捕吏の追求を受け、宗久寺で自決する。安政四年五月五日、三十三才であった。

無涯師の墓は本庄宗久寺の境内裏にあったが、昭和四十五年

山田町正定寺創立八十周年法要に際し、正定寺正門前に移転した。

平成五年十月三日

演題 戦前戦後に生きる

郷土作家 大河原 光 廣

古稀を過ぎ、戦前、戦中、戦後を、今は昔を語る齢を迎えてと前置きしてその生い立ちを語る。台湾の台南師範に学び、卒業後は台湾で教員生活を送り、終戦によって引き揚げ、そして県内各小中学校で四十年に亘る教職生活が先生の文筆活動にいろいろな面で深く影響し、独特の作風を形成していることは否めない。

印象深い先輩として六年生時代の担任米丸先生、庄内中学校での教頭として指導を受けた高松先生、詩人の富松さん、鳥集さんとの出会い、いつの時代にも人それぞれの生きざまを教えられる。県北の松葉小・中校長時代に手がけた延岡の夕刊デーリー新聞の連載小説「山は緑に水澄みて」は、へき地の生活が、同僚、子供達、親との交わりが誠楽しく生き生きと描かれて

いる。

赴任のさきざきで、その地域の人の中にとけこみ、色々な人との出会いがもたれ、教えられ鍛えられてきた事など。また、台湾での教員生活をふり返る。今では怡幅の良い社長となり、村長となっている者もある当時の教え児たちが、夫婦を台湾へ招待して歓待してくれ今も文通を続けている。赴任した地を第二の故郷として人間同志のつながりを求めた、差別のない教育の理念は今でも、どこでも変らない。

普通の人間の日常生活の一コマ一コマを丁寧に写す、文章教室でもこれが基本ですと締め括る。



カライモ

庄内町情報

「八月豪雨・十三号台風」の産業被害とその対策

平田 和田 輝 男

戦後最大の豪雨と台風被害につきましてお知らせいたします。
一、降雨の状況

七月三十一日から八月一日にかけて九州南部を中心に襲った集中豪雨は都城市内での観測によりますと総雨量四五七mm日最大雨量三三二mm時間最大雨量五十八mmで非常に大きな雨量でした。

二、被害状況（旧庄内地区）市役所農地防災課調査

戦後最大の被害を受けまして、被害状況は水路・道路・農地・頭首工が約二五二ヶ所の被害額が約八億四千七百万円となっております。

内 訳

水路 一一三ヶ所 四億四千六百万円

道路 三七ヶ所 一億二千一百万円

農地 田（埋没・流失・畦畔） 六三ヶ所 一億五千九百万円
畑（畦畔） 三三ヶ所 一億七百万円

頭首工

六ヶ所 一千四百万円

三、復旧の対応について

庄内土地改良区で管理する幹線用水路が七水系ありますが、被害を受けたのは前田・南前・北前・宮島用水路で通水不能になりましたが、市当局（農地防災課）で応急工事を早急に実施されました。今後の復旧につきましては、市当局で被害ヶ所の現地査定（農水省・大蔵省）を受けまして順次予算の範囲内で本工事が実施されます。

○応急工事を実施した用水路

前田用水路 三ヶ所（関之尾二、千草一）

北前用水路 四ヶ所（関之尾二、西 二）

南前用水路 七ヶ所（上川崎五、平田一、乙房一）

宮島用水路 一二ヶ所（宮島）

四、十三号台風について

最大級の台風十三号の襲来により南前用水路の関之尾滝上の第二水門に南側崖が崩壊して大きな立木が相当倒れ、また、北前用水路も神田市営住宅南側のサイフォンから上流一八〇mが

再災害を受けて埋没し何れも通水不能になりましたが、市当局で応急工事をされて六日ぶりに通水しました。以上簡単に記述しましたが、被害個所が多いので復旧には或る程度の年数がかりますので、ご理解とご協力を願います。

(註) 筆者は庄内土地改良区理事長

庄内地区婦人会の集い

東区新穂 照子

私達婦人会は発足して三年になりますが、心の和を大切に共通の話題をとりあげ婦人の地位の向上をはかると共に地域住民としての横のつながりを広め、地域のために色々と努力していく事を目的にしています。

現在九つの地区の公民館の中の婦人の集まりで結成されております。残念な事に乙房地区だけが参加されていないので一日も早い参加をお待ちしております。

結成してまだ日が浅いので、目立った活動はしておりません

が、昨年は医療廃棄物処理場建設反対運動に積極的に参加し、住み良い環境づくり、青少年に美しい郷土を残そう、又は農業としての広い大地を守る事を目標に陳情にゆきました。更にあれ放題になっていた歴史的に有名な稚児桜児童公園の整備を市にお願ひし、昔を語る会の皆様と共に力を合せ綺麗にする事が出来ました。

城下町としての風格を一杯もっている庄内地域の景観づくり等も婦人の立場からビジョンを描きながら話し合い、あとに続く青少年のためにも、健康で安心して送れる老後のためにも横の連絡を大切に安心して生活の出来る地域社会をめざす事こそ、共通の話題であり原点ではないでしょうか。

天災だろうか、人災だろうか、気になる今日この頃の悪天候に、食糧危機にならなければと、思う程の農作物の無惨な姿であります。せまい空地でもせい一杯利用して自給自足出来る生活をする事も家庭婦人の知恵袋ではないでしょうか。

今年は長い人生経験の仲でこれ程大変な年はなかったように思います。

ある婦人の方が「このようなこっあ、神様がはらかいた、」のだと申しましたがここでの神とは自然をさしたものと思いました。そぼくな表現ですが、大切な言葉だと思いました。

庄内地区年齢別人口動態

庄内地区市民センター提供
H5.8.1

年齢区分	総数	男	女	年齢区分	総数	男	女
0	59	24	35	55	135	62	73
1	73	35	38	56	133	53	80
2	61	40	21	57	129	55	74
3	82	43	39	58	151	77	74
4	81	44	37	59	152	63	89
5	86	42	44	60	148	70	78
6	104	59	45	61	133	58	75
7	81	45	36	62	148	71	77
8	102	46	56	63	138	62	76
9	119	70	49	64	141	69	72
10	114	65	49	65	142	65	77
11	103	57	46	66	135	61	74
12	105	54	51	67	122	53	69
13	123	64	59	68	121	45	76
14	104	50	54	69	99	35	64
15	117	60	57	70	107	41	66
16	111	54	57	71	110	44	66
17	110	50	60	72	105	46	59
18	95	47	48	73	93	39	54
19	85	44	41	74	83	39	44
20	69	34	35	75	82	33	49
21	77	33	44	76	71	28	43
22	72	28	44	77	71	37	34
23	66	27	39	78	59	18	41
24	66	30	36	79	71	24	47
25	69	28	41	80	58	19	39
26	73	42	31	81	62	16	46
27	64	34	30	82	51	19	32
28	72	42	30	83	44	10	34
29	65	33	32	84	54	20	34
30	74	40	34	85	29	7	22
31	91	39	52	86	24	8	16
32	75	32	43	87	19	3	16
33	85	41	44	88	26	5	21
34	108	57	51	89	34	12	22
35	110	45	65	90	8	1	7
36	107	58	49	91	13	3	10
37	109	62	47	92	9	1	8
38	102	51	51	93	8	1	7
39	126	66	60	94	2	1	1
40	105	53	52	95	5	0	5
41	124	59	65	96	2	0	2
42	128	64	64	97	1	0	1
43	122	60	62	98	3	0	3
44	144	77	67	99	1	0	1
45	126	63	63	100	0	0	0
46	125	64	61	101	0	0	0
47	66	35	31	102	0	0	0
48	83	45	38	103	0	0	0
49	90	46	44	104	0	0	0
50	98	44	54	105	0	0	0
51	101	42	59	106	0	0	0
52	100	54	46	107	0	0	0
53	88	41	47	107超	0	0	0
54	101	49	52	不詳	0	0	0

地球の温暖化、経済優先のもたらした自然破壊のひとつかも
 しなければならないとおもいます。唯ひとつの地球です。大切にしましょ
 う。日に日に変わりゆく時代と共に私共は情報をしっかりと、とら
 えて問題が絶え間なくある中で人生を前向きに明るく生きてゆ

くために、より多くの友をつくり、公民館を心のよりどころと
 し、お友達をしあわせにしてあげる事の出来る自分になる事が
 大切ではなからうかと心に念じております。
 (註) 筆者は庄内地区婦人会長

庄内中学校クラブ活動の現状

町区 溝 口 修 一

平成五年度現在庄内中学校の、クラブ活動は、野球部、陸上部、サッカー部、テニス部男女、バスケット部男女、剣道部男女、バレー部女子、プラスバンド部の八つがありますが、全校生徒の三二八人の九五%がそれぞれの部かに入って頑張っております。残念ながら、過去強かった柔道部、女子ソフトボール部等は指導者がいないのと生徒の数が少ないため現在はありません。

平成五年度中体連の結果、優勝した部はありませんでしたが、全員頑張ったと思います。陸上の個人として上柳豊君が一五〇〇m全国大会十三位(四分七秒九六)には入りました。冬の駅伝大会では平成四年度には市大会優勝、県大会二位、九州大会八位というりっぱな成績を残しました。

本年も九州大会連続出場をと、一生懸命練習をしております。休みの日も正月も一人で毎日走っていますので見かけたら気軽に声をかけて下さい。

尚、体育大会が九月十九日(日)にすばらしい内容で無事終了しました。

平成五年度までの学校記録を次に載せます。これからも庄内中、よろしくお願い申し上げます。

各競技記録及び記録保持者

種目	男子		氏名	記録
	年	度		
一〇〇M	一	年	迫田貴洋	12秒8
	二	年	益留龍治	12秒2
	三	年	迫田貴洋	12秒1
二〇〇M	一	年	遠矢伸隆	27秒
	二	年	蔵満誠	25秒
	三	年	益留龍治	24秒3
四〇〇M	一	年	遠矢伸隆	1分0秒8
	二	年	高橋昭隆	59秒1
	三	年	高橋昭隆	57秒
八〇〇M	一	年	高橋昭隆	2分34秒5
	二	年	清水昭学	2分20秒7
	三	年	清水昭学	2分14秒
一五〇〇M	一	年	上柳豊	4分45秒3
	二	年	上柳豊	4分27秒9
	三	年	上柳豊	4分21秒94
砲丸投げ	一	年	関之尾高行	11M82
	二	年	関之尾高行	10M29
	三	年	関之尾高行	10M29
走幅跳び	一	年	徳留広幸	5M4
	二	年	蔵満誠	5M80
	三	年	堀竜二	5M96
走高跳び	一	年	森博幸	1M49
	二	年	森新二	1M65
	三	年	岡元二郎	1M80

種目	女			子		
	年	度	氏名	記	録	
一〇〇M	一	年	山元 佳代子		14秒3	
	二	年	山元 佳代子		13秒9	
	三	年	千代森 隆子		14秒1	
二〇〇M	一	年	山元 佳代子		29秒4	
	二	年	小久保 美香		28秒8	
	三	年	益留 紀子 小久保美香(シユーズ)		28秒9 29秒0	
八〇〇M	一	年	溝ノ口 景子		2分41秒2	
	二	年	松下 美代子		2分29秒6	
	三	年	松下 美代子		2分33秒	
砲丸投げ	一	年	馬籠 由紀恵		10M9	
	二	年	梅木 智子		10M50	
	三	年	吉田 美由紀		4M15	
走幅跳び	一	年	富満 智美		4M10	
	二	年	臼杵 真由弥		4M29	
	三	年	森美 幸		1M30	
走高跳び	一	年	宮島 歌子		1M34	
	二	年	有島 瑠美子		1M30	
	三	年	有島 瑠美子		1M30	

平成五年度 夏季大会結果より

六月十三日からスタートしました中体連も長雨に悩まされながら二十五日で全ての競技を終了しました。三年生には最後の大会となった部もあり、みんなそれぞれに精一杯頑張ってくれました。

◇野球部

一回戦 七対二で西岳に勝ち

二回戦 一対〇で姫城に敗れる

◇バレー部

志和池に二対〇

姫城中に二対一で敗れる

◇テニス

団体戦 男女とも惜敗

個人戦 女子は決勝トーナメントで西中に敗れる

◇サッカー部

中郷中に三対一で敗れる

◇バスケット部

男女とも姫城に惜敗

◇剣道

予選リーグ 一勝三敗

◇陸上

総合三位

陸上部県大会出場 健闘を祈る

出場者

短距離

四〇〇m 梅村一成

走り高とび

福永香織

清水洋子

長距離

三〇〇〇m 上柳豊

一五〇〇m 和田貴志

一年 上柳隆行

二年 松下孝一

三年 上柳豊

庄内小学校

庄内ミニバスケットボールクラブ

庄内小 岡田 新一

私が庄内小学校に勤めるようになって三年半が過ぎました。

大学を卒業し教職に就くやいなや、後援会の方に監督の依頼がありました。それはまだ、同僚の名前さえ覚えていない四月のはじめの頃のことでした。

その日から、毎晩のように「ぜひ監督をお願いします。」と後援会の方々が私の家や学校に訪れ、そのたびに「申し訳ありません。」と断っていました。しかし、結局その熱意におされコーチとして子供たちの指導にあたることになりました。

ミニバスケットボールの存在さえ知らなかった私にとって、初めて目にする子供たちのプレーには驚きました。「小学生がここまでするのか」と思ったくらい上手に見えたのです。

この年は東監督を中心に、溝ノ口コーチと私の三人で指導にあたりました。

次の年の平成三年度、私は監督になりました。東・溝ノ口両

コーチと三人で指導にあたりました。ひきつづき、平成四年度もこのスタッフで活動いたしました。

ところで、ミニバスケットボールのほかにも、野球や剣道、サッカー、バレーボールなどいろいろなスポーツ少年団がありますが、その活動する目的とはいったい何でしょうか。

私は指導者の立場でこう考えます。

- 一 健康な心と体を育む。
- 二 礼儀正しい心を育む。
- 三 仲間を大切に思う思いやりの心を育む。

とは言ったものの、果たして実際の指導はどうなのでしょう。か。昨年のある試合でこんなことがありました。

試合終了後、相手チームの選手たちがこちらのベンチにあいさつにきているのに、こちらのベンチには誰もいないのです。というのも、試合に負けた悔しさと腹立たしさで、監督の私はいすを蹴り、外に飛び出していったからです。なんと失礼なことをしたのか、今でも申し訳ない気持ちで胸が痛くなります。こんなことでは礼儀正しい心を育むなんて嘘になります。

今年度は、私一人で指導にあたっています。現在のところ、

男子十二人、女子二十八人、合計四十人で、一年生から六年生まで男女とも仲良く、楽しく活動しています。

活動は週に五日、一日平均約二時間の練習を行っています。前半の一時間は、走りこみや筋力トレーニング、その他の基礎トレーニングで汗を流します。後半の一時間は、パスやドリブル、シュートなど個人プレーやチームプレーを行っています。

そんな中で、私はよく後悔をします。悩みます。また、自己嫌悪に陥ることもあります。子供たちは一生懸命、精一杯やっているのに、ただただ怒鳴ったり、無理なことを言って感わせたり。ときには泣きだす子もいます。「どうしてもっと優しく言えなかったのか」「どうしてあんなにひどいことを言ったのか」と、自分を腹立たしく、なさげなく思うことが多々あるのです。

子供たちの指導を始めて四年目の今日。このような指導者として悩むこと、反省することの多い日々を送っています。しかし、いつも子供たちの笑顔に助けられ、また、子供たちの笑顔が見たくて、これからもさらなる努力をしようと思います。どうかみなさま、これからも庄内ミニバスケットボールクラブをよろしく願います。

(註) 筆者は当クラブの監督



平成5年度 宮崎県交歓大会「優勝」 (宮崎市総合体育館前にて)

随筆

私のふるさと考

宮崎市 坂元陽介

「出身はどちらですか?」と、社交辞令でよく尋ねられる。とりあえずは「宮崎市で育ちました」と正直に答えると、「ああ、そうですか」で、ほとんどの場合、話は終わってしまふ。

そこで、「でも、父の代までは都城でした」と言うと、「ほう、都城はどこですか?」。「庄内です」。それから相手がお心を開き、話題が広がっていくことが度々ある。生まれ育った土地を離れて都市に住んでいる人が、ふる里に強い愛着を持っていることがこんなときによく分かる。

いつの時代でも、若者がふる里を捨て、あこがれて都会に出ていくのは当たり前である。だれも引き止めることはできない。しかし、ふる里のことは決して忘れない。それは、育ててくれた親がそこにいるからでもなく、幼いころの風景が目に残っているからでもないと思う。今の自分があるのは、多くの先

祖がその土地で長い時代を生き抜いてきたという事実、つまり無意識のうちに「血」を感じているからではないだろうか。

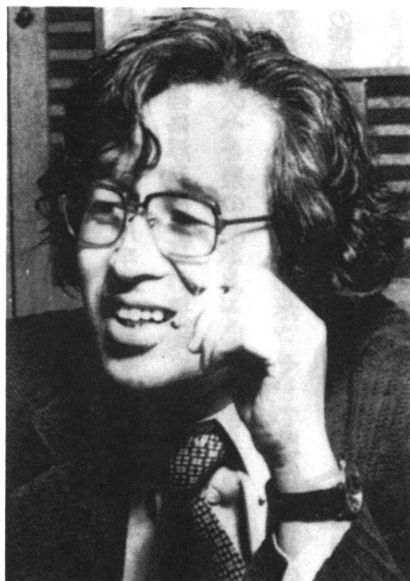
日本中、いや世界中にいま生きている何十億もの人が、人種、土地といった枠組みを超越して、たった二人きりの両親から生を授けられたということは奇跡に違いない。その両親も、そのまた先祖も同じように、奇跡的にこの世に出てきたのである。そう考えると、連綿とした「血」の濃さは人間の力の及ばない範囲にあり、いくら先祖やふる里を否定しようとしてもできはしない。私自身、庄内はふる里ではない。生まれはもちろん、育った場所も違っている。子供のころから盆や正月に来ては、退屈をしのいでいた知らない土地にすぎないのである。祖母が健在で、今でこそ両親も住んでいるものの、やはりふる里にはなりえない。だが、奇跡的にこの世に誕生してきた自分を意識するようになってから、庄内に「血」だけは感じるようになった。

「血」はだれのうちにも無意識に存在している。先祖たちが庄内でどういう生活を送ってきたのか、それが現在にどうかかわっているのか。そんな「昔を語り伝える」作業はただの記録にはとどまらない。庄内で生きてきた先祖を持つ人たちにとって、自分自信を知る上でも重要な、無意識に流れる「血」をはっ

きりと意識させる手助けになるはずである。

大河内昭爾氏によせて

町区 山元 昭平



平成四年十一月二十一日、庄内地区PTA大会が庄内中学校にて開催され、講師として庄内出身の武蔵野大学学長大河内昭爾氏が招かれ「人との出会い、本との出会い」と云う演題で講演されました。内容は大原富枝さんの「婉まことと云う女」についての話で盛会でありました。氏は多忙な中を、自分の郷里なる

が故に無理して帰って来られたのではないかと想像しています。「ふるさと」とは何か。遠くへ足を踏み出していない自分は「ふるさと」について改めて考えさせられました。

大河内昭爾氏とは幼い頃からの友人でいつも「昭爾坊ちゃん」と呼んで遊んでいました。私達の小さい頃は願心寺に日曜学校があり、四・五才の頃より姉に連れられてそこに行き、色々なことを学んだり、広い庭の花壇に花を植えたりして遊んだ思い出があります。また、日曜学校では西嶋さんの薩摩藩の「木曾の人柱」の話聞くのが楽しみでその日が待ち遠しくて、幼い子供心に強烈な印象として残っています。

大河内昭爾氏は庄内小学校から鹿児島二中に入学されましたので、都城の中等学校に入学した吾々とは分かれ分かれになりました。

戦後も時々逢ってはいましたが、じっくり膝を交えて歓談したのは五十六年の暮れ、ロイヤルホテルでの一夜でした。

それは、氏が宮崎日々新聞社の招きで、都城ロイヤルホテルで「戦艦武蔵」の著者吉村昭氏と共に講演にいられたときでした。宮竹繁美氏の世話で小学校時代の餓鬼友達、徳永至・萬代辰雄・坂元卯一・田中昭彦・椋田健一郎・女性側は坂元英子・横山節子・村井トシ子・新地芳子さん達に連絡をとり実現しま

した。スケジュール一杯で翌日は鹿児島県で講演という強行軍の氏の隙間を捕らえて面会を要請しましたが、彼もまた、旧友との出会いを懐かしく思われてか、吉村氏より前に「故郷忘れ難し」と云う演題で講演され一時間草々で切り上げられ、我等の前にニコヤかな笑顔を見せられたのがつい昨日のように思いだされるのです。

氏は令兄である前住職の風貌を思わせて、時々フツと首をか上げては伸ばした頭髪を片手で「サーッ」と掻き上げる仕草が彷彿として脳裡に浮かび上って来ます。テーブルを囲んで幼かりし頃の話が次々と泉の湧くように、続き、氏もいちいち相槌を打ちながら聞いて下さいました。そして氏の口からは流暢な文学風の言葉がとめどなく流れて懐かしさと喜びが胸一杯に満ち溢れました。アツという間の二、三時間でしたが、その間、講演会の主催者の方々は忽然として消えた氏を探し廻られたということを後でお聞きしました。「氏が語られた内容は生まれながらの願心寺の事から病身の為小学校を一浪して鹿児島二中へ入学した時のこと、小学校時代にオカズが卵焼であった自分の弁当と同級生のタクアンの下の御飯が黄色くなった弁当と取り替えて食べておいしかった時のこと等々でした。我らも又握り飯を高菜の漬物で巻いた飯の美味かったこと、そして又木さ

んの店のテンプラの味も忘れられないこと、そして氏の頭から冬でも湯気か舞っていたこと、などを話し合いました。

この様な幼ない時代の忘れられない思い出が氏をして「食食」と言う本の著述につながり、そしてあの文学的な才能が早大の國文学科へ行かshめて軽妙洒脱なエッセイストとして名を博したのであるうと思えます。

氏の「食歩き」の中には郷愁の想が濃く、特に「九州ラーメン」と「薩摩揚げ」がその柱をなしています。今は亡き向田邦子さんとの対談で「つけあげ」の味が忘れられないと話しておられるのも、あの素朴な食物が郷愁をそそったからでありましょう。『今度帰郷する機会があったらあの薄くて黒々としたヤツをたらふく食べたいと思っている。しかしそれは古ぼけた雑誌の紙で作った紙袋に詰め込み、油じみた見た目には如何にも品のないヤツで黒っぽい魚のすり身の小骨がトゲのようにピカッと光って見えるのが既に私の生唾を呑み込む様な幻想になっている』と書かれています。実にふるさとは懐かしいものであるしよいものです。

その後大河内氏より旅先や講演先からお手紙等を頂いていますが講演先の山形市の後藤又兵衛旅館からは当地の名産「ばんぎく」という漬物を送って頂きました。「東北のものが珍しい

だろうと思いましたが」と、氏独特の大形の文体で書かれてあり改めて喜びをかみしめ味わいました。

席の温まる時とてない忙しい人であり乍ら、思い出した様に手紙が届きます。きっと氏の心の奥では、今は亡き母上様の面影などが追憶されていていつも心の中では庄内に帰って居られるのではないかと思います。

しかし乍ら、実際には何かにかこつけないと、仲々帰省出来ないのではないかと推察しています。

氏が「現代文学地図北陸篇」で書かれている文中に室生犀屋の「ふるさとは……」の筆名の由来ともなった犀川のほとりの石刻された碑文「ふるさとは遠きにありて思うもの、そして悲しくうたうもの よしやうらぶれて異土の乞食カウイとなるとも 帰るところにあるまじや」の一節を引用しておられますが氏も又すさまじいまでの思いや断ち難いものがあるのでは……と思われるのです。

大河内昭爾氏は二つの出身地をもって居られます。出身地は宮崎県都城市庄内町であり、戸籍には鹿児島市新屋敷町の出生の記載があります。母親の体が弱く実家に近い鹿児島市を選ばれたのであろうと思います。講演先で出身地を問われ、鹿児島か宮崎かと聞かれた時は志賀直哉の事を例に引き出されるとの

事、志賀直哉が父の仕事の関係で宮城県石巻町で生まれ、幼年時代東京に戻ってまるとまるる東京人には間違いないが文学的には宮城県生まれになっていますので似たようなことだと、ひきあいにして弁解されていられる様です。

氏はいまや武蔵野女子大学の学長であり、又中央文壇に於いては食文学のエッセイストでもあり、若き文人達の登竜門の評論家でもあり博く氏の評価は高められています。又最近出版された「宮本武蔵の五輪の書」は氏がかって二中時代に剣道の選手として活躍された影響もその根底にあったかも知れませんが、現在経済界に於いても経営学の書として珍重されているとお聞きしています。

結びに今一番思い出に残っているのは六十一年秋、私の母の通夜の夜、氏は偶然にも帰郷されており、令兄の前住職と一緒に仏前にて焼香していただき正信偈の読経を拜まさせていただきます。誠に忘れ難く、深く感銘として心に残っています。最後に氏の益々の御活躍を祈念すると共に、庄内での再会を心待ちにしている今日この頃です。

心に残る二つのことば

鷹尾町（東区出身） 得能 哲夫

坂元英俊翁の業績、人となり、偉大さ、については、いろいろな本に紹介されています。「庄内の昔を語る会」第三号、町区、坂元清景氏の「坂元源兵衛翁の陶像」について、瀬戸山計佐儀氏の「都城地方史(一)」の中に「町村編成の再改正と新町村の誕生」庄内町の合併の歴代の村長、町長の中にも顔写真入りで紹介してあります。

英俊翁は地域発展のために、大きな仕事をされた方であります。その英俊翁と私たち子供のかかわりについて書きたいと思っています。

文章をつづるにあたり、子供の目線にそって書きたいと思いますが、失礼な考え方、言葉づかいになるかと思いますが、お許し下さい。

東区梶井馬場の私たち子供が（昭和八年頃、小学校二、三年生）親の許可を受けないで夜間外出が出来たのは、(1)夏祭（六月灯）(2)十五夜祭（綱引き、角力）(3)英俊翁から赤穂浪士の仇討の話を書く、この三つであったと思います。

私たちは、英俊翁のむずかしい仇討ちの話を聞く楽しみよりも、話が終わってバーさんがくださるお菓子を楽しみに、寒い夜（十二月十四日）も出掛けて行ったように思います。

お菓子を楽しみに集まった友だちも、今は年令が七十才前後になりました。街で会うと、大人らしい言葉で「長く会いますねでしたが、元気でしたか」と言いますが、次は六十年前の梶井馬場の子供にかえて、○○チャン、××チャンになってしまうのです。

英俊翁は私たちの幼な友だち坂元徳郎氏、守雄氏の祖父になれる方であります。徳郎氏、守雄氏が「ジサマー」と呼んでいたので、私たちも「徳郎チャンがえんジサマー」「守雄チャンがえんジサマー」と呼んでいました。

徳郎チャンがえんジサマーは、いつも客間にでんと座って、大きな声で客と話しておられるか、何かを読んでおられました。私たち子供にとっては、こわい人でありました。

英俊翁より赤穂浪士仇討の話以外に、勉強の話、外国の話、日露戦争の話、人間の道の話……等いろいろ話してくださいましたが、その中で心に残っている二つの話を紹介します。

(一) 挨拶あいさつについて

寒い日でありました。私たちが大きな火鉢のまわりに集まっ

て、がやがや話していますと「コラー何をしているか」頭の上で大声がしました。ジサマーの火鉢を見ると、火鉢に手をついてじっと見ておられました。みんなびっくりしてジサマーを見ました。ジサマーもじっと見ておられましたが、しばらくして

「何か忘れてはおらんか」

あまりの大声にびっくりして、みんな黙っていると

「挨拶じゃー。始めて会つたら、ちゃんと座って挨拶するの
が人間としての道じゃがネー」

私たちは、あわてて座って「今晚は」と挨拶をすると「今晚は」と笑って頭をさげられ、「足が痛くなったら足を出して聞きなさい。今日は何を話すかネー」と言つて大声で話してくださいました。どんな話をされたかは覚えていませんが「挨拶は人間としての道じゃがネー」の言葉は、今も強く残っています。

(二) 槍について

英俊翁の座っておられる横の欄間に槍がかけてありました。

絵本で赤穂浪士が仇討ちを終わつて帰るとき、みんな槍を持つている絵を見ているので、私たちは槍に非常に興味を持っていました。話が終わつて欄間にかけてあった槍をとり出して、見せながら、槍の刃の先きは折れないようにみんな気をつけるが、柄は忘れてしまう人が多い。柄に少しの傷があると、いざ

というときに折れてしまう。りっぱな槍は人間と同じ。

人間は頭のよい人は頭で、体の強い人は体を使って、世の中のために働くことが一番大切なことだ。「わかっているか」と大声で話されました。

そうして、槍やたくさんの刀を出して見せてくださいました。私にとりましたのは、一度にたくさんの刀を見たのは始めてであり、また、終わりだったと思います。

英俊翁から、人間としての大切な話をいろいろ聞かせてもらいました。梶井馬場の幼な友だちも齢をとり、次々と仏の里に召されて行くようになりました。

先日、納骨堂に亡き幼な友だちを訪ねて思ったのですが、あの昭和の始めの厳しい時代に、悪さばかりする私たち地区の子供たちを一人の人格者と認め、客間に通して、悪いことは悪いと大声でどなりながら、人の道を話してくださいました英俊翁に心から感謝すると共に、もう一度、仏の里で今は亡き〇〇ちゃん、××ちゃんみんな集まって、お菓子目当てでなく、今度は本気で赤穂浪士の仇討ちの話や人間としての道の話……等、坂元英俊翁をお願いしたいものだと思ふのであります。

短歌

つれづれに

町区南崎喜美

とことわに幸きくいませと寿がむ

今日をちぎりし若きいのちに

新婚の旅はいづこときく吾に

ハワイ迄とぞにこやかに言う

待ち待ちし娘の婚礼を終えしあと

はや寂しさをその母言へし

久々に逢い得し友と刻忘れ

秋のひと日を充たされており

亡き夫の三回忌の今日をしみじみと

電話で語る横浜の娘と

秋の風いささに泌む朝なれど

老も忘れて庭を廻りぬ

たれよりも健かなりし友の早

亡きを聞きたりわびしきろかも

友の死を人事ならじと吾思う

いつしか傘寿を越したる今に

いつになくきびしい台風の去りし後

白百合のみがさやけく立ちおり

よき嫁にいたわられつ老の日を

心安けく過す吾かも

青春の回想（その二）

（終戦、捕虜、引揚げを詠む）

東区 黒木 聖

戦跡にわれは立ちたり日は暮れて

祈りもむなし、屍いくつ

太き掌を空にまさぐる戦友の

握れる拳 なに握みるむ

逃れきて露にひれ伏す大地に

わが父母の 姿ぞ浮びくる

郭公の南の空に鳴き渡る

敦化の森に 暮せまる頃

父母の写真の温み肌にあり

いかでか生きむ凍てし満洲

苔水と芋虫バツタカエルなど

生の珍味でみな美味かりき

夜の明くる待ちて山路はより険し

今宵はいたく郭公の鳴く

雪はただしんしんとして降るものを

誰に唇噛み耐えてある身ぞ

汚れたる下着の内は瘦せこけて

帰国準備の友は狂えり

かろうじて乗り合ふ貨車の一隅に

身をよせ仰ぐ引揚げの秋

岸壁の黒松青く枝垂れて

小波かへす 引揚げの港

亡き友の面影顔ちては消えてゆく

復員の印を博多で押すとき

俳句

庄内俳句会

徘徊の黒蝶瞬発力あり

揚羽蝶かるく一浴びして行きな

児の唄を唄がつなぐ夕端居

朝戸繰る先づ第一に百舌鳥の声

曳かれたる犬の見上ぐる天高し

鱗雲くくりぬけたる飛行雲

秋燕や少し熱めの蒸タオル

糸瓜忌や二人二合の米をとぐ

銭もうけ受け取り書に萩こぼる

蝶とんで負けたくはなし実南天

岩佐 巴巨杏

福島 多峰

柿並 その子

馬迫 吐雲

和田 思峰

枯を添え秋と題する生花展

青い郁^む子^べ生け受付にかしこまる

実むらさき雨にも風にも負けざりし

外間も見栄もなきごと曼珠沙華

蠅螂の斧の先より枯はじむ

ひとりづつ土橋を渡る良夜かな

独りだけの秋を深める湯桶かな

句評する師の眼何とも涼しかり

神樹なる縦の倒れりちちろ鳴く

運動会巻きずしの芯片寄りて

森 真砂人

堂前道子

宮田安子

竹下 さつき

蒲生敏子

四季雑詠

上川崎 福島 ハル子（旧姓 横山）

星冴えたてつかめる程の母郷さとの空

真夜牛に餌を与る母の頬被

山蔭の霜柱踏み祖の墓へ

ふた親の待つバス停に帰省かな

帰省の夜名札を胸に同窓会

かなかなの啼き初む山路祖の墓へ

註 故郷には老いたる両親が元気でいます。たまには話をしに行きたいのですが、なかなか思う様に行けません。それでも帰省した時は、俳句を作る事にしています。俳句を見る度に、その時の情景が目に見えかぶからです。

保護司

西区 菓子野 美和子

報告書かき終えて新茶飲む

更生を励ます握手初来訪

初来訪更生ちかう直面したおもて

来訪日約してかえず臘月おぼろ

訪ね来ずひぐらし鳴きぬ信じ待つ

竹落葉今日も不在や手紙置く

交友も問題ありげ話聞く

騙だまされることにも馴れて葉鶏頭

往訪又往訪今は見守るほかはなく

報告書汗のしみたるペンのあと

サラ金を返す目途つき春の夜

黄色おうしょくに髪そめ来訪す春寒し

秋晴れや解除通知を手にとって

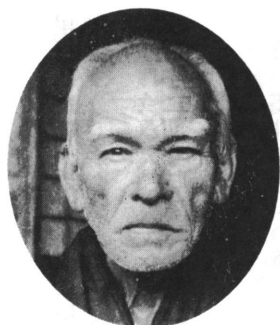
註 保護司を委嘱され、十二年になりました。過ちや罪を犯した人を保護し、更生させる役割です。

子や孫に語り伝える話

庄内の昔

東 区 椋 田 泉

はじめに



坂元英俊翁

これは坂元英俊翁の話を録音して記録したものです。

昭和三十一年七月六日、当時の教育長福重先生と私は翁の自宅を訪れました。

翁は当時九十三歳、目はご不

自由の様子でしたが背筋をピンと伸ばし正座された姿は正に矍鑠そのものでした。昔の話を記録に留めて置きたいと言う我々の趣旨を大変喜ばれ快く応じてくださいました。

テーブルを中にして福重先生が聞き役になり、私が横のほう

に陣取って録音をしました。翁は年を感じさせない大きな声で最後まで姿勢を崩さずに話されました。

記録は、話の重複箇所や雑音で聞き取りにくいところは私なりに手を入れさせてもらいました。

一、庄内新郷立のこと

明治政府ができた時分に政府には主に薩長の地方がでられて、伊藤博文・木戸孝允・山県・大久保などの諸先輩が政府を樹立された。西郷隆盛は陸軍大将としての位で鹿児島に帰り鹿児島が開発に力を注がれた。

島津侯は徳川家同様政治から引退されたため、藩主の代りに桂久武・伊地知正治等の先輩が藩庁に出られて政治をとられた。西郷は大参事であった。その時分鹿児島百二外城を開発するについては、都城地方が第一であるとして三島通庸を派遣されて



三島 通庸

開発に当らせた。三島通庸氏は戊辰の役に兵站官長として立派に任務を果たした人である。

三島 三島通庸氏が地頭として都城地方にいられたのは明治二年八月である。上庄内・下庄内・梶

山郷・三ヶ郷の地頭として都城に赴任されたところ、都城の先輩諸君は三島通庸氏を排斥し旧領主島津元丸候を置きたいと陳情した。而しながら鹿兒島藩庁の意見として今日は實際實力のある人間でなくては役人として採用するわけにはいかないと云うことになったので、都城地方の有力者たちの機嫌が悪く、三島通庸侯排斥の挙に出て役宅に石を投げる、門札を切る等のごと不穩の形勢であったので、三島通庸氏は下庄内を引き揚げて、上庄内に移られて上庄内の開発に力を注がれた。

三島通庸氏は毎日現地に出て開拓について指図をなされた。山を拓き道路を開拓し町をつくり、郷兵をおかれた。郷兵は四小隊三百二十人である。隊兵は鹿兒島藩の兵であったのか三島通庸氏の私兵であったのかわからない。鹿兒島から隊長が来られて兵隊の訓練が始められた。兵隊は郷兵で自らの生活をたてながら、訓練は三日に一日とか四日に一日とかの割り合いで行なわれ後は自活の為に農に励んだ。

村の開拓にはこれらの兵と付近の先住の方方を徴発して道路の開拓につくされたので立派な馬場並ができた。郷兵に対して屋敷として一反一畝、田五反、畠五反を割り当てられた。これが郷兵の生活の基礎となった。

役人としては小隊長福島直之進等四五人來られて政治をとら

れた。三百二十人の郷兵の居宅を建築するために鹿兒島から大工を連れてきて付近の樹木を切り居宅、納屋、湯殿まで建築して住ませた。これらの大工で上庄内に住みついた方々もある。三島通庸氏は土木関係が好きであったらしく道路の測量に毎日出られた。三島通庸氏が真先に始められたことが庄内都城間の旧道開拓であった。牧の原の坂から都城の嶽下橋まで四間通りの道路を測量し、郷兵と付近の住民を徴発して道路工事にあたらしめた。道路開拓については一間に一人づつ配置して責任を持たせて工事に当たらせた。嶽下の川から牧の原の坂まで一間に一人づつ配置したのであるから徴発した人数も大勢である。夜明け四時から工事にかかった。始めの合図には大砲を発砲して合図をした。工事は進められて夜が明けてみると既に道路ができていたと伝えられている。これが一番目に出来た道路である。東に向つては諏訪原、今屋、千草の上道路を通り、谷頭に大きな松があったがこれを目掛けて四間道路を開拓した。その次に志和池の下水流の川まで四間道路を測量しこれも完成した。それだけが三島候在職中に完成した道路である。その後に分まで四里の道路を測量した。庄内より関の尾の滝の下を通り国分に通ずる道路の測量をした。北は山田に出て小林に通ずる計画であった。その測量も半ば出来ていたがこれらの二大幹

線道路が着手にならないうちに上京された。明治四年八月頃である。

都城に連隊が出来霧島山麓にその演習場が出来た時分前田から小田川を通り西嶽に通ずる道路が県費をもって開拓された。新郷立ちの時分前田から先は田圃であった。

現在の坂元英俊宅前より天神馬場に通ずる道路は、その後の人々が天神馬場に出る為不便を感じ開拓した道路である。當時は有田三義氏の前を通って天神馬場に出た。

坂元源兵衛は西嶽から移住した。第四小隊に属し分隊長を勤めていたが専ら三島通庸氏の伝令役を勤め、度々鹿兒島藩庁との間を往復した。伝令役は柳行李に書類を入れて馬の背にて運んだ。これらの人は三人いた。秋永隼人・森速夫・坂元源兵衛であった。

慶応三年大洪水があつて関の尾より下流が荒廃に帰した。大飢きんになって住民は草根木皮を食糧として辛うじて生命をつないだ。関の尾より下流の堤防工事が始まった。技師は鹿兒島より来られた。徳田周作か河南某かはっきりおぼえていない。石工も鹿兒島より連れて来て堰提等を造った。この工事には女子も徴発された。赤染めの手拭い等をくれて働かされた。かくして関の尾より乙房の下まで両岸に堤防ができた。工事には一ケ

年位を要した。その後田圃が復旧して米が出来るようになった。

三島通庸氏は明治四年東京に出立された。そしてもう来られないと云うことになる。上庄内郷に移住して来た人で生まれ在処に引き揚げた人もいる。志和池・山田・丸谷・薄谷等より大分移住して来ていた。明治四、五年頃である。住宅等は、兵隊として招集されて来た人々に対して無償で造って与えた。昔からいた人々のことはわからない。

現在の役場の処が兵隊の調練場であった。兵隊は皆黒い服を着ていた。これらの服は鹿兒島より支給された。

當時の三島通庸氏は馬車に乗って時々母智丘等に行かれた。馬車は横浜から持ってこられたと言ふことであつた。馬は現在の奥田氏の処で飼つていた。

當時の三島通庸氏の事務所は一步園の上の処である。ここに広い家があつた。

町の人々で都城から移つて来た人々は南崎常太郎さんが知つておられると思う。

天神には、黒木実秋（兵隊・中尾原より移住）・瀬戸口彦四郎・入来甚助・鬼塚常秋（神官）・山元直蔵（渡司のところ）・新田伝右衛門・桂木左衛門・桂木与双太又前田九右衛門は東京から帰つて家をつくられた。前には若松通右衛門がいた。外山

忠兵衛は学校の品物を商っていた。黒岩常次郎は楠が官木として残っていたのを切りだして樟脳を造っていた。各々割り当てられた宅地山林に楠があったがこれは個人の所有ではなくて官木でありその官木は三島通庸氏から黒岩常次郎が貰い受けたと称していた。これは本人だけの言で果たしてそうであったのかどうか真偽のほどは分からない。坂元源兵衛の宅にも大きな楠の木があったが、これは三島氏から貰い受けてあるから伐ると言ってきた。三島氏が東京に行かれてからであるから明治五年頃だと思う。庄内は楠の木の多い所であった。これらの楠の木を全部伐って樟脳を造り都城に出していた。そして楠の木を伐り終わってから黒岩常次郎氏は都城に移住した。

萩原けん斎とゆう医者がいた。

二、三原宗五先生のこと



三原 宗五

三原通庸氏が上庄内に来られた時、教育担当者として三原先生を伴って来られた。三原先生は今の庄内小学校の敷き地の南側に小さな学校を建ててここで教育に従事せられた。現在の池

田氏宅の所、学校の裏手に居宅ができて三原先生は家族と一緒に住んでおられた。

八歳になると学校に出ることに決められて開校当時は六十人位の生徒数であった。当時の生徒は皆士族の子弟で町人百姓はでられなかった。これは旧藩制に依ったものである。

三原先生は時々生徒を引率して、出来上がった馬場及び郷兵の居宅等を教えながら村中を歩かれて生徒の实地教育に勤められた。当時の住宅には必ず門柱を建て門札が掲げてあったので通りながらこれらの名を読み上げられて教えられたものであった。

学校の授業は早朝暗い内から行なわれた。稀には泊まり込んで授業を受ける生徒もいた。生徒は朝まだ暗い内に学校に登校して名札を順番に出して控えていた。三原先生はまだ暗い内に居宅から学校に来られ菜種油の灯をとぼしながら素読を教えられた。生徒は順番に先生の前に机を出して本を広げ先生は長い鞭を持って一字一字指しながら読み方を教えられた。授業は一頁ぐらいつでであった。最初の素読は大学より始められた。読むだけであった。読みさえすれば大人になれば意味はわかるといわれていた。先生が先に読まれ生徒は後をつけながら読んで覚えた。教育は一人対一人の教育で覚えるまで教えられた。昼

間には論語の講釈があった。生徒は皆これを聞いた。当時の学校は畳も呉座もなく板の間に正座して聴講した。又時々は色々なお話があった。主に論語から出た話であった。生徒は八歳より十五歳位までで生徒数は六十名位であった。十五六歳より兵隊にでることになっていた。十五六歳位の子供は論語を読んでいた。

午前八時頃は素読の時間で終わり先生は朝食の為に帰られた。生徒は時分の机及び文庫を学校に持っていかなければならなかった。午前九時頃より習字を稽古した。習字の先生は新穂嘉藤太先生であった。手本は新穂先生の書かれたものでいろはより始められた。新穂先生は戊辰の役に生まれ負傷されて弾が背髄の骨にかかったままで排出出来ないまま癒られた方で、労働はできないが先生位は勤まる程度であった。手本は先生が書いて与えられた。いろはより始まった。生徒は同じ紙に何回も字を書いて濡れたら庭に乾かしながら昼頃まで習字の稽古をした。書き方については先生は生徒の後ろから手を持ち副えて書法を教えられるという親切なやりかたであった。手本は終了次第に取り換えられた。先生の考え次第で手本を造って下さった。書体は草書体であった。三日に一回ぐらい白紙に清書して先生に提出した。

良くできた生徒には褒美として白紙等をくだされた。

三島通庸氏が去られてから都城県ができて教育法が変わってきた。四書だけは廃止されなかったけれども教科書は色々なものができた。明治五年都城県ができた時学制が決まり先生が都城からこられた。

三原先生は校長として明治十年の役まで居られた。その間に教育内容に大きな変化があつて体操等も正科目となった。十年の役で先生が引き揚げられ、親達が戦場に出たので学校も自然休校の形となった。その時三原先生も鹿児島の方に引き揚げてかえられた。当時役場等より三原先生に対して生活費等も補償するから在住して頂くようお願いしたけれども三原先生は鹿児島に引き揚げられた。

十年の役が鎮定されて十二月頃学校が開校されるということが言われると三原先生は鹿児島よりヒョッコリ戻って来られた。それでやはり先生として待遇した。三原先生の宅は戦争当時何かに使っていたので、三原先生は市兵衛氏宅前曾原某の宅に住せられた。開校と同時に先生方が又都城より大分来られた。

明治十年頃は既に当時の学校を卒業して先生をしていた人達が戦争に出た為先生がいなくなった。明治十一年に先生方が帰られ都城から四五人先生達が赴任された。

校長は内山静、次席が上原直武・藤井道純・鎌田正重・有馬休蔵等の先生が都城よりこられた。庄内より戦争に行つて無事に帰つた連中で、塚野伝之進・清水彦四郎・東喜之助・深河忠次郎等が先生になつて明治十一年に開校された。十一年十二月上等小学校の卒業式が行なわれた。十年戦役後上等小学校の卒業式のある所は少なかった。庄内は世間に聞こえが良かった。

十年役後河野道利が鹿児島県知事になつて上庄内の上等小学校の卒業式に臨校することになった。

坂元英俊は明治十一年十二月に卒業した。同勢十六名、卒業式はなかなか威厳のあつたもので鹿児島島の学校課長が来て試験問題等を作成し、知事の前で卒業生一人一人に対して質問を行なつて卒業試験をした。

当時の卒業生の内、十四、五名は付近の小学校の先生として方々に赴任した。当時は先生が少なかったので十年の戦争前は剣道が奨励された。これは午後行なわれた。当時の撃剣の先生は新穂嘉藤太先生であつた。先生は体の関係上自分ではやられなかつたけれども型を教えられた。面を被つて相手をして稽古をした。

明治十一年都城より内山校長が赴任されて来たので、今までおられた三原先生を如何がしたら良いかということが村議会で起り、三原先生は庄内の先生であるから粗末にするわけにいか

ないということでも三原先生を隠居させることとし、菓子野分教場を造り、そこにいて頂いて今屋地区の人々がお世話していくことになった。月給はいままでどおり村から出して頂くことにした。庄内小学校よりは何も干渉しない独立したものにした。分教場は現在の菓子野小学校の辺である。

三原先生は菓子野分教場に六十幾歳まで勤められたが、耳も聞こえなくなつて先生を勤めることもできなくなつたので他の人が三原先生の代りとして赴任した。学校を退かれてからも三原家を養う費用は一月幾らとして村より出して老後を養つた。三原先生には子供がなかつた。

三、島田丑弥太先生のこと



島田丑弥太

十年の戦争後学校を卒業した方々が上京した。坂元英俊・宮越正義等十幾人上京した。大概大きな者は巡査になった。学生が十幾人で上京した者は三十名位いた。明治十五年庄内出身者

の総会を開いた。その席上の話で庄内には頭角を現わす者もないので教育に力を注がねばいけないと衆議一決した。当時

士官学校に在学していた岩満仲太郎やその他桑畑正之進・東喜之助等が賛成して、良い先生をいれなければいかんということになった。

東京での吟味は、教育は日進月歩の世の中であるので旧弊な教育ではいけないということになり、東京で良い先生を見つけ送るのが良かろうと言うことになり、先輩が捜した島田先生にお願したところ赴任されることになった。高知の人、山崎某の推薦で島田先生を雇うことになった。島田丑弥太先生は東京芝区のせいじん社と言う学校の教官で、漢学数学の教官であり読売新聞の記者でもあった。他所に出てもよいと言うことになったが、月給は二十五円頂きたいとのことであった。当時内山校長の月給が十二円だった。十円五円等が先生方の月給であったので在京有志が庄内役場の戸長宛て照会をだした。戸長よりよろしいとの返事で島田丑弥太先生に赴任して頂くことになった。明治十五年五月頃である。

島田先生は最年長の組を受けもっておられた。当時漢籍が正課にあつてなかなか難しかった。師範学校等に行った方々は皆島田先生の薫陶を受けた。

明治十八年に内山校長は校長を辞して小林の郡役所の書記となつて行かれた。

島田先生が校長になられた。その後教育が進み師範学校卒業生が赴任して来るようになり、校長は新たに内藤某が県より任命されてきたので島田先生は中郷高崎の小学校等田舎の学校を転々として廻られた。家族の方は庄内に残っておられた。島田先生の転出については庄内村民から惜しまれたが致し方なかった。父兄が騒いだので内藤先生もおられないようになり鹿児島に行かれ、山田の福留敬吾氏が校長に來られた。その後の先生の任命は県庁よりされることになった。

四、当村の麓居住者

かこい馬場南より

西側 椎屋・坂元源兵衛・亀沢正左衛門・奥田八百蔵・有馬

治兵衛・小幡門助・松元初之進

東側 山下直四郎(昔から居住していた)・山元八百蔵・長

峰易左衛門・福留源右衛門(山田から移住)・手塚五

十郎(山田より移住)・永田庄助・大田原勢助・楠見

嘉兵衛

諏訪原 西俣・花堂熊蔵・木之前甚・赤木助四郎・野崎彦八・

成尾直蔵・宮越忠八・斎藤辰之助・黒木平右衛門

町 野口仙助・持永善吉・持永太平次・外山忠兵衛・熊原

末七・熊原庄兵衛・南崎常右衛門・汾陽松次郎・大浦・
黒岩常次郎・大田藤蔵

あとがき

残念ながら私の記録はここまでで終わっています。

話はまだまだ長く続いた様に記憶していますが、なぜ記録が
尻切れになっているのか思い出せません。録音テープの関係だっ
たかも知れません。

何れにしても貴重な庄内の歴史の一齣を語り継いでくだ
さった坂元英俊翁に深甚の謝意を表したいと思います。

なお周辺の事象を記録して置くことの重要性は馬齢を加える
ごとに痛感させられています。庄内の歴史を語り伝える私た
ちの会誌「庄内」の益々の発展を祈って止みません。



戦後の熊襲踊り

東区鎌田康正

私たちが子供のころは、バラ踊りと云っていた。地域の皆さ
んには、馴染深い踊りであった。先輩の話を知ると、伝説も色々
あるようであるが、簡単に云うと「今から千九百年程前に当地



の酋長、熊襲武は皇化に服せず悪虐をほしきままにし、地域住民を苦しめていたので、時の天皇、景行天皇が、大和武尊に征伐を命ぜられた。熊襲武が新築祝で酔いつぶれて眠ったところを大和武尊が女装して熊襲武を刺して征伐した。このことを聞いた住民は大変喜んで、ありあわせの農具バラ・シヨケ等をもって踊った」と云うのが熊襲踊りの伝説の一つである。

バラ踊りは、庄内東区に古くから伝承されている踊りで、今も若い人達に受け継がれ、日本全国に類のない大変珍しい民族芸能である。このような立派な文化財が後世にいつまでも伝承されていくことを心から念願して、私なりに戦後の熊襲踊りを探求して見たい。

昭和二十年八月六日の米空軍機グラマンの大空襲で、庄内小学校は、あの立派な大講堂と校舎が全焼した。その後の生徒達は急造のバラック校舎で授業を受けた。そして、地域住民の熱意と、汗の結晶と努力により、二年後の昭和二十三年三月に新校舎が落成した。

その喜びの祝に東区のバラ踊りをだそうと云うことになり、当時の区長山田武雄氏を初め熊襲踊りの元老・班長が中心になって、各班より二・三名の若者を募り、荒川内四郎助宅（今の荒川内重夫宅）の庭で毎晩元老の厳しい指導で稽古が始まった。

鉦（カネ）、踊りそれぞれの熱心な練習が実り、祝賀の舞として成果を挙げ大舞台で大喝采を受けた。

その後、これを機に祭礼や祝事等に各地より出演要請を受ける様になった。

昭和二十五年に毎日新聞主催の「日本の美しい滝」観光百選第五位に関之尾の滝が選ばれ、その祝賀会が大阪市の菖蒲が池公園で開催され、初めての県外出場となった。

庄内役場より、末原利夫助役、伊地知義夫氏が随行された。

私の叔父、入来虎熊氏は、高齢（六十三歳）のため旗持として出場したが三年後に他界した。その後、弟の入来安熊氏の次男入来平君が遺志を継ぎ、小学校三年の頃より踊りを練習して大人に混じって踊りつづけた。この子供熊襲の出現は、各地で人気を博した。母智丘花祭り、七・八段ある一番目の階段を登る時、バラが階段につかえて動きがとれず鉦の竹下典明さんが鉦を片手に抱きかかえて登ったときは、見物人から人形と間違われ、踊りが始まると「人形じゃ、ねがね」「子供じゃ」と大拍手で花（ご祝儀）がどんどん飛んだ一幕があったことは、今でも忘れる事は出来ない、竹下典明さんが笑顔で話された。

昭和三十一年に庄内町と西岳村が合併して荘内町となり、この頃から、宮崎市・小林市等県内あちこちへ出かけ出演するよ

うになった。関之尾の滝と共に観光PRへの出場も多くなり、昭和三十三年に関之尾の滝が宮崎県立公園に指定され、その祝賀撮影会等で、滝の上下から、また、高千穂の峰をバックに撮影され、それらの出演も多くなった。

昭和三十四年三月、私もバラ踊りの踊り手になり、森辰美さん・海老原宗平さん・森隼夫さん達と一緒に練習場所は庄内小学校庭や東区作業所前で、月夜の晩に先輩たちのそれはそれは厳しい指導を受けた。「足が上がらない」「面が動かない」「竹の先を見ないから首が動かかん」「手の振りが悪い」「腰を落せ」と腕を竹で叩かれる厳しい練習が続いた。私が初めての母智丘花祭りに行ったときは、自家用車のないときで各自自転車にバラを積んで砂利道を横市の白谷さん宅（竹下典明さんの奥さんの実家）に自転車置きそこで踊りの支度をして桜並木通を鉦を叩きながら歩いて祭会場迄行った。一服するのもつかの間一庭踊って（一回踊ることを一庭と云う）それで終わりかと思ったらそうではなく道具をつけたまま歩いて、鉦の後をついて行くとなんと加治屋の方に向いている。蓑原を過ぎ、鷹尾町から自衛隊・森山産業KK・土持産業KK・上町の江夏商店前と十庭位踊ったような気がする。花（ご祝儀）を沢山貰ってくたくたになって帰ったことは一生忘れることは出来ない。こう

して踊りもなんとか一人前に踊ることが出来るようになった。これも皆、先輩の方々のご指導のお陰と深く感謝している今日この頃である。

この年、NHK主催の第四回全国民謡舞踊祭が東京であり、日本全国の皆さんに熊襲踊りを紹介することが出来た。

明けて三十五年五月、島津貴子様ご夫婦のご来県で、えびの高原における歓迎祝賀式にも出演し、全国に熊襲踊りの名が知れ渡った。

主な出演を例挙すると、東京体育館における第五回全国民謡舞踊祭のNHKテレビに出演・昭和三十七年三月皇太子・美智子妃殿下ご来県でえびの高原における歓迎祝賀式にも出演し、えびの赤松千本林の中から、枯れススキと残雪を踏み分け足をびしょびしょに濡らして踊ったことがなつかしく思い出される。

まだこの頃までは現在のような白衣装ではなく昔のままの装束で黒のハッピー姿に道具を付けていた。昭和二十年代の鉦打ち、陣笠をかぶり上衣装は紋付羽織、下衣装は乗馬袴を着用し、踊り子は日頃の農作業衣のままのコダナシや普段の着物でわざと破れた物を着用していた。昭和三十七年頃より、昔の衣装が無くなっていくので都城市役所に衣装の相談をしたが思うようにいかなかった。丁度その頃宮崎交通の要請で出場回数も増え



昭和37年当時のメンバー

ていたので宮崎交通に相談したら、企画宣伝課の方が神代時代の衣装、白の留め袖丸首襟、ズボンも白足首ゴム留めの白装束を発案製作して全員に寄贈して戴いた。その後は自分達で加工作成して着用して現代に至っている。

都城市体育館のこけら落しの催しで、歌手の春日八郎・藤島恒夫が出演し、各地の踊りがNHKテレビで放映された。その時、NHK番組で人気のあった「私の秘密」に熊襲踊りが選ばれ、有馬福美さんが黒のマントで熊襲踊りの衣装を隠して出場した。回答者もなかなか判らなかつた。回答後皆で熊襲踊りを披露した思い出が夢のようである。

近年踊り手も高齢化し、若者も県外に就職して後継者も少なく、踊り手の年代も入れ替わりが激しくなってきた。

昭和三十七年夏、関之尾の滝に島津久理公・坂元源兵衛翁・前田正名翁を祭神とする川上神社が建立され、祝賀の夏祭りでも熊襲踊りを披露した。その後、個人写真家のために踊るのも大変であった。また、県外招待があった時、諸準備で集会も多くなり、踊りの道具バラ作成・縄あみ等が何日も続き大変なこともあった。

いよいよ、昭和三十八年五月三日四国は阿南市市制五周年記念事業全国芸能大会に選ばれて出演大きな拍手を戴いた。

そして、帰途大分県に立ち寄り玖珠町にて全国子供の日大会
に出演、大運動場で踊り手と踊り手の間隔が二米程離れて踊っ
た。こんな間隔をおいての踊りは初めてであった。この時の随
行は、役場より東区出身の内田幸吉さんであった。

昭和四十年に荘内町も都市と合併して、踊りの出演も一段
と回数が増えてきた。宮崎神宮秋の大祭、延岡市でもテレビ出
演をした。その時、入来義久君が、インタビューで画面いっば
いにアップに写り話をした。続いて伊勢神宮秋の大祭への出演
もあり、全国にその名を知られるようになった。

昭和四十三年より宮崎交通企画の「新婚さん南国宮崎へアロ
ハで飛ぼう」の出演が四十六年まで続いた。五月・六月・七月
の三カ月間一週間に二・三回えびの高原で出演した。これは夕
方から行って、夜になるとタイマツを炊いてその明かりで踊る
のでお客さんに大変喜ばれた。

熊襲踊りも宮崎観光の目玉の一つになった。
昭和四十六年三月日本電通企画の全日本民族芸能大会東京大
会・名古屋大会へ一週間の予定で出演した。

これが終わって、文化財指定の問題が湧き起こり、阿久井武
人保存会長の依頼で規約を作成したのを覚えてる。早期指定
を各方面に働きかけたが思うようにはいかなかった。鷹尾町の

中村紀嘉氏(母が今屋出身)に話を持ちかけ、保存会長を初め踊
り手全員で運動を展開した。元衆議院議員児玉末夫氏・元市議
会議員岩佐道彦氏・遠矢肇氏・秋永秀二氏・新穂利治氏・野崎三郎
氏などと元町長東清文氏宅にて、保存会決起大会を開催した。

諸先生・先輩の方々のご努力が実り、また、踊り手一同の熱
意が通じて、明けて昭和四十七年九月県文化財の指定を受けた。

保存会長阿久井武人氏、踊り手会長丸目辰夫君を中心に祝賀
会の準備に入った。招待者数、記念品、会場問題、私も役員と
して出納に苦労した。記念品は、高崎焼の徳利と盃。招待者は、
元県知事黒木博氏・都市市長堀之内久夫氏・市議会議員全員・
踊り手OB全員・宮崎交通・宮崎銀行・町の有志など関係者百
名からの大人数であった。

私共、庄内の代表的文化財「熊襲踊り」の発展を願いながら
この稿を終わります。

※踊りの師匠 荒川内四郎助氏・平山彌八郎氏・平山栄氏
瀬戸口虎四郎氏・原口正彦氏・梶原栄吉氏
梶原必二氏

※最初の踊り手

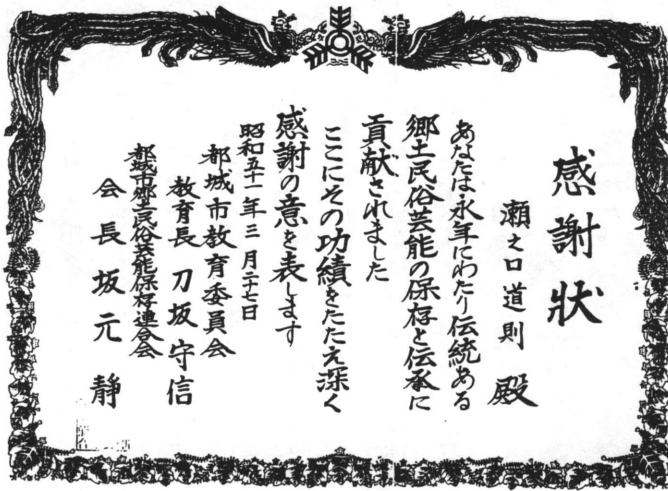
鉦四名 鍋倉利美氏・竹下典明氏・原口豊彦氏・有馬福美氏
バラ 入来虎熊氏・瀬戸口道則氏・曾我久氏・江口寛氏

瀬戸山次夫氏・海老原義康氏・大久保正明氏
松下辰明氏・豊満勇氏・新留則夫氏・竹下三郎氏

外多数おられたが名前不明

※感謝状受賞者 最初に受賞された方

瀬戸口道則氏・原口豊彦氏・海老原義康氏



その後も十数名の方が受賞されている。

※現在のバラ踊りについては次にゆずります。

車 大 工

町 区 重 久 政 雄

私の家の職業は車大工でした。私が物心ついた頃はいろいろの人達が荷馬車を馬に引かせて来られ、修理やら新しい荷馬車の注文をされていたようです。後から判った事ですが、当時は物資運搬の手段としては自動車も滅多になく自転車も数える程しか無く木材その他重量のものや大きな物等の運搬は荷馬車が一番便利だったと聞いています。

それで、父も「これからは運搬用具としては、荷馬車の需要が増えるのではないか」と考えたのでしうか、都城の神柱神社の鳥居の近くにあった車大工さんへ弟子入りして腕を磨き、大正の終り頃庄内へ帰って開業したと聞いています。

その当時の弟子入りは厳しい習慣があり、三年間はどんな職業の仕事も無報酬で、年期があけて一人前になり師匠離れの時はじめて祝をしてもらい道具箱を貰って帰る事が出来たと聞いています。とにかく厳しい修業だったということなのです。

時代が進むにつれて庄内も賑やかになり、交通も頻繁になり、

それにつれて関連する色々な、職業も多くなり鍛冶屋、蹄鉄業なども近所に出来る様になり、私の家の隣りにも丸野さんという鍛冶屋さんが開業され、荷馬車の鉄輪、附属金具や、鋏、斧等も作っておられ、お互い助け合いながら生活していました。

車大工は当時私の家が一軒でしたので、遠くは西岳、谷頭、

山田方面からも新車の注文や修理のお客さんが見えておられたようです。昼間になりますと、これ等の人達がびっくりするような大きな弁当を出して食事されていた事を記憶しています。

終戦後は、人間の知恵でしょうか、荷馬車の後輪に自動車の古タイヤを装着して軽量の便を計るようになりましたが、次第にトラックも増えて来て、木材等の運搬もこれに変わり、また田畑への肥料運搬もトラクターなどがこれに代って参りました。それにつれて牛や馬も次第に姿を消してしまいました。

また、荷馬車と共にあった小荷物運搬用の「車力」もリヤカーと共に私達の目から消え去ってしまいました。

そして、車大工も今はもう遠い昔の職業となりました。店先で汗する車大工の父の後姿は勿論見る事は出来ませんが、棚に並んだたくさんの大工道具や所狭ましと置かれた檜木の材料ももう見る事は出来ません。そして、部屋にこもったあの独特の匂いも今はもう遠い昔の懐かしい思い出の一つになりました。

甘茶の葉

東区 福留 フミ

霧島の麓牧園、今でこそ賑やかな温泉町になりましたが私が子供時代を過ごした大正から昭和の初めにかけては人家も少なく大変寂しい田舎でした。こんな処で育つ私達には玩具がある訳でなし勿論テレビがある訳でなし遊びの場所と言えば当然ながら神社の境内や学校の庭そして山や野原でした。「子供は外で遊べ」と言う厳しい躾の中で私達は暗くなるまで野外で遊んだものでした。野山には四季折々の色々な食べ物一杯ありました。時には母がおいしいお菓子を作ってくれました。

これらのことについて薄くなった記憶の一端を思い出すままに書いてみます。

★「甘茶の葉」 おじさんの家には甘茶の木がありました。甘茶の葉っぱを着物の袂一杯採って大事に持ち帰り、学校の本の間挟んで枯れるのを待ちます。三、四日して適当に枯れた頃一枚ずつそと外して友達と嘗め合いほのかに甘い甘茶の味を楽しんだものです。あの甘茶の木は今どうなっている

でしょう。懐かしさが込み上げて来ます。

★「コロベ」 秋風が吹き涼しくなるころ土手の下などに指先ほどの窪んだ所を見つめます。そこを掘り起こすと少し茶色がかった丸い玉がコロリと出て来ます。私たちは「コロベ」と呼んでいましたがこれを掘るのは子供達の遊びの一つで家で煮て食べるとコロリして大変おいしいものでした。これは多分キノコ的一种だったろうと思います。

★「イセツの実」 一步山に入ると色々な食べ物がたくさんありました。真っ赤に色づいた小さな「イセツの実」は甘酸っぱい何とも言えない味でした。一杯実のついた枝を折り採って実をしごいて口一杯にして食べました。種をプップッと飛ばしながら食べるものでした。

★「黄いちご」 春先になりますと、道脇の藪の中にどこにもありました。黄色い実を口にいれると甘い汁がはじけてとってもおいしいものでした。

★「ガラン」 日当たりの良い野原で良く見つけました。野葡萄の事です。房をしごいて手のひら一杯の実を一気に口に入れますと甘い汁が口一杯に広がりました。皆口の中を紫色に染めて帰りました。

★「コジの実」 山に入ると椎の木があちこちにありました。

秋になると沢山の実が落ちていました。袂に一杯拾ってかえり母に煎って貰って食べたものでした。鉄鍋で煎るとプツプツと音を立てて弾けました。一つ一つ歯を立てて皮をむくのは厄介でしたので布袋にたくさん入れて石の上に置いて棒で叩くとうまく皮が割れました。子供の知恵でした。芳しくて大変おいしいものでした。

★「煎り大豆」 煎った大豆を溶かした黒砂糖にまぶして新聞紙に包んでポリポリ食べました。食べ始めると切りの無いものでした。あんまり食べると腹をこわすゾと叱られたものです。

★「ハッタイ粉」 煎った小麦を石臼で挽いて粉にしてこれに砂糖を適当に交ぜたものがハッタイ粉です。紙に包んで袂に入れて遊んだものです。包み紙を開くと香ばしい匂いがして鼻の頭や口の回りに粉を一杯ひっ付けて食べました。食べながら笑うと口の中の粉がポツと噴き出すものでした。

★「ソマゲ」 蒸し上がった熱いからいにも蕎麦の粉を入れて十分に練り交ぜ平べったく丸めて食べます。ぶげんしゃどんでは黄な粉をつけて食べていました。

★「ふくれ菓子」 メリケン粉に程よくソーダと砂糖を効かせて練り混ぜせいろで蒸し上げて適当な大きさに切って出来上

がりです。今は何時でもお菓子屋さんにありますがその頃は全て母の手作りでした。

★「薩摩煎り」これは多分薩摩独特の菓子だったと思います。小豆を煮て砂糖を入れ「ぜんざい」を作ります。それに煎ったもち米を入れて米が柔らかく膨れた頃を見計らって蒸します。赤飯のような上等のお菓子でした。忘れられない母の味です。

★「ぬかご」山芋の蔓にパチンコ玉程の小さい実が一杯ついていました。これを丁寧にちぎって持ち帰り縫い針で糸を通して数珠つなぎしてご飯と一緒に炊いてもらいました。姉妹競い合って長く繋いだものです。塩を少々して炊くとホカホカして山芋の味がしました。

★「つばな」茅の新芽、雛の羽根みたいな柔らかいものではないかな甘い味がしました。よく学校にもって行きゲームで取り合いをして遊びました。女の子だけの遊びでした。

また茅を引き抜くと真っ白なお箸位のはそい根が出て来ました。これを咬むと甘い汁が出ておいしいものでした。チュウインガムを咬むような感触でした。

まだまだ色々ありますが、思い出せばほんとうに楽しい幸せな子供時代だったと思います。時代は変わりましたが、いつまでも平和で暮らし易い世の中が続きますよう願っています。

新町純良の昔話

中平田 新町 純良
(八十八歳)

私は明治三十九年六月十五日の田植半ばに、父金蔵・母シカの三男坊として生まれた。忙しい時だったので、父が役場に付け出すのを忘れて、九月一日につけ出したと言っていた。「前は馬年で田植半ばに生まれたやっちゃん、作付馬と同じで苦労するやっちゃんだ。」と子供の頃、母によく聞かされた。兄弟は七人で男五人、女二人です。長男は明治三十三年生。二男は三十六年生。四男は四十二年生。五男が大正七年生である。

長男は学校の成績もよく、高等科を卒業するまで、何時も一三番だったらしい。二男は普通で、私は下の方だった。A男・B男が私の友達で、二人とも学校ぎらいで、私もその一人だった。三年生までは真面目に学校に行ったが、四年生の頃から、いろいろでこがしたニギリメシを本といっしょに風呂敷につつんで、家を出たのはよいが、A男の命令で庄内川(当時は川の兩岸は竹やぶであった)の竹やぶの中の八畳敷位の野原で途中学

校し、ニギリメシもそこで食べた。チャンバラ遊び等して、他の子供達が学校から帰って来ると、後先になって帰った。

一度はA男の家の下男デカンが、種馬の運動で馬を飛ばして来るのですが、馬の上からはよく見えたのだらう見つかってしまつた。

「お前達は学校にも行かずに、こげな所で遊んぢよつとか。おいがお父さんと先生にゆるるぢね。」

と云うて馬をとばして帰って行つた。とうとうばれてしまつた。

その夜、私の家にも久保田先生が来られ、父母に

「近頃、学校にこない日が多いと思うぢよつたが、竹やぶん中で遊んぢよつたげな」

と話されて、父母からがられた。当時、久保田先生は、東野盛春さんの屋敷に丁度良い立派な家があつて、その家に永い間おられた。五年生になつても途中学校が多く、ひどい時には一ヶ月に十五日位しか行かない時があつた。五年の時、AとBが落第した。自分も同じ様に途中学校したのに、なぜだろうと不審に思つた。B男は六年生を卒業する時、又落第した。それから一ヶ月位学校に行つたあと、A男の家の子守りに行つた。

桜島の爆発は、大正三年の二月か三月だつたと思う。私が二年生になる少し前だつた。桜島の爆発で毎日小さい地震があり、

毎日灰が降つた。学校には傘をさして行つたが、灰がたくさん降る時は、傘が重くなり、横にしてパタパタ灰を落しながら学校に行つた。毎日地震があるので桑小屋ですごした。庄内の町の入り口、右側の下に岡田さんの池があつた。池は西から東へ長い大きな池だつた。左側は待木どんの家で、ここにも小さな池があつた。どちらも鯉が沢山入つていたが、灰のため、たくさんの魚が死んでいた。

大正八年七月か八月だつたと思う。暑い夜だつた。庄内の学校が火事で焼けた。この火事を今の統山自動車修理工場の所から眺めていたら、久保田先生が走つて行かれた。教頭先生だつたので御真影の事を心配されたのだと思う。

私は小学四年生の頃から裸馬に乗つて馬の運動によく行つた。私の家にはガンタレ馬が三頭いて、裸馬を乗り廻す自分の尻はいつも皮がむけて汁が出て、サルマタがベトベトして気持ちが悪かつた。それでも自分の好きな馬に乗るのだから、楽しかつた。いつもは大川の堤防を走つていたが、たまには上の畑路を走ることもあつた。一度は上の下坂の手前でタツナを引きしめても止まらず、下り坂なので馬の首に乗り、仕舞いには首におら下がってしまったので、馬はやつと止まつたが、こんなこわかつた事はなかつた。

小学校を大正八年に卒業した私は、家の手伝いをした。この年、森山助右エ門おじさん所には、馬が五頭いた。一頭は去勢しないカゲのきびしい馬だった。四頭はダンマ（女馬）でよい馬ばかりだった。

ある日、私が弟をからって壁ごしにおじさんの二歳馬の手入れを見ていた。おじさんは手入れが終ってバケツを下げて家に帰ってしまった。そしたら馬があばれだして、両口に張っていた綱がずるとゆるんでしまい、バンパンはねている内に、綱を前足にひっかけて余計に暴れだした。私が走って行って綱をほどこいて前足からはずしてやっている所におじさんが走って来て、「ボンがようしたね。あいがと。」

と、お礼を言われた。綱にひっかけた馬の足は、血が出ていた。この時、おじさんが「ボンなオイギ来てくれんか。」と言われて、私は大変うれしかった。そして、その年は暮れて正月の十日の夜、助右エ門おじさんが私を雇いに来た。父さんが、「お前は行っか。」と言うので、私は「おじさんの所の馬にホレて行っか。」と答えた。話は決まった。デカンの出入りは正月の十三日と昔から決まっていた。私もこの正月から十三歳になりデカン入りした。その日は御馳走になり、自分は馬の所に行き、全部の馬に馬糧をやって、馬の頭をなでてやったが、初めての

他人の家なので複雑な気持ちだった。十五日は十五日⁵日正月で餅をつかさされ、餅つきが終ると、その日は休みだった。

もう家に居る時と違い、夜も毎晩養蚕のマボシ作り、終ると五月の馬の小鞍のワラット作り、小鞍が雨にぬれない為だ。養蚕が始まると、一晩に三度起きて見なければならぬ。十二時過ぎ迄、桑をスゴキ、蚕に桑をやって寝る時は二時頃だった。朝は早く起きねばならず、寝る時間が少ないので、昼寝にうとうとする事があった。

私はあけの年は浜田藤倍さんの所に下男に行った。十三日以前の家を出てそのまま藤倍さんの所へ行った。十五日は餅つきして休みであるが、まるつきり休んでもおれない。浜田さんの家には馬が二頭いた。一頭は去勢していない馬でよくあばれる元気な馬だった。馬はどんなあばれ馬でもおじがる事はなかったが、浜田さんの家の馬にはまだ馴れていなかった。

正月の十六日、近所の人達と一緒に炭山^{すみやま}に薪取りにやらされた。皆二十歳以上で三十五歳の人もいた。かぞえ十六歳の子供は私が一人だった。場所は中谷・溝口等を通って行く遠い所だった。行く時は皆馬に乗って行った。炭山につくと皆馬をつないで山に入っていた。一番後に山についた私の馬が突然あばれ出した。裸馬ならすぐ飛び降りるのだが、荷を積む鞍なので

ぐ飛び降りることが出来ない。その内に山から水をひいてある竹のトイと水がめを馬がとんでもない所にけとばしてこわしてしまった。その時、頭のはげた真赤な顔をしたおじさんがやって来て

「ポーズ。おりてこい。たたき殺してやる。」

と大声でどなった。私は困った。やっと馬から降りて

「おじさん、まこちすまんこっしもした。」

とあやまった。このおじさんカンカンに怒ってはいしたが、私を叩きはしなかった。

他の人達は、とうに山に登ってしまい、どちらの山に登ったのか分からないので、あの怒ったおじさんに、

「どん山でタクンヌ取ればよかとな。」

とたずねると

「そこたいの山で取れ。」

と言った。私はやけくそになって一人で山に上り一生懸命に薪を拾って、六束作った。二回目を背負って馬の所に下りてみると、外の人達は皆帰ってしまい、満永武安さん一人が私を待っていてくれた。

「武安さんは居たとな。」と言ったら、「待っちゃぢ、早ういたっこんや。」と言った。急いで山に上り薪を背負って下りる

と、武安さんが私の馬に積むのを手伝ってくれた。私は武安さんを拜んだ。

薪を積み終った時は、もう薄暗くなり、関之尾に来た時は真暗だった。家に帰り着くと藤倍さんが、「あんまいおそいので心配しちよった。」と言われた。「自分がへたな事して、こげんになった。武安さんが待っていて手伝ってくれたのでたすかった。」と言ったら、「そう、きかったな」。もう明日から山には行かんでよか。うちん仕事をポッポッすればよか。」と言われた。この事は、私は一生忘れない思い出である。

この年も無事にデカンの役目を果した。二年間のデカン生活を思う時、外国のドレイと同じ様なものだと思った。

この年の十二月、森山善八さん宅で火事があった。種馬の入っている小屋の所で四歳の子供が二人で火を焚き、小屋に火がついた。風の強い日で二階建ての大きな倉が焼けた。大河原さんも昔からの大きな家と小屋が焼けた。私は知らないが、善八さん宅の倉は、昔島津の殿様が狩に来られた時に立寄り休んで居られたと言う話を聞いた。この倉には一厘銭等、カマスに何俵もあったとか。又殿様が使われたよい品物が沢山あったとか話を聞いた。確かに終戦までは門もあった様に思う。今は、子や孫達に分けてやったりして、残されているかどうか分からない。

こめんめし びのやうら

町区坂元清景

北側の大きな家は昔からの家で、年とったばあさんと下男、下女、日雇いの人達が泊るカヤブキの家だった。大河原どんは蚕の種屋で養蚕時は、下男・下女の他沢山女の人をやとっていた。養蚕室の家は二間四方の間が四つあり、居間と広い玄関の間があり、えんは六尺巾で三方にあった。

昔は盆と正月は重箱をさげ、親類を廻っていた。私が四・五歳の頃加治屋の親類を出て、裏原に行く途中、今の南横市の停留所の付近の県道は、西側に高さ二メートル位の土手が長くあって、向うは広い畑だった。ここを通る時、ち様に「あそこは、なんや。」と聞いたたら、「競馬場ちゃつとよ。」と言われた。私が大きくなった時、競馬場は今の自衛隊の西の方にあった。いつ頃移したのか私は知らないが、私が軍隊にいる時は、この競馬場を毎日一回か二回走らされた。競馬場を走らない時は、練兵場を走らされた。

庄内の牧之原から練兵場迄、大きな松の並木があった。大きいのは二、三人でないとだきまわせない様な大きいのがあった。今の都原は、和田あたりまで一面の松林で、まよえば出られない様な所だった。きつね、たぬき、きじ、うづらも沢山いたと話聞いたことがある。和田ん原はで道にまよったということばは、それを物語っているものだろう。

戦後の混乱期、当時の食糧事情は大変なもので正に想像を絶するものでした。

殆どの家がそうであったように私の家も野菜の中に少しばかりの米や麦をいれた「ずし」が常食でした。また軍隊が小学校に放置した焼け残りのコーリヤンを頂戴して炊いて食べたりもしましたがポサポサして硬くてろくに喉も通らないような代物でした。おかずと言えばそれこそ何もなく庭先の野菜しかありませんでした。

私の家は八人家族でしたので腹一杯食べた事など一回もありませんでした。魚など月に二、三度手に入れば良いほうで、たとえ手に入ったとしても塩がない醤油がない味噌がないで全く味気無いものでした。

またこんな食糧事情の中で人心の混乱も極に達し、今後日本はどうなっていくのだろうか、自分達はどうか生きて行けば良いのだろうか等々不安と焦躁に駆られる毎日でした。

こんな時、東区の竹下どんに福岡から疎開して来ておられた小木曾潤と言う人と知り合いました。この人は福岡日々新聞の記者で大変な熱血漢でそしてその頃非常に進歩的な考えをもった人でした。投げやりな気分になっていた私達青年を色々指導して下さいました。「君達青年が今時何をばやばやしているか。こんなときこそ若いものが元氣を出して立ち上がらなければいけない」と叱咤激励されました。

こんなこともあって庄内の青年の間に少しずつ「青年の力で何かやろう」と言う機運が高まりついに組織作りに発展していききました。

会長山田真之助、竹村良夫、小林幹一郎、松山貫一、椎屋和男の諸氏に不肖私が発起人になりみんなに呼び掛けを行いました。結果は予想を遥かにオーバーして二百人にのぼる多数の青年同志が参加しました。そして、その名も「庄内青年革新会」と名付けてスタートしました。

昭和二十三年発会式を兼ねた町民大会を願心寺において挙行、本堂に入り切れない町民参集の中で私達執行部は代わる代わる熱弁を奮いました。参加者からも活発な発言があり誠に熱気あふれる大会になりました。

私も最後に演壇に立ちました。記憶は薄れましたが大体次の

ようなことを話したと思います。

「こんなことでは日本は潰れる。何とかしてこの混乱期を乗り切らなければならない。そのためにはまず食糧の確保が先決である。嘆いているばかりでは解決にはならない。たとえ一坪の土地でも耕して自分達の食糧は自分達で作ろうじゃないか。人間は食べ物があって初めて生きる喜びもあり、それが心の沈静化にもつながって行くのではなからうか。とにかく食糧増産に立ち上がろう」そして最後に「私達もいつかは米の飯に魚の皿で腹一杯食えるようになろう」と訴えました。この最後の「コメンシビノサラ」には満堂の拍手が沸き起こり大変感激したことを思い起こします。

またこの「コメンシビノサラ」は当時食糧増産に励む町民の合言葉にもなりそして流行語にもなりました。

「米の飯に魚のおかず」ほんとうにこれを大きな目標にして頑張った時代があったのです。今ではとても信じられないような事ですが、誠に感無量です。

子や孫達が二度とあの悲惨な時代を経験することのないよう祈りながら思い出の一端を綴りました。

私の戦後

小林市 向井サエ

(東区出身・旧姓鍋倉)

昭和二十一年六月二十四日、私達は家の前のたんぼで田植えをしていました。その前をヨレヨレの服を着た男の人が通りかかりました。それが私の主人でした。

七年振に帰って来た主人はマラリヤに犯されており高熱のため早速床に伏す身となりました。南方の小さな島に駐留していたとか。主人はあまり言葉を交わすこともなく昭和二十三年十月二十七日小学校一年生の娘と一歳の乳飲み子を私に託して帰らぬ人となりました。

早く元気になってもらって二人で働ける日を楽しみにしていましたのに、私はこれからどうしてこの子たちを育てていけばよいのか全く途方に暮れました。

家は主人の両親と妹三人と弟一人、私は苦勞の連続で女中のように働きました。

三年経った二十六年十二月仕事が見つかり小林の東方中学校の用務員として勤めることになりました。あのころは宿日直を

される先生方の食事の世話などで日曜日もない忙しい毎日でした。それでも先生方や父兄の皆さんから優しく励まされながら無我夢中で一生懸命働きました。お陰様で子供も人様並みに育てることができ長男は大学に進ませることも出来ました。

主人を戦争に取られ、ようやく帰ったと思うと今度は仏に召され言葉では言えない惨めさと苦勞を味わいましたが今思うとほんとによくやって来たと思います。皆さんのお陰です。

今は子供達もそれぞれ家庭をもってどうにかやっています。私も二十五年勤めさせてもらった学校も退職して一人静かに暮らしています。

私の近くには東区の旧姓新穂さん達もおられ毎日のように生まれ育った故郷庄内を語り懐かしんでいます。

庄内の昔を語る会の「庄内」を愛読しています。ますますの発展を祈ります。



ヨメナ

南洲神社最初の祭り

西 区 有 嶋 義 武

(八十九歳)

昭和の初め、西南の役五十周年を記念して、西郷南洲翁と西南の役に戦死した旧庄内郷の五十六名を祭る南洲神社を建立する話がおこり、その場所が城山の一角の現在の場所に決まった時は、西区民一同大喜びで神社建設のため、すすんで協力することになりました。

何しろ、標高百八十米もある城山の頂上近くの雑木林を地ならしし、社殿を建てるのですから、麓から二十間もの高さの階段も急にならざるを得ないし、神社建設までの苦労は大変なものでした。若い青年たちを中心に部落の人たちの熱心な応援のお陰で二ヶ月位かかったでしょう。諏訪神社からもらってきた社殿の木材は、小田川まで運んで一本一本きれいに水洗いして長い坂道を持ち上げたものです。

遷座祭の昭和四年五月六日、東喜之助さん方に安置されていた分神の神輿を選ばれた私たちがかつぐことになったのですが、その人選も中々むずかしかつたようです。

当時は、ワシントン会議(一九二二)による世界的軍縮の時代で久留米師団など四ヶ所も廃止されました。それで体格が良くて徴兵検査には合格しても入隊できなかった人が、私たちはじめ西区に十名近くもいた頃ですから元気な青年達が沢山いて、その活動も活発でした。

その中から体格も揃い、容貌もヨカニセドンの四人が神輿の担い手として選ばれました。有嶋義武・有嶋蛟^{みづ}・乙守哲一・財部允也の四人で、いつも青年団の中心となって活躍していた仲間です。

当日の私たちは、からだを洗い、心身を清め、紋付袴に威儀を正し、身のひきしまる思いで神霊の假り安置所に向いました。お昼頃でしょうか、花火を合図に東喜之助さん宅から行列は出発しました。神主さんたちの笛、太鼓、正装した町の有志の方々に守られて神輿をかつぎ、沿道で待ちうけるたくさんの人々の中を晴れやかに部落を一周して、神殿に奉納し終ることができた感激はいつまでも忘れることはできません。

境内では、終日、踊りと歌声と部落総出で賑わいました。

達に報ゆる為の供出の達し文だと思われませぬ。多分十九年の暮の事かと思われませぬ。

鶏卵ト甘藷ノコト(原文ノママ)

刻下ノムツカシキ戦争に勝ツタメニハ、ゼヒトモ飛航士ノハタラキニヨラネバナリマセン。

その飛航士達ニ元氣ヲツケルタメニ鶏卵ヲ牝鳥一羽一月アタリ一ケツツ出シテモラウ事ニソノズカラタツシガアリマシタ。ドウゾ皆サン心ヨリ出シテクダサイ。

ソノアツメル日ヤ、アツメカタハ學校ノ生徒ガシマスカラドウゾヨロシクネガイマス。マタ甘藷供出ハイマノトコロフクロモナク、ハコブ荷馬車ニモコマツテ居リマス。ソナ訳デトモ生甘藷の供出ハトウブンデキマセンカラ、コノサイクサレル心配ノ甘藷ハ全力ヲアゲテ干甘藷ニシテクダサイ。正月休ミハ官署モ元日ダケトナリマシタ。皆サンモ休ミハ元日ダケニシテ甘藷切に全力ヲアゲテクダサイ。勝ツカ負ケルカノコノ場合ウント元氣ヲ出シテ、ガンバリマシヨウ

十二月十六日

庄内町役場

農業會

飽食の今の我々に何か当時の事を思えば心の底に「カチン」とくるものがあるのではと感ぜられてなりません。

飛行機見物

今屋 鶴島 善市

「飛行機見物」今でも一番心に残っているうれしかった子供頃の思い出です。

祖父が養原の練兵場まで飛行機見物に連れて行くと言うので、

朝暗い内に起きて飯もそこそ兄と一緒に祖父の後に従いました。私は前の晩は、嬉しくて嬉しくて殆ど寝られませんでした。兄もきつと寝られなかったと思います。

祖父が牧之原の茶店で駄菓子を買ってくれました。どんなお菓子だったか記憶にありませんが兄と一緒に食べながら小走り

に祖父の後を追いました。長い長い道でした。道の両側には大きな松並木が続いていました。横市橋を少し過ぎた右手に傘屋

さんがあり沢山の雨傘が干してありました。今は布製ですが当時の傘は澁紙製で澁や糊が乾くまで天火に干すものでした。

「お前達の傘はここでくっつとよ」と祖父が教えてくれました。

練兵場はなかなか見えません。祖父から励まされながら一生懸命歩きました。松並木の向こうの右側に練兵場が見えた時は途端に元気が出て来ました。私達の外にも沢山の人がぞろぞろ歩いて行きました。その頃あの辺は殆ど人家は無くばらばら農家が見えるくらいでした。

飛行機の置いてあるそばの松並木には板で囲いがしてあり番人がいました。祖父が入場料を払って私たちは中に入りました。人垣をかき分けて前に出て見てびっくりしました。

初めて見る飛行機の大きさ、こんな大きなものがどうして空を飛ぶのだろうと大変不思議に思いました。前から後ろから見飽きるほど見て外に出ました。会場には外にも色々な見世物が来ていました。若い二人の書生さんがバイオリンを弾きながら歌っていました。二、三回聞いている内に歌詞は覚えてしまいました。「私じゃ川原の枯れすすき、同じお前も枯れすすき、どーせ二人はこの世では、花の咲かない枯れすすき」当時流行した歌でした。

隣ではめがね芝居をやっていました。祖父がお金を出して呉

れましたので穴から覗いて見ました。二人のおじさんが台を叩きながら面白おかしく説明していました。芝居は武夫と浪子や昔の継子いじめの場面でした。

昼飯は祖父の知り合いのうどん屋さんでした。竹の皮に包んだ握り飯を広げうどんを食べました。初めて食べるうどんの美味しかったこと今でも思い出します。

帰りは土産を買って庄内まで乗合馬車で帰りました。ほんとに楽しい「飛行機見物」の一日でした。

興奮覚めやらぬ夕食のとき「じさまのお陰でよかったね、じさまやばさまを大切にせんないかね」とちょこっと母が言いました。なにげないこの母の一言はその後私の頭に強烈に焼き付きました。先祖様を大事に、祖父母を大事に、父母を大事に、私のこの信条はあの時植え付けられたものです。

私も既に八十一歳になりましたが少年時代に受けた父母や祖父母の愛情は決して忘れることはありません。



1.ビノ

近衛騎兵の思い出

宮島 土屋 忠 則

私は昭和十七年一月十日近衛騎兵隊に入隊致しました。その頃、近衛騎兵になる事は若者にとって最高の誇りでした。宮崎県から延岡市の甲斐豊一君と二人でした。

東京都牛込区戸山町の聯隊では愛馬と共にきびしい訓練を受けました。六ヶ月間の基礎訓練の富士の御殿場演習場できびしい実地訓練を終えて一期の検閲が終わりました。その頃になると一人で四頭の馬に乗って壕を越えたりどんな所でも走り廻る様になるのです。これで一人前の兵隊になるのです。

一期の検閲が終ると供奉教育が始まります。宮城に勤める教育です。仲々むづかしい訓練で六ヶ月間で教育が終了しました。これで行よいよ宮城に務める様になったのです。隊から宮城までは四キロメートル位ありますが道筋は愛馬の方が兵隊よりもよく知っています。宮城に入る時は二つのコースが決っていました。一つのコースは乾門から入ります。道観門、千里門、吹上門、賢所を通過して三角門を通過して詰所に入ります。賢所を通



る時は下馬して棒刀で敬礼して通らねばなりません。二ツ目のコースは乾門から入って宮内庁本殿前を通り鉄橋、そして詰所に入ります。鉄橋は二重橋の上にかかっています。普通の勤務は二騎一組で、四十八時間勤務です。宮内庁、陸軍司令部、師団司令部、大宮御所などに愛馬に乗って出かけますが中々つかれる仕事でした。満月の夜に師団司令部に行く時、鉄橋の上から二重橋、広場が昼の様に見えます。実にすばらしい景色でした。これぞ人間に生れて最高の幸と思つた事がありました。この間、宮中行事がある度に供奉に参加したり致しました。

そして昭和十九年一月から日光御用邸儀杖衛兵本部に勤務する事になりました。現在の天皇様が皇太子の時でした。皇太子はその時初等科の一年生だつたと思います。屋敷内の大きな杉と杉に竹がくくりつけてありました。これは皇太子様が体操をされるところでした。御住居は神殿造りで諏訪神社の様な造りでした。四ヶ月で任務は終わりましたが、終りに軍事演習をご覧に入れました。狭い庭園での演習で日本軍とアメリカ軍とに別れてのオカシナ演習でした。皇太子様はおとなしいりっぱな人でした。

其の後、昭和十九年六月に牛込憲兵分隊に配属になり北多摩郡田無分遣隊勤務になりました。この辺は中島航空機会社等た

くさんの工場が集中しており、毎日が工場の見廻りでした。そして昭和二十年三月にB29の空襲を受けました。東京は初めての空襲でしたが、それから約三ヶ月位東京は毎日空襲があり火の消えた日はありませんでした。

そして私は二十年七月に騎兵隊に復帰しました。その時は愛馬は勤務馬だけ残し神奈川県に疎開していました。其の頃宮城・大宮殿が焼失しました。大きな大宮殿でしたが誠に残念でした。御車寄（天皇が入りされる場所）、東御車寄（外国の大使、公使が入りされる場所）、北御車寄（皇族方の出入りされる場所）と実に大きなところでした。併し天皇様は御無事でした。すでに吹上に防空壕が出来ていたのです。一号作業と云つて昼夜兼行で約三ヶ月かかって大きな地下宮殿を造つたのです。東京は焼け野が原になりました。いよいよ最後に残つたのが近衛騎兵軍馬補充部、幼年学校、東京第一陸軍病院、戸山学校、聯隊軍医学校でした。東京の真中にポツンと軍関係だけ残っていましたがいよいよB29がやってきまして、一晩のうちに全部やられました。併し騎兵軍馬補充部だけは兵隊が消しとめたのです。

そして二十年八月十三日の夜の事でした。全員完全軍装せよとの命令があり銃を持ったまま一晩中待機していました。これ

は天皇陛下の玉音の放送のことで青年将校等が代々木にたてこもり、すでに近衛師団長を射殺したりした事件が起こり、その為の待機だったので。

そして八月十五日の十二時に本部前に全員集合して玉音を聞きました。終戦になるとみんな勤務先から続々と騎兵隊に帰ってきました。何もする事なく待機していますと「アメリカ軍の命により、殺人競技は速やかに停止せよ」と伝達がありました。それから毎日隊長の訓示がありました。それは「近衛兵はドイツのナチと同じで全員殺される」と云う事でした。いよいよ我々は最後の時が来たと覚悟を決めました。どうせ死ぬなら一人でもカミ殺して死ねと言う訓示もあり、軍に関するものは全部焼き捨てました。私もアルバムを四年間分けていましたが全部捨てました。

そのうちに復員命令が下り、長男は一番先に帰ってよいとのことでしたので私は喜んで帰りました。宮殿や屯営を後にして心を引かれる思いでした。一度は死を覚悟した私でしたが、今は生きていてよかった、とつくづく平和の有り難さをかみしめています。

農家の下男

宮島 今村 勇

はじめに

昔、子供達は、イロリ端で祖父や祖母から、よく昔の話を聞いたものです。その話は、自分の家の祖先の話であったり、地域に残る伝説やおとぎ話であったりしました。

そして、その話は、孫から孫へと、ズーと語り継がれて来たものです。

近頃、家にはイロリもなくなりましたし、又家族も分散して「語り継ぐ」場がなくなりました。残念な事です。

これは、私の家の近くの八十三歳になられる老人の話をまとめたものです。農家の下男の生活の一端です。子や孫に書き残したいと思います。

昭和のはじめ、私が十七歳の時大きな農家の下男として雇われることになった。自分の家が農家であったから仕事の事は、多少は解っていたが、不安な思いであった。

朝食前の朝仕事と夕食後の夜業は下男下女の当然の仕事であった。朝食は粟とカラ芋の飯で、時にはそれに麦まで這入っていた。それに出汁も入っていない味噌汁を急いで食べて仕事に出た。昼はお茶漬に大根葉の漬物か梅干位のものであった。目刺しの魚等は年に数える位であった。夕食も味噌汁だけ。

田植の仕事は大変であった。馬の足も擦り切れ、人の足も擦れて血がにじみ、麦藁の切株等を踏んだ時は飛び上がる程痛かったものだ。今の田植作業からみると想像も出来ない。農作業の中心となって働く下男が倒れたら田植も出来ないことになるので、其の時期だけは特別に大きな握り飯が二個づつ間食として渡った。

其の当時、下男の年俵は俵米七俵から八俵に金が四十円から五十円が普通であった。一日の日当に換算すると三十銭から四十銭位である。労働時間は十時間は普通で、作業衣として夏は木綿のコダナシ、冬はコスギンが渡った。

休日とは殆どなく、正月の一日と、四月二十三日の母智丘神社の祭りの日だけは休ましてもらえた。正月十三日が下男下女の入替りの日であった。雇主はソバ等を打って、新しく迎える下男と出て行く下男にご馳走をするものだった。働きの悪い人気がない下男は、先輩の人が年俵を下げたりして仲立ちしてく

れたものである。この十三日の出入りの日に雨が降ると涙雨といった。

大正末期から昭和の初期は世の中が不況で仕事がなく、小学校を卒業すると食べさせてもらえただけでよいと他人の家の下男や下女、子守にやらされたものである。

幼い頃の思い出

東 区 黒 木 ツ ミ

私は農家の次男家に、三女として九人の子沢山の家に生まれましたので、何でも自分の思う通りにならない立場でした。

当時（大正の初め）は、家本位で長男がほとんどの財産をもち、次男は夫婦暮しができる位のものしか与えられませんでした。本家は家も庭も広く、田圃、山林、畠、蓮の花咲く池までありました。実のなる木も一ぱいあって何不自由のない生活のできる環境にあったようです。次男家であった私の生家には何もありませんでした。

時節には柿などの実が熟れて、いとこ達がおいしそうに食べているのを見るとうらやましく思ったものでした。かねてから親は、決して他所のナレ木の下に行ったり、落ちているものを食べてはいけないうちやましく言っていました。母は常々私達に向って、晩飯の時だけが家族は一緒になるから、「今日あった事は何でも語れ。」と言っていましたので、夜の食事は賑やかでした。

ある日、私は兄と言い争いをして、くやしかったので、その腹いせに、兄が落ちていた柿を拾って食べたことを話しました。ところが父は、いろりにあった火箸を握り、「なんぶゆてんきかん奴は打つ」と火箸をふりあげようとしてました。母が兄に「にげろ」と言いました。兄は飛ぶようにして外へ出ました。父は追っかけましたが逃げ足は早いので追っつきません。横座にそっと座りました。その時母が、「おっかけてまで行かなくてもよさそうなものを。」と言いました。すると父は座っていた母をどなりつけるように強く叱りました。母はじっとがまんしてしばらくしてから「悪るぐわした」と、あやまりました。父は「これ程の子を育てるのに、口で言うても聞き入れない時は打つでもしないことには。もし、赤痢でもしたらどうするか。」ときびしい口調で言いました。

私は、自分達へのいましめに、父がはげしく母にあたった事を悟り、食べ物の大切である事を覚えたものです。又父は、私達が何かと食べ物欲しがると、「食わせ殺すことはあっても、ひえ死なせはせん。」と母にも無闇に間食を与えることを戒めていたようです。金さえ出せば何でも手に入る飽食の時代の今、昔を思う時感無量のものがあります。

私が子供の頃聞いた話

(その二)

宮崎市 長 友 莊 二

(千草出身)

十、敗走する西郷軍とひくさば(千草)

明治の初め、少年時代を過ごした私たちの祖先には西郷ゆっさ(西南の戦)生き残りの人が何人かおってよくその時のことを話してくれるものでした。

明治十年(一八七七)二月末、熊本、田原坂の戦に敗れた西郷軍が、ひくさばに宿営したのは五、六月頃と想像されます。

後に山田村是位川内の学校長になられた鎌田小右衛門(正さ

んの祖父)の話では、米や野菜類を買い集め記帳する将校(上級武士)の面前で、ひくさばのある人が集めた品物を足で押しとたかで「足^(足で)げいすつとは、何^(どう)ちゅうこつか」とかんかんに怒って、断わりを言うのに一騒動あつたそうです。

また、村永武秋さんの曾祖母達はしん^(米だんご)こだごや餅を売りに宿営地に行き「ひとつがどしこか^(いくらか)」と聞かれて「天保^(てんぽ)いっぢや^(一枚)」と答えたら意味が解らず大笑いしたという話です。

それから刀の話もいくつか残っています。原田磯助(原田ハギさんの実父)宅には米や野菜のお礼に置いて行った日本刀がありました。昭和初めの千草火災で焼けたとゆうことです。はつきりしたことは解りません。

十一、薩英戦争と長友蔵兵衛

文久三年(一八六三)七月二日生麦事件の報復ため、コーリアラス号以下七隻のイギリス艦隊が敢行した薩摩(鹿児島)攻撃。

英艦は悪天候に阻まれて戦えず、死傷六十三人を出し多くの損害を受けたが、一方薩摩藩も集成館をはじめ城下が類焼し大損害をうけた。

この結果、藩内に和平論がたかまり、十一月に入って薩英講

和が正式に成立した。

私の祖父蔵兵衛(天保十三年生れ)と従兄弟^(いとこ)の馬籠良八(乙房出身、良孝さんの曾祖父)等と謀ってイギリス軍と一戦交えんと勇んで出かけましたが途中敷根の坂で終戦を聞き引きかえたとのこと、その時のことを「ゆ^(戦争が)つさがすんじ^(すんで)よつたかい、命びろいをしたとよな」^(一)としみじみと語っていました。

晩年の蔵兵衛には無二の親友藤山鉄太郎(勇二さんの祖父)がいて、兄弟以上の交際があつた様です。

幼い頃の私達は鉄太郎さんの事を「水太郎じいさん」と呼んでいました。なぜそう呼んでいたのかは解りませんが、晩年には銀太郎と名乗っており、「金太郎になれずに先の世に逝った鉄太郎じいさん」と懐かしく語ったものでした。

また、耳が遠くなった両人の面白い会話のひとつを紹介しましょう。

ある日、遊びに家に寄った鉄太郎、「宗秋^(から)かい、まれ^(と)けん^(と)な^(と)手紙^(てがみ)が^(を)く^(ら)い^(や)、祖父蔵兵衛、「うん^(い)に^(や)、志布志^(か)ま^(わ)いの^(か)塩^(しほ)ん^(の)か^(れ)つ^(ば)つ^(ば)っ^(か)い^(じ)や」

魚が大好きだった祖父の面目躍如たるものがあつてほほ笑ましいかぎりです。

十二、元代議士伊東岩男氏と長友宗秋

長友宗秋（忠男さんの実父）は、蔵兵衛の七男一女の七男で、当時（昭和の初め）大阪府警に勤めており、北郷町出身の伊東岩男氏とは農学校（都城農業高校の前身）時代の同級生でした。若い頃、伊東氏が千草に桑の苗買い付けに来ての商売上の取引きでは鉄太郎爺の方が役者が一枚も二枚も上だったとの話が残っています。

一世を風靡した著名な代議士伊東岩男氏にはこんな苦労があり、長友宗秋の蔭の力と千草との深い繋り合いがあったことを識る人はすくなくないと思います。

十三、長友蔵右衛門の語り伝え

都城島津の配下であった庄内は椿井馬場の亀沢どんと椎屋どんが格が上で、この兩人が登城するときは、馬上祺ぞろいで悠々たるものであったらしい。

庄内現住の祖先では特にふもと辺りに鹿兒島からの移住が多いとのことです。（調べてみる必要があると思います）

また村田家は牛の脛から、諏訪原の赤木家から、奥は志和池のすすき谷から移り住んだ人が多いとのことです。

また、ふもとの新穂加藤太氏（西南の役参加）は私達が子供

の頃学校の先生でしたので記憶に残っています。

十四、平山八蔵とゆう人

平山八蔵（勝さんの曾祖父）は明治十年の西郷ゆっさ（西南の役）にひさば（千草）から出征した生残りの勇士の一人であります。

晩年は、杖（南天）をついて自宅から千草公会堂（中尾商店南）の間を散歩していましたが、途中で子供達に会うと「加藤清正が槍で突く」となぞの様なことをつぶやいていました。

また、昭和何年頃でしょうか。千草公会堂に精米用発動機が取付けられた時は、大きな木の根っこ（山桜だった様だ）に腰かけて珍しそうに米がつきあがるのを眺めている姿をよく見掛けました。

ある時、陽気のせいで居眠りが始まり、急に発動機が動き出し、その音響で根っこから転げ落ちた一幕があり、子供ながらに大笑いした思い出があります。

特集

むかしの食生活をさぐる

「ユナマス」は冬の味

宮崎市 肥 後 兼 行

(関之尾出身)

私は昭和七年に小学校へ入学しましたが、「私の昔の食生活」を語るに値する時期は、この頃から昭和十年代前半が中心になるでしょう。そこで、参考までに、あの頃の世相の一端をのぞいてみますと、世はまさに、不況とインフレ下にあり、東北地方は冷害や凶作で子女の身売りが続出し、大学は出たけれど職はなく、国家は軍国主義へと傾斜し、国民生活は塗炭の苦しみの中にあつたとあります。わが庄内町とて例外ではなく、食生活などは極端な表現を借りれば、「飢えをしのぐ」のが精一杯であつたと記憶しています。ただ、各家庭の職業や暮らし向きで貧富の差はありましたが、今どきの贅沢三昧な時代と違い物不足な時代で、どの家庭も貧弱な食生活だつたことは共通しているでしょう。

そこで、もう六十数年前のことになりますが、当時の私の家庭での食生活の実態や個人の経験などをもとに、記録もないまま記憶だけを頼りに思い出してみたいと思います。

私の家は、昭和十年前後までは猫の額ほどの自家保有地もなく、純然たる小作農家で、親父は農業の傍ら、「駄賃取り（ダチントリ）」と称して一頭の馬と荷馬車を所有し木材や石材などの運搬で賃稼ぎをし家計の足しにしていました。家族構成は幼児期に死亡したものも含め兄弟姉妹は二桁に及ぶ人数で、昭和十年前後迄は常に十数人の大所帯でした。こんなことで米糧を預かるおふくろ達の苦労は並大抵のものではなかったようです。

小作人は一定の契約により地主に上納米を納め、残つたものが農家の保有米で、わけても上納米を精製するときにマンゴクからこぼれた下等米などが保有米の大半でした。当時は風水害の都度、未整備だつた堤防の決壊で田圃が流失しては復旧が遅れ、収穫皆無となり、また病害虫が多発し収穫が激減するなどで稲作の収量は不安定なものでした。従つて、コメンメシなどは滅多なことにはお目にかかれませんでした。食卓はあつたと思いますが囲炉裏を囲み食事するもので、一家団欒などという風景は記憶にありません。

主食の殆どは少量の米に粟・麦・カライモなどを混ぜ合わせたものでした。これらの材料は出来上がる温度がそれぞれ異なるのに、ハガマの中でどれも程よく煮えていました。おふくろ

達の当時の炊飯技術と生活の智恵には、いまでも感服のほかありません。茶碗には一粒の飯も残さず食べるように厳しく躑けられたものです。日曜などは代用食で我慢しました。私達が持つていく弁当には出来るだけ米粒を多く入れたため、家に残った者は殆ど米粒の残っていない物で腹を満たしていたのだらうと思います。ただ、昭和十年代初期に、当時、新設された自作農創設長期資金（正式名は？）を元手に僅かな田圃を手に入れ自作農地ができたことや、上の兄や姉達が次々と就職して食いぶちも減って食生活も幾分よくなり、以前のような、ごったまぜの飯も少なくなりました。

副食は、味噌汁と漬物が主で、時には、トジンボシ、ガラソツ、メザシなどがあって、ごく稀には、鯛のブエンなどにありつける時もありました。魚の干し物を使ったのは海に遠い山間の暮らしの智恵でもあったのでしょう。味噌・醤油はもとより、豆腐やカライモ飴なども自家製でした。あの頃の豆腐を作る時のニガリは塩籠（しおげ）の下に壺を置いていて、滴り落ちるニガリを溜め置いて使っていました。ちなみに私は、現在、宮崎に住んでいますが、味噌は昔ながらの自家製味噌を作り愛用しています。

味噌汁の具は季節物の野菜や糸瓜（ヘチマ）、カボチャ、イ

モガラ、茄子、ニガゴリなど何でもいれて食べたものです。ヘチマの油揚げが旨かったのを覚えていて覚えています。

このほか、私達の当時の唯一のカルシウムや蛋白源は山の幸、川の幸でした。祖父や親父達がネレ（狩猫）や川魚取りに行き、うさぎ、鳩、狸など、その時々山の獲物や川魚などが、時には食膳を賑わしたものです。私達も暇をみては魚釣りや魚すくいに行き、夏休みには「カセバイカケ」で収穫をあげていました。竹串につないだ川魚が囲炉裏に一杯あぶつてあるのを、猫がくわえて逃げていくのをよく目撃したものです。今にして思えば、当時の、このような自然の食生活が今日の健康の根源になったのではないかと思えてなりません。

「ユナマス」は今でも思い出しては作って食べていますが懐かしい副食でした。また、豆腐で作った「ヨゴシ」や豆腐粕の「キラシ」なども副食には欠かせないものでした。自家製の醤油は大きな木の樽で作っていましたが、真ん中に竹製の籠を立てて杓で中から外に汲み出して実と汁を分けていました。このシヨイノミ（醤油の実）を飯にぶっかけて食べたのも懐かしく思い出します。

代用食は、「そばきい」、「かつそば」、「そばじゅい」、煮ガライモを搗き混ぜて作った「ぼったげ」など、思い起こす

だに数限り無くありますが、特に、冬の食べ物「そばじゅう」で、寒い冬の日、いろいろに下げた鍋からすくって食べたものですが、ただ、ダシがはいってなくまずくて、やっとの思いで食べた記憶しか残っていません。

オヤツなどと称するものは特別ありませんでしたが、強いて挙げれば煮ガライモや焼ッガライモ、トウモロコシなどのほか、季節の果物として柿（生柿・吊るし柿・アオシ柿など）・梨・ビワ・栗・グミ・ウンベ・トンボ・イセツノ実など自然の物が豊富にあり、今のように店で買うことは滅多にありませんでした。ただ、時には、はらべこで間に合わないときには、生ガライモや生のトキノミを食べる時もありました。生ガライモはヤニが唇に黒くついて仲々落ちなくて困ったものです。なま物を食べてたり、野菜などの肥料には下肥（人糞尿）を使っていたせいか回虫が多く学校では定期的に海人草を飲まされ、あくの日から凄いのがでてくるものでした。

四季折々の行事食は、その季節に育った作物を上手に使った行事食があり、豊かな食文化の宝庫でもあり生活の知恵でもあったでしょう。私の育った関之尾は春ギネン・秋ギネン・何とかキネンとか言っていて、キネンの多いところでした。何のために、どんないわれか知るよしもありませんでした。その度に大根・

人参・芋・ごぼうなどを一緒に煮込んだ「煮しめ」や、ガネ・目刺しのテンプラ・コガヤキ（？）・卵焼きなどを重箱に詰めて持ち寄り、部落の人達と一緒に公会堂などで食べました。もちろん、大人達は焼酎がはいりテコ・サンセンで踊りながら賑やかな座になったもので子供達にとっても楽しみで待ち遠しい行事のひとつでした。「まんかんめし（赤飯）」はおいしい食べ物で、おめでたいときには欠かせない行事食であり、現在でも祝い事にはなくてはならない物になっています。そのほか、正月用の餅、「ゆべし」・彼岸の「ひがんだご」、「草餅」・五月節句の「あくまき」・お盆の「モンコ菓子」、「これがし」・十五夜に供える「十五夜だご」・豊穰（ほぜ）の「甘酒」など、その折々の名物は懐かしいものばかりです。行事毎に作られる「だんご」や「お菓子」は、今も伝承されていて盆地に住む人々の心の豊かさにつながっていると思っっています。そのほか、「ポタモツ」、「フツノモツ」、「クイモツ」、「カナモツ」なども忘れられません。

食べ物にまつわる幾つかを他愛もない思い出も含め次に列挙してみましよう。

その一つは遠足の握り飯のことです。小学校の遠足は母智丘が一番記憶に残っていますが、昼食は「火のおきり」であぶっ

た握り飯二個でした。これが母智丘のはらっぱから転げ落ちて下まで拾いに行き草だらけのものを食べたことを懐かしく思い出します。

「日の丸弁当」は誰しも経験していますが、来る日も、来る日も同じもので、しまいには弁当箱の蓋は真ん中が丸く穴が開き日の丸の旗みたいになっていました。

あの頃の卵は、貴重品で米につく換金作物でもあり店では物々交換してくれました。従って、減多なことでは我々の口にはいらぬもので、小学校での自慢話は卵を食べたことでした。そんなことで時には朝の味噌汁の具のカボチャをわざと唇に塗って、さも今朝は卵を食べたようなふりをして学校に行ったものでした。悔しい思いをした子供心のひとつの見栄かユーモアとでもいうことでしょうか。

私が中学校に通っていた頃の弁当のおかずは、明けても暮れても、貴重品の卵の白身とニラの煮漬けでした。黄身は栄養として朝食の味噌汁に入れて食べたものです。ある時、友達から「オマヤいっがくせ（息が臭い）」と言われ恥ずかしい思いをしたもので、それは、ニラの代りに「にんにく」の葉を使っていたのが原因だとわかりました。おふくろにしてみれば、少しでも栄養になればとの心遣いで臭いのは承知で使ったのでしょ

うが、その後はもちろん、このはっぱを使うのを止めてもらったのは言うまでもありません。

中学入学のころ都城市内の友達の家で御馳走になったとき、我が家では口にしたこともない「魚の刺身」のわさびの食べ方がわからず、ひと口に頬張って慌てて彼の家トイレに駆け込み吐き出しました。どうしたことか、私は、今でも刺身は強いて食べたくありませんが、やはり小さいときの食生活が影響しているのかなと思ったりもしています。

「干し菜の味噌汁」は大根の葉を馬小屋の屋根裏などに陰干しして味噌汁などの具にしたもので、薬屋根の葺き替えや家建て、「おんぼ（葬式）」など大勢の加勢人達の味噌汁の具にしたものでした。貴重な保存食として当時は大量に作っていました。

「茶ぶし」という飲み物を疲労回復に飲んだものです。「きこんのくすり」と言っていました。今時の疲れた時に愛用する栄養剤に匹敵するもので、飯茶碗に生卵、生鰹節、生味噌を入れ、これに熱い茶をおっかけて飲みました。今でも、思い出しては、たまに作って飲んでいきます。これは私の祖父からの伝授ですが、あまり知られていません。

私は、麺類や豆腐などが好物ですが子供達はもとより孫達も

幼いころから食べさせていましたので、今でも何よりも好んで食べます。何でも食べる習慣は小さいときから食生活の中に取り入れていかなければ身に付かないものだと思います。

終戦直後の食生活は、昭和初期の食生活以上のお粗末なものでした。当時の農家にとっては農機具も農薬も化学肥料も満足がなく、その上、土地は痩せていて収量も思いに任せなかったのが原因でした。ただ、私ども農家は田や畑に何でも作っていましたので、非農家とくらべると、ましな生活ができたと思います。五十歳前後の人なら、たいてい経験済みでしょうから詳細は省きます。

以上、こうして拾い上げたら、まだまだキリがありませんが、私の昔の食生活の思い出の一端を記録してみました。乏しい時代に生活の智慧を活かし、様々な工夫をこらして、それを食生活のなかに取り入れた先人の息づかいが、いまでも私の身体のなかに生き続けているような気がしてなりません。

思えば戦前・戦後の物不足の時代から今日の繁栄に到るまでの食生活ひとつをとってみても想像もできないような大変化と食にたいする考え方の違いが出てきました。例えば、主食である「コメ」は、今は、もう米食を主体の人は全国の統計でも国民の六十%ちょっとしかなく、また、肝心の農家でさえパ

ン食の方が多いといわれています。米の飯を食べたいと夢にまで見た私達の小さい頃では考えも及ばないことになりました。このため農家は米の作付減反を余儀無くされ農地は荒れるにまかせた現状です。巷には食べ物が氾濫し、何時でも、何処でも、どんな物でも、幾らでも自由に手にはいる豊かな食生活の影響なのか、大人はもとより、子供達まで糖尿病だの高血圧などの成人病対策が真剣にとりあげられる始末で飽食が健康を蝕む結果となりました。従って、貧困の時代を知らない若い世代の人は現在の贅沢な食生活は、ごく当たり前のことで「昔の食生活」の貧しさを説いても実感が伴わず、単なる物語にしか写らないのではと気になるところです。

当時の農村社会の貧困の要因については、政治の貧困に起因するとか、社会・経済体制が未成熟期にあったからだとか、封建時代で貧富の差が大きかったからだとか、とくに、百姓は昔から生かさず殺さずのぎりぎりの所で生かされた結果だ、等の諸説があります。何れにしても、再び、このような社会を招かないよう、現在の平和で豊かな生活を満喫できる幸せが何時までも続くよう、ひたすら祈るのみです。

食生活について

宮崎市 牧ノ瀬 正雄

(西区出身)

◎ あの頃の食生活

昭和二年、この世に生を受けたのですが、その頃は第一次世界大戦後の不景気と関東大震災により、日本の金融界は不安動揺し、農村恐慌が全国的に始まった時代であったと言われ、その頃の家庭や子育ての親は大変だったと思います。

しかし、そのような困難な時代であることは知る由もなく少年時代を過ごしました：僅か十年位であった子どもの頃は遊ぶこと・学ぶこと・食べるものすべてが懐かしく思いだされず。

当時の食生活について考えてみますと、今どきのように今晩は何にしようか、どうしようかと悩まされることもなく、単純で変化のない「ご飯」と「味噌汁」それに副食として、「とうじんぼし」か豆腐と「骨付かしわ」などの煮付けが、食卓を賑わしてくれたものでした。

当時の食生活は特別な家庭を除いて、似たりよったりではなかったかと思えます。

我が家は、七人家族で「いろり」を囲んでの食事でしたが、麦飯はどうした訳か食べず、一升炊きの釜飯にはとき折、から芋の「コダクツタ」^(きざむ)が入り、ときたま、栗が入っていることもありましたが、おかずなどなくとも美味しかったものでした。今は味わうことのできないものに「でこんば」の漬物と味噌漬けがありますが、殆ど欠かさず食卓にでたものでした。

杵つき餅を囲炉りで焼いて食べた正月のころは、今は遠い昔の味となりました。

また、「ポツタゲ」や田植えのとき食べた「から芋のダゴ」は、今でもあるでしょうか：懐かしいものの一つです。

◎ 腹がへった

今どきの子どもは、学校から帰ってきて「腹がへった」とは言わない、夏など何か冷たいものを飲みたい：これが第一声で、さっさと冷蔵庫を開けるのが習慣となっている。

私どもが子どもの頃はよく腹がへったものである、腹がへったときは「握り飯」か「から芋」の蒸したのがあればよい方であった。「おやつ」なる言葉もなかった時代である。喉が乾いたときは、夏でも冬でも井戸水で満足していた。

昨年、全国の児童生徒の身長体重などを含めた健康調査が発表され専門家の話しが新聞に載っております。

★ 身長は、年を追って伸びているが骨がもろくなっており、体育や家庭生活で骨折する者が多くなつた。虫歯をもっている子どもは大半以上である…と指摘されていた。

このことを自分なりに考察してみると、今は家にも街にもありとあらゆる食べ物や飲み物が氾濫し、なかでも子どもが好物とするチョコレートや菓子類は数えきれないほど出回り、朝の食事でも年中、パンとコーヒーで登校させる家庭が増えているそうです。

パンとコーヒーもたまには良からうが、親も周りの者も子どもの健康にどれほど関心があるのかな、と疑いたいこの頃です。

現在まで虫歯一本もなく健康に恵まれているのは、少年時代の食生活が粗食であつたか…どうかは別として、わが家では孫二人を含めて、全員朝食は必ず麦飯と手作りの味噌汁で一年を過ごしております。

生態実験ではないかと、一笑される方もあるかと思いますが、ずっと続けていくつもりです。

◎ 長命と食生活

この前テレビ対談で、

「今後の高齢者対策をどうするか国をあげて心配し、中でも消

費税は将来の高齢者対策に充当するのだということを実施された。

今や日本は世界一の長寿の国となり、諸外国から賞賛的となつた。だがしかし、今の子どもや若い者が三十数年後に果たして何歳まで存命するだろうか。

そのころは、高齢者対策なるものは必要がなくなつていだろう…再び人生五十年の時代になるだろう…それは一つに現在の食生活に問題がある」

と指摘されてきました。

最近：自然食品・無農薬野菜・無添加物・果ては山菜料理など、傾いほど強調される時世となりましたが、これはまさしく長命と健康維持のための手段として、全国の主婦達が食生活を改善しようと、立ち上がったのだらうと痛感しております。

★ そこで私は、まさしく戦前の子ども時代のあの食生活が、模範的ではなかつたかと思つております。

から芋や麦飯を食べ、味噌や野菜はすべて手作りの無農薬、かしわも地鳥で卵も有精らん…昔、粗食であつたと思つた食生活が、今はグルメ食の模範的なものとして、都会の人々は金目を厭わず田舎へ遠くへと足を延ばして探し求めております。

今でも庄内には昔の子どものころの食べ物が幾つか残っている」と聞き、懐かしく思っております。

◎ 私の食生活

長い間勤めた公務員（警察）生活に終止符をうって、現在、第二の人生としてボケ防止のため、細やかな会社を設立して生活をしております。

週休二日制のため、高岡町の中山という高原地帯に五畝歩の畑を借りて、健康と昔の食生活にかえりたいと思い、毎週通って汗を流しております。

現在、孫二人と柴犬三匹を含めて八人家族の大世帯です。せめて野菜位はと：堆肥も自分で作り、無農薬の手作りで夏は雑草と戦いながら励んでおりますが、農家に育っていないので最初はなかなかでした、：今はどうにかものになってきました。

耕作はすべて「鍬」仕事で、四季折々の：大根・白菜・高菜・人参・ほうれんそう・里芋・から芋・グリーンピースなどですが、天候不順の時期など種代にもならないこともあります。

しかし、損得は別として楽しいものです。

★ 味噌と麦飯

延岡に勤務している頃、まだ成人病云々がとやかく言われない昭和三十三年、健康によいということで麦飯を食べ

るようになりました。あれからずーっと現在まで続けております。

味噌は、昭和三十六年、日南に勤務しているとき、隣の奥さんが「味噌ぐらい自分で作んない」と誘われて、以来現在まで年二回（六月と十月）味噌を麹から仕込んで作っております。

お陰で今のところ成人病もなく元気にやっております。

極く質素な食生活ながら 満ち足りた人生

平田 大久保 平

貧乏な農家の三男坊として育った。大正三年、桜島の大噴火の年に生れた。火山灰がひどく昼間もあかりをつけたそうであるから作物の生育も悪く蚕も育たなかったそうである。

幼少年の頃、記憶にある食生活は、米は小屋の隅にあった踏臼でついて半つき米、あわ、唐芋でいただいたご飯と干大根、干菜

コンブ、イリコ、芋（里芋）等で煮た味噌汁が普段の食事で、肉や魚は滅多に食べさせては貰えなかった。週三回位、干鰯一匹ずつが渡った位で、之でも農家ではいい方ではなかったかと思う。粟飯の下の米の部分は父の食べる処で母と子供達、下男は固い粟、軟い唐芋の部分、特に下男は真先に自分で椀に盛りねばならない。下男が旨そうに食べるのでこちらも思わずさそいこまれて食べていたように思う。添物は自家製の塩からい沢庵、キウリの漬物、隼人うりの半ば漬ぐらいでゴボウ、コンブの味噌づけは滅多に口にはいらなかった。

ごく稀に馬肉、その内臓の味噌汁が恵まれた。月に一回位のものだったように思う。

学校に上って二年生頃から昼食持参になったと思う。四年生頃までは帰り道の草原で遊んでから友達（同級生が殆んど）と握り飯の転がし競争をしてから食べていた。梅干が一個のオカズである。腹が満たなくて道々唐芋を失敬して、草の葉で土を落して食べる。夕方、母に悟られてお説教。口をよくふいておいたつもりがばれて了った。間食は、冷飯を掌に沢庵か、きゅうりの塩をつけ乍らの食べ方。大体皆そうしていたのではないかと思う。

五年生頃から弁当箱が渡った。学校では三年生頃から、先生

が麦飯励行をすすめられていた。粟、麦の混った弁当。オカズは梅干、沢庵、稀に唐人干も入る。互いに見較べながら賑やかにやっていた。女の子はかくしかくしたべていた。もっと蛋白質、カルシウム等の栄養食品を攝っていたら体格もよくなっていたであろう。

父が麵類がすきであったから夏分は、よくそうめんもたべた。冬になると母が膳棚の戸の裏でソバを伸ばしてソバ汁を作った。極く質素ではあったが腹だけは満ちた生活であった。親、祖先への感謝の気持ちは忘れてはいけないと思う。

桑の実 は唇を紫色に染めて

今屋 吉村 アイ

遠い遠い子供の頃の食生活のことを、振り返る機会に恵まれ改めて、七十余年前をなつかしく思い出しました。

私共の子供の頃と言いますと大正の中期です。物心のついた頃我が家は、作男の人や女中さんが居て農業を営んで居りまし

た。私の家は、小さな小さな地主で、地主と小作人との関係など知るよしもなく小作の人達より頂く揚米などで、生計を立てていたのでしょうか。

いざ幼い頃を改めて振り返ります時、あまりにも多くの思い出が後から後から思い出され出来る事ならあの時代に返ってみたいとつくづく思うことでした。

扱、其の思い出を辿るとなりますと、家族は父母と祖母きょうだい六人の九人でしたが、作男の人等は後年になり雇わなくなりしました。年を経て兄は学校に行き姉達は嫁いだりして少しずつ少なくなっていました。

当時の生活は自給自足の時代で、一般的に質素な生活をして居りましたので、ご飯には必ずと言っていい程麦を混ぜたりさつま芋を入れ、おかずは我が家の野菜畑でとれる四季の野菜、そして行商の人が持って来る魚などがつきました。魚も干物が多かった様に思います。

これから順を追ってゆきますと、先ずお正月です。どこの家からも餅つきの杵の音が聞こえて何とも嬉しいひびきでした。あんこの餅の美味しかったことも忘れられません。

そして年が明けて親類廻りが始まりますと、母親や祖母に連れられて行きました。お正月のご馳走は自家で飼って居る鶏を

つぶした物を、お吸い物にも煮物にもつけて数の子、煮豆など頂き、其の当時の物としてはご馳走で嬉しいものでした

正月はみかんも澤山食べられました。学校行事として多分正月七日だったと思いますが、学齢に達しない子供達も兄さんや姉さんと一緒に行けばみかんを下さるものでした。

そして三月の卒業式には、各学年毎に一年間の学業を終えた免状を貰うものでしたが、其の日は全学童の親達は赤飯やお煮染めをお重に詰めて式が終わった後、其の式場でお祝の食事を楽しんだものでした。春彼岸と秋彼岸も餅をつき、自家製の菓子造り類家などを行ったり来たりしたものでした。彼岸を過ぎると青葉の五月、この地、独特のあくまきが出来、又米の粉にあんこを混ぜたあんこまきが出来ました。

そして六月、農家にとっては大切な時期です。田植で思い出すのはあの塩干物のとび魚です。からいので塩出しして焼き、お酢をかけて頂いて居りました。丁度其の頃は筍も出ますので大豆、昆布、じゃが芋、豆腐、干大根などで煮しめをこしらえて居りました。田植がすむと田植さのぼりと言って餅を搗く家やちまきをつくる家いろいろでした。

いよいよこれから暑くなり、お盆が来ますと盆菓子「らくがん」を買い、ソーメンを茹で、そして祖母達が作って居りまし

た「こずっどっ」これは語源は分かりませんが、あえて言いますなら、どっというのは豆腐のことだろうと思います。これは生の大豆を乾燥させ臼で挽き粉にし、適量の水でこねて団子状にし直徑一センチ位の竹に巻きつけていろり火にかざして焼いた物でお盆にはかかせないものでした。出来上った物は竹を抜きとり、竹輪状になった物を包丁で切ると切口がきれいでお煮付に入れて居りました。

そして実りの秋、十一月の三日は「ホゼ」と豊作の祝でしょうか、甘酒を作り手作りのこんにやくを作りました。ほぜの料理は新しく出来た作物を使ったものと思います。たしか「新にの汁」と言っていた様に思います。小鯛の火干しにした物、大根・こんぶ・里芋・こんにやく・人参・ごんぼう・焼豆腐、それに必ず入れて居た物が切こんぶと言って細く切ったこんぶで、これらの物を煮しめ風にした物で新鮮な気持ちで頂いて居りました。それからおやつの事に関しては、なつかしい思い出ばかりです。季節的に順を追ってゆきますと、寒い冬を過ぎて野にはつばながが出て、其の若い穂を食べたり山の中の甘い木苺を食べ、あの旨さは今も忘れられません。育ち盛りの子供達は年中お腹を空かして居りますので、山帰来の実をとって塩漬けにして食べたり茅かの根を掘って食べたりもしたものです。

そして夏になると川に入り魚を追い川蛭にをとり、田んぼに入り田螺たじをとり池の下流で蜆しじみをとり、子供同志で煮て食べました。それから夏も真盛りになり、とうもろこしが出来ると母は必ず南瓜と煮て食べさせてくれました。畑にはどこの家も砂糖きびを植えてくれ、それに加えて西瓜、まくわ瓜など出来て思う存分食べましたが、親達の苦労は並大抵では無かっただろうと今更感じて居ります。いよいよ実りの秋、山には栗、椎の実、そして桑の実も其の頃でしょうか。紫色の桑の実はとても甘く美味しかったのですが、親達があれば食べるのはあまり好みませんでしたので、紫色に染んだ唇の色を消すのに苦労したものです。

それから何所の家庭にもあった柿、これは又果物の中でも最も美味しかったのではないでしょうか。学校から帰るとちぎって食べるのがとても楽しみでした。そして渋柿は吊し柿にし、これもおやつとして大きな役割を果たしました。

考えてみますと昔の人達は休む間も無くよく働きましたが、母はよくさつま芋で飴を炊いてくれました。箸に巻きつけて食べたあの味は素朴な母の味として忘れ難いものがあります。手に入れにくかった物に関しては親は苦労したのかも分かりませんが、特にそんな記憶は無い様です。

むしろ戦中戦後の事を除きますと農家のせいか食べ物には恵まれて最も安定した時代ではなかったかと思えます。

こうして長く生きて来て今の食生活を見ますと、其の贅沢さにかんな事をして居たら今に「しっぺ返し」が来るのではないだろうか。と孫達の時代を心配したりします。つましい生活をし居ればこそ三度の食事美味しく頂かれるもので年中満腹であれば切角のご馳走も味が分らなくなるのではないのでしょうか。私共はいろいろなつらかった事、ひもじかった事を経験したればこそ分るので、今、今の若い世代にとって当り前のことだとしたら、もしもつらい、そして苦しい時代が来た時、耐える事が出来るだろうか、いらぬ心配をして居ります。

本物の味

三股町 田上 順子

(東区出身・旧姓亀沢)

戦時中は、あらゆる物が不足、欠乏して、代用品が多く出廻りました。食事についても、私達は、代用食といって、主食の

御飯の代りに、から芋やすいとん等を食することもありました。然し幸いなことに庄内では、配給米は何とか切れず買うことが出来たようでした。とは言っても、どこも麦御飯だったと思えます。

今は健康食として、わざわざ麦御飯にする人もいますが、仕方なくそうしていたあの頃の麦御飯は、多分麦がたくさん入っている、全体に黒っぽく、ぶんと麦の臭いがしていました。或時一人の友人が、お弁当に粟御飯を持って来ました。真白な御飯に黄色い粟の色彩が美しく、とてもおいしそうに見えました。その後大分たって粟御飯を食べる機会がありました。粟の粒つぶが口内に障って、見た程おいしいと思えませんでした。野菜は、庭を耕しては植えていましたので、近所のどっさり出来たのを貰ったりで、買うことはなかったように思います。その頃「レーシ」とよんでいたのがごりも植えていました。外側の肌のごつごつしているのは珍しく、料理すると強い青臭さがあり、苦くて好きになれませんでした。でも今では歳とって嗜好が変ったのか、さっと熱湯に通して刻んで絞り、酢醤油に削りかつおをのせて食べると、あっさりしていて、寧ろ好物となりました。

この困ったのがごりと共に思い出すのは、糸瓜(へちま)で

す。いつかお汁に入っていました。実の若い中に皮をむいて使うのですが、煮ると半透明になり、軟らかくドロリとしていて、まるで鼻水のように、これは、どうしても食べる気になれなかったことを今も変に覚えています。

おやつは、から芋や、とうもろこし、西瓜、まくわ瓜も、良く出来ないながら作っていましたし、季節には、桃・梨・柿・栗などもありました。栗の実の落ちる運動会の頃は、夜中にもその音が、ばさっと聞こえて来ました。晩年ですが父は、孫が来る前は栗の実を集めて辺りに散りばめ、青い刺のついた殻も見える所に置いて、隣近所と同じような子供達と一緒に拾わせました。その父も他界し、成人した孫達は、今はもう忘れてしまっているかもしれません。

生垣の木戸口を入れて行くと、よく大きな柿の木がありました。今では伐られている所が多くなりました。果樹は樹齡が短いのでしょうか。実家の果樹の多くも姿を消して、庭はすっかり様変わりしました。お菓子や果物を買うことを考えることもなかったあの頃のおやつは、今思えば、何と健康的で、本物の味がしたことでしょう。昔の食べ物から、戦時中、戦後そして現代へと食生活は一変しました。でもこれからも、庄内の恵まれた環境を大切に、子供達に素朴な食べ物と共に沢山の夢

を与えたいと思っています。

魚の骨も焼いて食べた頃

東区 竹下 ツルエ

横市の五反百姓の家に生まれた私は、昭和の初期子供時代を過ごしました。

その頃私達家族の食べるご飯は米少々にからいもと粟を混ぜたもので、それはそれは凄いいものでした。前の晩、母が大きなすり鉢一杯からいもを刻んでいました。そして出来上がった羽釜の中は、上の方はからいもと粟、半分から下の方だけが米といった具合でした。子供達には少しでも下のほうをと母が深くほじくってついてくれていたのを覚えています

お正月、母智丘神社のお祭り、運動会や卒業式、こんな時は嬉しいものでした。おいしいものが食べられるからです。と言ってもせいぜい赤飯にしめ位のものでした。しかし私達にとって最高の御馳走でした。ごぼう、にんじん、芋の子、大根、こ

んにゃく、ごが焼き、春先は竹の子等がにしめの材料でした。材料は今とあんまり変わりませんが、総てのものが自分の家で採れたものでした。豆腐も自家製でした。朝まだ暗い内から納屋で一生懸命豆腐を作っていた母の姿が目には浮かびます。

その時代は皆よく働くものでした。朝は朝星夜は夜星で座敷に居ることはめったにありませんでした。昼は土庭にむしろを広げて食事をとっていました。私達には特に間食と言うものは有りませんが、ふかしたからいもは良く食べました。

時々一銭貰って飴買いに走って行ったものです。大きなからいも飴が五つでした。

時々肉やさんと魚やさんが回って来ていました。肉やさんはその頃では珍しく自転車でした。

魚のかたげ売いのおばさんは西岳大倉田の人で、朝早く大倉田から都城まで歩いて出て魚を仕入れ、それを道々売りながら帰る人でした。着物の裾をつんからげて腰巻きに足中じょいという構えで大きな桶をなえざしで要領良く担いでいました。

海の魚は鯖とか鯔が主でしたが、めったに私達の口には入るものではありませんでした。たまに買ったときは骨も捨てずにいろいろで焼いでガラガラにして食べるものでした。

近頃は物が豊富で勿体ない事が余りにも多すぎます。ご飯は

一粒も残さないように、そしてモット物を大事にしましょう、余計な事かも知れませんが、黙っておれない気のある今日のごろです。

からいも飴十個で一銭の時代

東区原　いつえ

私は、ここ庄内育ちではありませんが、風俗習慣を同じくする鹿児島出身ですから、きつと食生活についても共通するものがあると思いますので記憶の一端を書かせてもらいます。

大正の末期、それは私が十歳頃の記憶です。

先ず思い起こすのが気丈で優しく、働きの母の面影です。

父はその頃、村の助役をしていて毎日役場に出掛けていました。

家のことを取り仕切る母は、一人で田圃を作り畠を耕していました。しかしそれは私たち家族が一年間食するにはとても足りなかったようで、時々お店やさんから米麦粟等を買っていました。役場で働く父の月給がどれだけだったのか知りませんが、

母は毎日遅くなるまで野良仕事に精出し、それから炊事洗濯等、家の事をしていました。元気で働く母と一緒にいるととても幸せで安心感を覚えたものでした。

母が作ってくれる毎日のご飯は麦飯か粟飯で、それにみそ汁と漬物でした。米のご飯はめったに口に入りませんでした。

麦飯に冷や汁をかけて食べるのがとても美味しく、今でも忘れられない懐かしい味の一つです。それはすりばちで味噌をすり、だして薄めてネギを細かく刻み込んだとても簡単なものでした。

味噌汁は庭先の新鮮な野菜を要るだけずつ採って来て使うものでした。たまには豆腐が交じり、これはご馳走の部類でした。漬物も自分の家で作るもので、家々によってそれぞれ味が違うものでした。また大根の葉っぱを軒先に縄でつるして乾燥させた「はいな(干し菜)」もお汁の実になりました。

たまには海岸の町から魚の「かたげうい(担ぎ売り)」のおばさんがやって来ました。着物の裾を大きく端折り下からおこしを覗かせて色々の魚を入れた、かなり大きな二つの桶を天秤棒で要領よく担いでいました。一軒一軒庭に入って来て「魚はいいやいもさんかあ」と呼びかけていました。魚の値段はその時その時の交渉で成立していたように思います。

食卓に上る魚は新しいものは刺し身、鯛は開いて砂糖醤油に漬けて生干しにしていました。鯖は味噌煮、鰯は塩焼き、ほとんど今と変わりませんが、全てが母の手作りでした。海の魚を食べるときは大変な御馳走に思えたものでした。たまに父が投げ網で取ってくるボラを囲炉裏で火ぼかして醤油をつけて食べるのも御馳走の一つでした。

一年の内何回か赤飯や寿司を食べることがありました。それは多分正月とかお祭りの時だったのでしょう。子供心になにかしら誇らしいリッチな気分になったものでした。

特に桃の節句に欠かさず作ってもらった堅菓子、蒸し羊羹、いこ餅は忘れることの出来ない母の味です。型菓子はもち米の粉と砂糖を適当に練り交せて型にはめてできあがりです。蒸し羊羹は小豆の餡にカタクリ粉と砂糖を入れて蒸し上げるものでした。また、いこ餅は煎ったもち米の粉に砂糖をいれて熱いお湯で捏ねて作りしました。

寒い冬の日に限って家族六人が囲炉裏を囲んで食事をするころがありました。ジゼカギ(自在鉤)に吊るされた鉄鍋の熱い味噌汁をフーフー言いながら食べました。こんなときは大変うれいものでした。いつもは一段下の座敷に並んで箱お膳で食べていました。高さ三十センチ位の箱のお膳には引き出

しがあり、一人一人のお茶碗と箸が収めてあるものでしたが、何時の頃からかわが家にも丸い飯台が据えられ、家族みんなこれを囲んで食べるようになりました。それからは和気あいあい家族の愛情がテーブル一杯に満ちあふれる思いがしたものです。

またその頃は取り立てておやつなんてものはありませんでしたが蒸したからいも、味噌煮のからいもは何時でもありました。たまには蒸し上がったからいもにソバ粉と黒砂糖を交ぜて捏ね合わせて作るポツタゲが嬉しい間食でした。めったに無いことでしたが、一銭もらって飴買いに走ったこともありました。くらいも飴が一銭で十個でした。

或るとき満州に居た私の姉が帰って来ました。そのときチョコレートと言うものをお土産にもりました。勿論初めて見るものでした。世の中にこんな美味しいものがあるのかと、ほんとはびっくりして少しづつ少しづつ大事に大事にかじったものでした。

私たちの子供時代は今と比べてほんとに何にもない時代でした。しかしあの時はあの時で幸せ一杯でした。楽しい思い出ばかりが頭をよぎります。

あれから戦争、そして終戦と言う時の流れの中で食生活につ

いては耐乏につぐ耐乏を強いられました。特に終戦後の食生活は想像を絶するもので、引き揚げ者の私たちはどん底の惨めさを味わいました。今にして思えば、ほんとに皆よく耐え抜いたものだと思います。

近頃は何もかも潤沢で飽食の時代です。有り難いことです。こんな時代がいつまでも続いて皆が幸せでありますように祈りながら筆を置きます。

以後は、編集部の設問に答えてもらった記事です。

設問一、あなたが子供の頃について

- (1) あなたが子供の頃というのは何歳頃のことですか。
(2) 年代はいつ頃になりますか。

設問二、あなたの家はどんな仕事で生計を立てていましたか。

設問三、一緒に食事をとる(家族、同居人)人数は何人くらいでしたか。

設問四、食事の内容について(ごはんとおかず)について書いて下さい。

- (1) 平常のとき

(2) 特別なとき(祭り、祝いごと、学校行事など)

今屋花盛 林

設問五、あなたが子供の頃、親が食事(ごはん、おかず)で手に入れ難かったものはどんなもので、それをどのようにして手に入れていたのでしょうか。

(1) 手に入れ難かったもの

(2) それを手に入れた方法

設問六、食事をとる場所(土間、いろり端、座敷など)と、その時の様子を書いて下さい。

設問七、あなたが子供の頃のおやつ(間食)はどんなものでしたか。

設問八、あなたが子供の頃、食べ物について嬉しかったことや楽しかったこと、つらかったことやひもじい思いをしたことなどはありませんか。

設問九、その他、現在の食生活と比べて感想など。

※ こんどは、あなたが親になって「子育て時代」の食生活について苦労話などをお聞かせ下さい。

一、

(1) 十歳頃

(2) 大正の初め

二、農業(父は銀行勤め)

三、十人くらい

四、

(1) ○ごはん 押麦入り飯、雑炊

時に粟飯、めん類

○おかず みそ汁(自家作野菜入り)

時に、いわし、さばなど、山羊の乳

(2) ○ごはん 赤飯とか五目すし

○おかず 煮付け(鶏肉、時には豚肉)

ぶりの輪切り

六、いろり端

七、○煮もの(大豆、南瓜と唐もろこし、からいも、じゃがいも)

○だんご(材料はからいもの粉)、からいも飴

八、丸麦の冷汁が嫌いだった。

※ 家族が皆元気な時はよいが、病気になる時食べた時に食べさせ

たいものが手に入り難かったので苦労した。

平田 新町 純良

五、

○おかず 煮^レ(さといも、ごぼう、人参、自家鶏)

すのもの、がね(からいも)、汁物

(1) 魚、肉、豆腐

(2) 魚はかたげ売りどんから買った。肉は放し飼いの鶏肉ですませた。とうふは自家製。

六、・昼間は働いていたので野良着のまま土間か板の間。

・夜はいろりをとりまいて楽しいごはん。

父は横座、母はご飯盛りの係。隠居の祖父は高お膳

(三十cmくらい)で食事。

七、○からいも(ふだんはからいものふかしたもの)

○ポタ(からいもともち米でつくったもの)

○からいもだんご(からいもをうすくきったものを乾かし、からいも粉をつくり、それを団子にしてむしたもの)

○干柿(しぶ柿の皮をむいて竹竿につるす)

○甘柿(けどいん)

○屋敷内に梨(大砲なしが十本位)

○ざくろ(一本)があつたが勝手にちぎらせなかった。

八、おじいさんが、おぼん、正月に親戚の家を連れて廻ってく
れたのが嬉しかった。もちは自分の家でたくさんついてい

一、

(1) 五歳頃

(2) 大正の初め

二、農業(小作)、馬三頭、畑一町三反、田一町三反、日雇を

頼んでいた。

三、七人くらい

四、

(1) ○ごはん 米、あわ、からいも、麦、米と雑穀半々

朝、あわ、からいもを熱いうちたべて、残ったのに水を入れてお昼雑炊にしていた。

○おかず つけもの、みそ汁

ぶえんの魚はなかった。肉などはたまにしか食べなかった。いわしも一匹を半分にきつたものだった。

(2) ○ごはん 赤飯(運動会)、結婚式やその他家庭行事は自分の家でした。ちまき

たので、思う存分食べられた。おぼんには菓子屋にぼん菓子を作ってもらい、それを親戚の家持って廻った。

九、今の様によかお菓子はなく、駄菓子(げたんは)だった。

ひもじさはこらえなかったけれど、今はぜいたくなものだ。

塩は三角の竹かごにいれてつり下げ、そこからしたり落ちるにがりで豆腐をよく作ってたべさせていた。私達が子供

の頃は、食べることにしてこま言(文句)など言わせ

なかったし、言わせてもらえなかった。

※ 昭和九年に結婚して子供五人の親になった。戦争の始ま

る前までは食生活には困らなかったが、戦後、配給制になって苦労した。供出させられて食べる米がなかった。

やみ米を買ってそれを売りにいって、それで生活費をつかったこと。生活が苦しかったので、出稼ぎ(ずい道工事)にも半年位行った。

二、農業(畑作だけ)

三、六人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦めし、からいもめし、粟めし、冷汁

とぼしめし(陸稲赤色米で長粒)

そばもち(からいもとそば粉をまぜたものを

にぎって焼いて食べる)

○おかず 魚(いわし)半分ぐらい

みそ汁(大根、イモガラ、イモ、カボチャ)

ふかして食べる(ツツデ、クサツナ、セリ、

ワラベなど)

(2) ○ごはん 白めし

○おかず 煮しめ(いわし揚、大根、ごぼう、人参、コ

ンブ、アゲ豆腐など)

たまに、いのしし肉、豚肉、にわとり肉を入

れたもの

六、いろいろ端にまるくなって。

お父さんは横座(他の人はそこにはすわれない)

七、ふかしたからいも、柿、ナシ、きゅうり(塩をつけて食べ

る)、とうもろこし、さとうきび

美川町 大重 トシ

一、

(1) 五歳頃

(2) 大正の初め

八、○家でみんなでごはんを食べるときが楽しかった。

○米がなくて近所や親戚に借りに行くときがつらかった。

九、昔の自然の食べ物よかった。(栄養上からも保健上からも)今は店の品物、即席のものなどばかりで感心しない。

※ 実家は畑作だけの農家で白米の飯は滅多に食べられませんでした。田圃のある所へ嫁に来て、いつでも白めしが食べられて嬉しかった。私は雇人をたのんで農業をしていましたが、主人は役場に勤めていましたので、食べ物十分買えて特別不自由は感じませんでした。

東区 黒木 ツミ

一、

(1) 五歳頃

(2) 大正の初め

二、農業

三、九人くらい

四、

(1) ○ごはん 米とからいもは年間を通して。

季節によってむぎ、南瓜、だんご、粟、かき

そば、そばきり

○おかず 野菜、漬物、調味料 || 自家製、蛋白質(鶏、

魚は自家製)、卵は病気上りに養成食として。

(2) ○ごはん 赤飯、おにぎり

○おかず 煮めめ、がね、たまごやき、干魚

六、朝と夜は座敷、いろり端に座ってひざよりひくい食台を囲む。昼は土間に腰掛けて野良着のままに食事をとる。

七、冬の間はいろりがあったので焼がらいも、ぼたげ、たまに餅。春は大根、里芋、からいも、かんぴょうのみそ煮他。

だんご(小むぎ粉及び甘藷)。夏は西瓜、うり、とうもろこし、さとうきび、南瓜。秋はとうもろこし、さとうきび、

大豆(たまに、小豆とからいもともち米の煮ころがし、塩

少々)

八、六月から九月頃まで養蚕をやっていたので桑摘み及びまゆかきの手伝いをする。行商人(ホゴバラカツギ)の鮎を母が買ってくれて、そのおいしかったことは今でも忘れられない。屋敷内に実のなる木がなくて他所の家がうらやましかった。店にはたばこ、塩、日用品、マッチ、ぞうり、ワラヂ、ホーキ、おこしごめなどがあったが、家が貧乏していたので買えなかった。

九、全く比較にならない。話してもうそみたい。

※ 戦時中、夫は出征し、私は病気で人手不足のため、農作物に手は廻らなかつた。それでも強制供出もしなければならず、発育盛りの子供にも食物を与えることができなかった。終戦当時、息子は都城泉ヶ丘高校まで朝六時に起きて、歩いて疲れ果て学校から帰ってきてきても何も栄養のあるものはやれなかつた。家の苦しい生計が解っている子供は梅干と水で我慢してくれた。苦しかっただろうが、嫌な顔ひとつ見せなかつた子供の姿が忘れられない。

町区 水谷 文江

一、

(1) 十歳頃

(2) 大正の中頃

二、商業(小間物、学用品、化粧品)

三、四人くらい

四、

(1) ○ごはん 胚芽のついた七分つき米

○おかず 季節の野菜、魚、海藻類、卵、豆類

(2) ○ごはん 赤飯、すしごはん

○おかず お煮(かしわと野菜)、酢の物、煮豆、天ぷら

六、座敷で大きなテーブルの周りにみんなで座って食べていた。

七、時々、母の手作りの菓子やだんご類、ふかしさつま芋

八、嬉しかった事、楽しかった事は季節々々のお祭りと映画、

芝居を見に行くことでした。

九、現在の生活は野菜でも果物でも季節感が全々なくなって味

気ないですね。

※ 私は二十八才で主人が亡くなり、三人の子供をかかえ、

戦前戦後は食生活には苦勞いたしました。思う様にお米

も手にはいらず、お腹一杯御飯も食べさせられない日が

続きました。さつま芋、そば粉、さつま芋の粉のだんご

などでお腹を満たしたものです。お魚は子供が川から釣っ

て来たものをよく食べました。

一、

(1) 十二歳頃

東区 高妻 ヒサ

(2) 大正の中頃

二、父は小学校教員、母は養蚕など

三、十二人くらい

四、

(1) ○ごはん

・カライモ入御飯

・粟入り御飯

・野菜の煮ヅ

・イワシ又は干アジ

・カライモ、ごぼうの揚げ物

(2) ○ごはん 赤飯、白飯、おすし

○おかず 野菜の煮ヅ、卵焼、カマボコ、するめ巻、鶏の煮

付、鶏肉の刺身

五、

(1) 砂糖、塩

(2) 終戦後はカライモ飴を家で作り、甘味の補給をした。

六、夜は座敷で家族一同で子供達の話や使用人からの農作業の

様子を聞き乍ら楽しい夕食でした。朝、ひるは板の間で食

事をとったが、学校や仕事の都合でみんながそろつことは

なかなかでした。

七、からいも、南瓜の塩煮、西瓜

冬は干餅、そば粉を湯がいたもの

八、①お雛祭りの節句に母が手製の蒸羊羹、これ菓子、ふくれ

菓子を近所の方々と作り、腹一杯食べたこと。

②お正月の数の子、巻するめ、干えびはおいしかった。

③六月燈に父の買って来れるトラツガン(アンコ入菓子)

楽しい思い出である。

九、今は余りにも何でも手に入り豊かすぎて幼い時から好きき

らいが許されて育っているのではないでしょうか。また、

肉食が多く、魚介、海草や野菜の取り分がおろそかになっ

ているのもよくないことだと思います。洋食より日本食が

飽きがなくなっておいしく食べられると思います。

※ 私の子育てと云えば、昭和十年頃から戦後の三十年頃ま

で食生活も世相と共に窮屈になる頃で、魚屋も肉屋も近

くにない田舎でしたので、専ら自給自足。鶏肉、卵、川

魚、川ビナ等で、うどんやそばは自分で打って腹一杯食

べることができました。栄養をとり、ひるは味そ汁と漬

物や酢の物ですませ、夜は何か一皿つけてこれでご馳走。

私の十八番は自家製の卵を使つてのオムレツで子供たち

は喜んで食べてくれました。今思うと六人の子供が苦し

い食事情の中で育った故か、好き嫌いを言わなかったことが母として何よりの幸せだったのではないでしようか。

今屋 鶴島 善市

町区 熊原 光善

一、

(1) 十四歳頃

(2) 大正の末頃

二、商業、トウフ等売っていた。

三、五人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦めし

づし(飯に野菜をぶっこんだもの)

○おかず やさいの煮物

(2) ○ごはん 米のごはん

○おかず 魚等

六、いろり端

七、からいもあめ等

九、現在何でもある世の中でありがたい事だと思っております。

一、

(1) 五歳頃

(2) 大正の中頃

二、農業(種馬、種牛)

三、十五人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦飯、粟飯、からいも飯

時にはひや麦飯

○おかず 味噌汁、漬物、梅干、味噌漬、ソバ切り、そ

ば汁、トーフ、魚、焼ナス、らっきょう、団

子汁、白合しらあえ、其他

(2) ○ごはん 赤飯、白米飯、まぜ飯

時期に合わせてチマキ、甘酒、ゆべし

○おかず 煮め、卵焼、油いため(材料は野菜、コンニャ

ク、鶏肉など)、魚の卵焼き、火乾し川魚、

スルメまき

五、

(1) 魚、海藻類、塩、酢、砂糖

(2) 農作物または鶏肉と物々交換

六、土間には足つきの高食台（三人くらい掛けられる腰掛）

座敷にはお膳が一人ずつ備えられ、大人数でしたから食事時は大変でした。早目に座に着かないと片隅に追いやられて小さくなって食べなければならなかった。

七、さつまいもの煮もの、南瓜の塩煮

祝祭日には御餅や団子、米の粉、からいも粉。五月節句にあくまき。お彼岸には菓子。夏には西瓜、うり、砂糖きび、柿、ナシが屋敷内になっていた。又、山にはとんぼやあけびの実をとりに行ったものです。

八、祝祭日には母の御馳走はもちろんのこと、お盆や正月の親類回りの御馳走食べが大変うれしく楽しいものでした。

九、私等は小さい時から雑穀類をたくさん食べて育ってきましたので、八十歳まで元気に過ごしてきましたが、今の若い人は甘い物や人工食品ばかりで育っていますから、私達のように七、八十歳位まで大丈夫、元気で過ごせるだろうとか心配致して居ります。

※ 私達の若い時代から中年時代までは食生活には何不自由なく過ごしてきましたが、戦争が始まってからは大変な苦勞の連続でした。しかし、お国のためと思って死にもの狂いで頑張ってきました。今思えば話にならない様な

苦勞も有りました。自分で作った農作物も自由にならず、又、子供の普段着もなかなか手に入らず、親が昔、大事にしていた着物を仕立て直して着せてやったこともありました。今は何不自由なく生活できる時代になって本当に幸福だと思います。

西区新留 茂

一、

(1) 十歳頃

(2) 大正の末頃

二、単純労働者

三、三人くらい

四、

(1) ○ ごはん 麦飯、唐いも飯、粟飯、かぼちゃ飯

○ おかず 野菜の味噌汁、味噌漬、唐人干（ガランツ）、

鱈開き干物、油味噌

(2) ○ ごはん 銀めし（たまに）、炊き込みごはん、卵飯

○ おかず 馬肉の煮付、ガネ（人参、牛蒡等のでんぷら）

昆布の佃煮、卵焼、鰯の湯なます

五、

(1) 無塩の魚（ブエン）

(2) 天秤棒のかつき屋さん

六、ずぜ鍵（自在鍵）のあるいろり端で手付き鍋をつるして炊きながら家族みんなでつついて食べた。

七、○学校から帰ったらめしを高菜の漬物の一枚大葉に包んで食った。

○かぼちゃや唐きびの炊いたもの。

○からいもの炊いたもの。

○下駄ん菌菓子（クロンボ）と言っていた。

八、○盆、正月に谷頭タシガシタの伯母の家へ行くと、そこは旅館だったので本当においしいもの（なんでんかんでん）を食わし

てもらった事と五銭いつもくれた事が一番うれしかった。

○山野に行つてはガラメ、山梨、あけび、ムベ、ぐみ、サ

トガラ、畠の生ガライモをかじった時のおいしかったことが懐かしい。

九、○当時は鰯をあぶって肉を食ったあとは骨を又あぶって嘸んだものです。

○現在は脂肪を摂る量が多い傾向にあるが、小生は控え目にしている。

※ もう六十七才ですので、遠い昔のような気がしますが、

子育ては戦後の食糧難時代で、からいものつる、かぼちゃ

の新芽等、何でも食わせました。子供三人に協同で鶏十

羽と兎四、五ひき飼育させ、月に鶏一羽か、又兎一匹位

をつぶして栄養源としていました。鰯の骨も昔、自分達

が食ったようにあぶって食わせました。お蔭で皆んな三

十過ぎまで虫歯がありません。小生もまだ歯、眼もその

次のものも丈夫です。（笑）

今屋原 口 ミサヲ

一、

(1) 六歳頃

(2) 大正の末頃

二、二才で父を七才で母を亡くしまして、母方の母（祖母）の手に引き取られ、貧しい水呑み百姓で生計を立てていた様

におぼえています。

三、五人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん

- おかず 味噌汁、つけもの、うめぼし、そば等
(2) ○ごはん 白米のごはん

○おかず お正月にはかしわ等。普通の祭り、祝い事等には卵焼き、焼き魚ぐらいのものでした。

五、

- (1) お米と肉類

(2) ○祖母が灸をしていましたのでお金の代りに頂いておりました。

○畑でとれた作物(さつまいも、里芋など)と物々交換。

六、土間に腰かけたり、いろいろ端で食事をしていました。

七、さつまいも、とうもろこし、かぼちゃ、小麦のだんご、からいものだんご等

八、私は子供の頃から麺類が好きでしたので、うどん、そばを作ってもらった時が嬉しかった様に思います。

九、昔はお菓子等はもちろん、魚類、肉類は貴重なものでしたが、今では朝夕頂ける時代に恵まれて長生きして良かったと感謝致しております。

※ 子育て時代が戦時中、終戦時代だったので私が子供の頃

以上に粗末な食生活でした。麦ごはんはもちろん、粟とからいもを牛のえさみたに入れて食べていました。か

しわと言えば年に二、三度食べるものが精一杯でした。

東区坂元キミ

一、

- (1) 八歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業。母(畑耕作、養蚕)、兄、姉は勤め

三、九人くらい

四、

- (1) ○ごはん 白米

○おかず 味噌汁、魚、トーフ等

(2) ○ごはん 赤飯、おすし

○おかず 鶏、卵焼、かまぼこ

五、

- (1) 戦争中は塩、砂糖

(2) 塩は串間まで買いに行った事があります。

六、土間の板張りにテーブル(食台)おいて食事をしていました。

七、唐芋飴、おこし、コンブを一銭買って店に買いに行っていました。

した。梨、柿、桃、ぐみ等は屋敷内になっていましたので、
とって食べてました。

八、元旦には一人一人会席膳にお吸物、お煮、煮豆、数ノ子
等がついて、年長者から順番におとそを頂きました。学校
の始業式から帰って残しておいたご馳走を頂くのが楽しみ
でした。運動会の御馳走は母が鶏をつぶして煮つけてかま
ぼこ、卵焼き、てんぷら等、お重箱につめて持ってきて来
るのが楽しみでした。

九、今の人達は何でも手に入って、食物の有難さがわからない
様に思います。

※ 私は戦後の子育てでしたので、食生活には余り困りませ
んでしたけど、今頃の子供達はぜいたくに馴れ、恵まれ
過ぎていてのではないでしょうか。

妻ヶ丘 瀬戸山 計佐儀

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業（米作、養蚕）

三、八人くらい
四、

(1) ○ごはん 米（約三分の二）、混炊（米約 $\frac{2}{3}$ 、麦か粟約
 $\frac{1}{3}$ ）、麦か粟か甘藷（約三分の一）、搔きソ
バ、小麦団子

○おかず 煮物（大根、高菜、人参、牛蒡の味噌漬）、
酢の物（大根、コンブ）、汁（味噌汁か醤油
汁）、野菜、油いため物、魚（イワシ、飛魚、
サバ、鮎、鯉）、団子汁、牛肉、馬肉、豚肉

(2) ○ごはん 饅羹飯（赤飯）、ソバキリ
○おかず かしわ肉（刺身、煮付）、獣肉、煮しめ

六、朝と晩はいろいろのある茶の間。

昼は田畑から帰るので、主婦以外は概ね土間（腰かけて）

七、○学校から帰ると、羽釜の焦れ飯を左掌にのせ、右手には
漬物を握って食う。

○飯がない時は、冬は柿の木など庭樹に昇り、その実をち
ぎって食う。

○飯がない時は、夏は野菜畑の胡瓜、茄子をちぎり塩をつ
けて食う。

○母が用意してくれている煮甘藷、煮里芋、団子、焼きい

もなどを食う。

○ 何もないときは、生の甘藷を食べる。

八、○ 食い盛りのころ腹を空かして学校から帰り、カバンを投げて台所の羽釜の蓋を取って食う焦れ飯ほどおいしいものはなかった。

○ 牡丹餅などは更にうまかった。

九、○ 子供の頃の食べ物主食、副食物、間食に限らず、殆んどが自家製（魚、獣以外）であり、数本屋敷内に植えてある柿の実などもうまいものであった。

○ それに反し、現在の食生活は豊富過ぎて、勿体ない位である。（これが長寿にも繋がるのであろうけれども）。そして子供などは、柿など食おうとしないのは不思議さえ感ずる。

※ 近代の親は衛生、生理の学を学校で一通り学んでいるので、バランスのとれた食品を選んで料理し、なるべく多種の食品を卓上に並べて家人に供するのは、主婦の一苦勞でもあるが、これも家庭の健康管理の一つでもある。

今屋田村 ミツエ

一、

(1) 七歳頃

(2) 昭和の初眼

二、農業。その頃、養蚕が盛んで大きな収入源でした。

三、十六人くらい

四、

(1) ○ ごはん 米、麦飯、甘藷、粟

○ おかず 味噌汁、煮付け、魚、漬物、豆腐

(2) ○ ごはん 赤飯、米飯

○ おかず 田植上りと十一月三日の豊穰（ホゼ）お正月等は放し飼いにしている鶏をつぶして祝っていました。それが何よりの御馳走でした。

五、

(1) 野菜、豆腐、内臓、魚

(2) お米や卵などと物々交換

六、いろいろ端、土間、板の間、大世帯なので決った場所はなく、どこでも空いている処へ行って食べました。食事の時はきちんと座って食べる習慣で、おしゃべりをするとな怒られるので黙って食べていました。

七、家ではおばあさんが良くからいも、かぼちゃ、とうもろこし等煮て食べさせてくれました。何もない時はにぎり飯を漬物の高菜の葉にまいて食べたりしており、ひもじい思いをした事はありませんでした。

八、学校のお弁当はにぎり飯に梅干しと決っておりました。遠足の時は卵焼きと味噌漬のおかずがとてもうれしいものでした。たまに夜だけ魚（いわし）のご馳走でしたが、大世帯でしたので一匹はもらえず半分ずつでした。運動会の時、家族と一緒に赤飯と煮付けを食べるのが一番楽しい思い出です。

九、今では健康第一に栄養のバランスを考え、一日に三十種類以上の食品を摂る様、勉強しておりますけれども、子供の頃は何でも腹いっぱい食べさえすれば良かったものでした。

※ 子供の親になって戦中、戦後、物の不足により自給自足さえ不自由な生活が続きました。衣類も配給制で自分の若い頃の着物でモンペを作り替え、子供のリュックサックも夏帯をといて作りました。その頃、綿を植える人がありましたので、私も種を分けてもらい、五月に種を蒔いて秋になると黄色い花が咲き、白い綿をふきますので、その綿の種を種取機にかけて種を取りました。種取機と

いってもまゆのふけ取り機みたいなもので、手で廻して簡単に分けられました。その綿を三十糎位の篠をつくり左手に篠を持ち、右手でぶんぶん機を回すと面白い様に糸が出て来て中の管に巻きつけられ、それをかせにして好みの色に染めて縦糸はかせ売りのおばさんから分けてもらって、実家の母から縞を作ってもらい、始めて織り機で反物二反織り上げました。不馴れで糸は良く切れるし、大変な苦勞をしましたが、織り上げた時は本当に涙が出る程うれいものでした。今になって考えると気の遠くなる様な仕事でした。こんな苦しい時代を乗り越えて、今では何もかも豊富にあり、幸せな日暮しをする事が出来て、毎日々々感謝の気持ちで一ぱいです。

宮島 土屋 忠 則

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業

三、八人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん、カライモごはん、粟ごはん

○おかず ヤサイ、トーフ、イワシ、トウジンボシ

(2) ○ごはん 赤はん

○おかず テンプラ、大根、人参、里イモ、アゲトーフ、

コンブ入りの煮しめ

六、土間、いろいろばた

七、カライモ、サトイモ

九、昔と比べものにならないほど今の食生活は良い。

宮島 今村 勇

一、

(1) 七歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業。主に養蚕、小作地四反

三、八人くらい

四、

(1) ○ごはん 粟とカラ芋半々位、麦と米四対六

○おかず 朝晩は味噌汁。昼は漬物、大根葉。弁当のお

かずは大根葉、ラッキョ、梅干

(2) ○ごはん 赤飯か米飯

○おかず かしわ入り煮しめ、玉子フライ、丸干の油揚

五、

(1) 魚(生もの、干もの)

(2) 農産物(米と玉子)で魚と交換

六、朝晩はいろいろ端か座敷。昼は土間。座敷で食べる場合は終

るまで正座。必ず夕食の前には佛様を拜む。目刺の魚が出

ると必ず半分は朝のおかずにとっておいた。

七、午前中の間食なし。午後の学校帰りにカヤの根、ツバナ、

ムクの実をとって食べる。帰宅してごはんにつけもの。時

たまカラ芋が煮てあった。ない時は生カラ芋を食べる。

八、四月八日が祭りの日で、明る日の弁当のおかずに祭りの残

りのご馳走が這入っているので、昼食時間前に何回も明け

て見て少しつまんだ。毎年一回であるが、その日がうれし

かった。

九、私達の子供の頃は明治の末期から大正の初期の頃よりは大

分良くなっていたとは思いますが、でも肉、魚は年に数え

る位しかなかった。又、大東亜戦争終戦前後の食糧難に会

い、食べ物には心配した経験があるため、今の食生活を見

でもったいない事ばかりである。何故捨てる程の必要以上の食べ物を作る事になったのでしょうか。

※ 終戦後、復員して子育てを始めた頃はまだ食生活も悪かった。栄養を考えて与えるだけの余裕はなかった。殆んど小遣も与えず辛抱させて育てた長女等は玉子売りや野菜売りまでやって家計を助けてくれた。

町区 熊原 ヨシエ

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の初め

二、製糸工場

三、五人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん

○おかず 味噌汁、つけもの、梅干し

(2) ○ごはん 白米ごはん

○おかず かしわの卵まき

五、

(1) お米

(2) 衣類と交換

六、座敷で食台をかこむ。

七、煮からいも

※ 子は親のうしろ姿を見て育つということを感じておりません。

町区 鶴村 肇

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業

三、九人くらい

四、

(1) ○ごはん 粟の飯が多かった。

○おかず 季節の野菜が多かった。冬は干菜(大根の葉)

(2) ○ごはん 赤ごはん

○おかず 鶏肉と野菜の煮べ、魚の煮付

六、殆んど、いろり端で食事をした。

七、春はモモやにぎり飯。秋は柿、さつま芋など、又は畠のきゅうりにそのまま塩をつけて食べた。

八、一番嬉しく思った事は父親が折詰等持ち帰って、それを皆んなで分け合って食べたこと。

九、戦後は一時食糧がなく、腹を満たすのに精一ぱいで、いろんな物を食べた。その頃にくらべて今はあらゆる食糧が手に入り、食べ過ぎる位あるので、成人病とやらが多くなつたでしょう。

※ 戦後一時は長旅には弁当がいました。(駅弁は勿論ありません) 毎日、お粥を食べていた昭和二十二年頃、熊本に用事があって行くことになった。昼食用に列車の中で食べ様と水筒の中にお粥を入れ、谷頭駅から出発しました。昼頃になって食事のおかゆを食べようとしたが、まわりのお客がお水と勘違いして「水を吞ませてくれ」とでも云ったら、大恥をかくと思い、腹ペコのまま八代辺りまで我慢し、とうとう熊本に着いた。列車を降りてから、人にかくれてやっと大事なおかゆを飲んだつらい思い出がある。

一、

(1) 十五歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業

三、七人くらい

四、

(1) ○ごはん

ほとんど一年中、米、押麦半々位のごはん。冬は米、粟とからいも入りのごはんでした。

粟めしが一番下は米のめしになるのでおいしいものでした。

○おかず

自家生産の野菜を時期的に一ぱい入れた味噌汁かにつけ等でした。味噌も醤油も全部自家製品でした。冬はそば切りを多くさん作ってごはんなしで食べる事が多かったです。

(2) ○ごはん

たまに赤飯が出来ると、とても嬉しくて多くさん食べたものです。米飯などはほとんど無かったです。

○おかず

お魚もいわし、干物等が一人半分宛あればおしいしかったです。現在から考えると夢の

ようですね。

五、

(1) 農家でしたので有りましたが、米は一年分の半分位の後は全部出荷しておりました。米代金で一年分の経費を作っていたのでしよう。現金収入が他になったから卵等を貯めてお店で魚等と交換していたようです。

六、夏は土間の食台でした。大人は一年中食台でした。冬は子供達はいろいろ端でした。

七、からいもの生、たまにふかし芋、きゅうりの生をかじったりしました。たまに大人がいない時はごはんの残りをタナカの漬物につつんで食べると非常においしいものでした。柿等も良く食べましたね。

八、お正月等で赤飯等出来た時、嬉しくたくさん食べたものです。農家でしたので、何か食べものはありましたので、生でもかじってひもじい思いはしなかったようです。

九、現在から考えると、半分位は食べないようなものでしたね。現在のような食生活がある事等考えられませんでした。今はなんでも有るのに、未だ不足を言ってますから不思議に思えます。

※ 上が男の子三人と娘が一人でしたので、非常に良く食べ

てましたので、母(祖母)が毎日からもをふかして食べさせていました。今でも言ってますが、あのころのお祖母さんのからいものが学校から帰ってから食べるのがおもしろかったと。

上平田 福留 ユキエ

一、

(1) 十三歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業

三、十一人くらい

四、

(1) ○ごはん ほとんどの時期、米、粟、からいものごはん
で人数が多かったから、大カマでたくのでおいしかった。

○おかず 一年中味噌汁か醤油汁で野菜がたくさん入ってました。味噌、醤油は全部自家製食品でした。
(2) ○ごはん 特別変りなかったようです。

○おかず たまにお魚がいわし等の半分位、柿の葉の皿

に入れて食べるのが楽しみでした。

五、

(1) ほとんど自家製産でまかっていたようです。

(2) 米や卵と交換して魚等たまに買っていたようです。

六、板敷が広くて皆並んで食べました。

七、からいものふかしたのや、かぼちゃのふかしたものでした。

八、たまに食べる魚がいわしの半分が嬉しかった事をおぼえています。農家でしたので何かありましたので、ひもじい思

いはなかったようです。

九、何んでもあるものをおいしく食べていたから、かえって良

かったように思います。現在はあまりにもぜいたく過ぎま

※ 男の子が良く食べるので、姑が毎日からいもふかしたり、

芋の粉のだんご等、良くつくってくれました。

東 区 入 来 ミ ネ

一、

(1) 九歳頃

(2) 昭和の初め

二、養蚕、鯉の養殖

三、八人くらい

四、

(1) ○ごはん

○おかず

・野菜、あげ豆腐など具の多い味噌汁

・酢なます（おろし大根、いわし）

・味噌あえ（ふだん草、ねぎ、たけのこ）

・その他、卵の正油かけ、梅干、するめの佃

(2) ○ごはん

○おかず

・煮付け（にわとり、揚げ豆腐、野菜）

・にわたりの刺身

・野菜のテンプラ揚げ

・とうじん干しの卵焼（いわし）

六、いろいろ端のある座敷。時にいろいろ端でいわしを焼いたり煮

たきもする。座敷の飯台は父が大正の終り頃に家を建てた

時の材木（厚板の杉）を利用したもの。今頃のシャレタ飯

台とは違っておりました。両親の元気な頃、（昭和四十三

年）まで座敷を利用しました。

七、・焼きいも（カライモをいろいろの灰に埋める）

・ぼた餅、だんご（材料はカライモ）

・カライモあめ（自家製、竹ぐしに丸めて食べる）

・小麦粉のだんご（黒砂糖にまぶす）

・ぜんざい（材料は小麦粉、ササゲ豆、カライモ）

・ニッケ水（赤色、ひょうたん形のガラスびん入り）

八、一銭持って山元菓子屋でお菓子のくずら（げた菓子を作るときでるくず）を買って食べた嬉しさ

・桑の実をちぎって食べ、口のまわりを紫色した思い出

・庄内川の堤防でつばな摘みして食べた思い出

九、台風の後、願心寺の落ちた柿の実を拾って食べた思い出
・お金さえあれば何でも食べられる結構な時代です。ぜいたくになった今の子供はごはんもおやつでも平気で食べ残してほったらかしにする傾向がある。もたないという気持を育てることと、食生活と健康に注意するのが親の務めではないでしょうか。

(2) 昭和の初め

二、農業

三、六人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん、カライモ飯、アワ飯

○おかず 毎日味噌汁。季節の漬物、たくあん。週一回

位唐人干し、メザシ

(2) ○ごはん 赤飯、五目飯（マゼメシ）

○おかず 正月、おぼん、彼岸、節句にはサバの魚か、

にわとり、年二回位、内臓迄料理にして、勿

論頭も食べた。

五、

(1) 唐人干し、メザシの魚、トーフ

(2) 行商の魚屋さんが来られても、現金収入が少ないので卵等で物々交換していた。

六、家屋が狭い上に、家族数も多く、其の上に居間は全部養蚕

室に使用され、夏場はほとんど土間等での食事でした。

七、サツマイものふかしたのか、にぎり飯、里いものふかした

もの

八、小農家なるが故に、現金収入が無く、床屋に行くのはまれ

一、

(1) 十二歳頃

千草村 永 強

でした。母が時々タビナ（たにしのこと）を採って来て、油いためにして食べさせて呉れたのが印象に残る。

九、今時の子供達は幸福此の上なしです。文明社会にふさわしく育ち、仲々と明るく健康な生活が送れると思います。

※ 親は魚も頭としっぽでしんぼうし、子供の弁当にだけは中身を入れてやり、しっかり勉強してきなさいと願うのが親心です。

千草 赤池 実年

一、

(1) 八歳頃

(2) 昭和の初め

二、農業（水稲、畑作）、養蚕

三、十一人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦飯、あわ飯、いも飯

○おかず 味噌汁、たくあん、漬物、うめ干

(2) ○ごはん 白飯、赤飯

○おかず かしわ、佃煮、干魚、あげもの

一、

(1) 八歳頃

(2) 昭和の十年代

二、農業（田 \searrow 四反、畑 \searrow 四反）、牛 \searrow 一頭

三、七人くらい

四、

(1) ○ごはん 白米 $\frac{1}{3}$ 、甘藷 $\frac{1}{3}$ 、あわや麦が $\frac{1}{3}$

○おかず 朝はらっきょうか醤油の実。夜は野菜がたく

さん入った手打ちうどん汁。一週間に一、二

回、さんまの焼いた物。

(2) ○ごはん 赤飯、小豆をつけただんご

○おかず 祝いごと、運動会の時は、

・自家製の野菜にかしわの煮付けと卵焼き。

・母は鶏をつぶすと小分けして、一週間くら

いはうどん、そばのダシにしていた。

五、

(1) 砂糖、塩、とうふ

(2) ・砂糖、塩は物々交換のようでした。

・とうふは大豆を持って行ってつくってもらっていた。

六、夜はいろいろ端を囲んで楽しい夕ごはん。突然お客がくると、そこがすぐ客間になり、母はあわててなべやはがまにフタをしていたのを思い出します。中味を見られたくなかったのだろうと子供ながらに考えたものです。

七、甘藷の粉だんご―自家製、サッカリンを入れて甘味を出していた。学校から帰ると手さげを（その時、カバンは無かった）持ったまま野菜畑に行つて、ちぎったばかりのきゅうりに塩をつけて食べるのが楽しみだった。風呂たきの手伝いだったので、灰の中で焼いたふかふかの焼きいも（おいしかった）

八、・病気になることからいもあめをはしにまいて食べさせてくれたり（自家製）、ゆでたまごとかバナナを食べさせてくれたのが忘れられない。

・母智丘の桜まつりには十円もらって歩いて行つてたのを思い出す。（その頃、五円でキャンデー二本）

九、わたし達の時代は、四季を肌で感じて自給自足の楽しみを味わいながらの生活でした。親も放任主義で自然の中で兄弟や仲間と遊ぶ中で社会の秩序を覚えたようです。

※ 親と同居が当りまえのようにして結婚した私達夫婦でしたが、どうにか食べることは苦労はなかった。しかし

子供だけは人並にさせてやりたいと思う気持で子供が欲しがりもしないものまで買い与え、お金がないといつては心配していました。今考えると、物のない時代に育つた私の思いが、どこか胸のおくにあり、無理をしていたのだなあと何故かむなしくなることさえあります。

千草 白 杵 通 夫

一、

(1) 十四歳

(2) 昭和の十年代

二、農業

三、六人ぐらい

四、

(1) ○ごはん 麦めし、カツソマ、からいもめし、粟めし、

銀めし、自家製のうどん、そば、「ずし」

「ゆたてめし」

○おかず 味噌汁（干菜汁、セシカラ汁）、あぶらいた

め（にがごい、いとうり、なすび）、あげも

の（がね）、つけもの（みそつけ（大根、ニ

ンジン、コンブ、ゴボウ)、しおつけ(白菜、大根)、イモンヌタ、シラアエ

(2) ○ごはん 赤飯、ポタモツ(おはぎ)

○おかず にしめ、がね、ガランツの卵まき

五、

(1) 無塩の魚

(2) ぜいたくものであり、月に二、三回買っていたようだ。

六、居間で食台に並んで正座して食べていた。

七、生ガライモ、ネツタポ(ポタ)、煮ガライモ芋、にぎいめ

し、山の幸(柿、栗、とんぼ、ぐみ…)

八、うれしかったこと

・正月、お盆の親類宅への訪問

・田植が終了したとき鶏をつぶして食べさせる習慣

・十一月のほぜの甘酒

・自家製のコンニャク

九、当時は生産活動、飼育活動をとおして自給自足の生活は充

足感を与えていた。

※ 食生活は豊かになり、子どもが少ないが故に競争して食

べるようなことが見られず、私達の育つ頃はご馳走に値

するものでも、そう感じない子どもたちの世界ではなかつ

たかなーと思います。

一、

西区 山口 耕 二

(1) 十歳頃

(2) 昭和の十年代

二、小作農家で父親が屋根葺職人であった。

三、三人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん時々白ごはん

○おかず ・朝はみそ汁、おにしめが主であた。

・タカナ漬、大根漬、梅干は年中自家製があり、食事には常にあった。

(2) ○ごはん 赤飯(たくさん炊き過ぎて幾日も食べさせられた)

○おかず 煮メ

六、土間に自在カギがつるしてあり、それに柄のついて鍋を掛

けて煮ものしていた。冬はいろいろで暖をとりながら食事をした。

七、甘藷が煮てあり、裸麦をいり粉にしたものや砂糖をまぶして食べる。時には、畑で茄子やキュウリ、トマトなど、生のままかじったものです。

八、私は事情あって六才の時、子供のいない家に養子にゆきました。小学一年生の時だったと思います。炭火の上で焼いたイワシの頭の部分をポイと捨てたら、親父に叱られ、その上柱に縛られ、ズボンが小便にぬれても解いてももらえなかった、にがい経験をしました。それ以来、イワシもアジ等も頭から食べる様になり、そのせいかな、健康で歯も丈夫です。今になってやっと有難さがわかり感謝しています。

九、現在は何でも容易に手に入り、残りものなどは捨ててしまえますが、私は食べ物について大事にする事が身についておるせいか、どんな残りものでももういっぺん加工して食べてしまいます。他所に行っても出されたご馳走は残さず食べるのをモットーにしています。

※ 私は今、子育ても終って老域に入っていますが、子供の食事については何でも出したものは好き嫌いを言わずに食べることに、また絶対食べる様に躡りました。そのために味をよくする様に家内には努力してもらいました。子供達が十歳くらいになった頃から、おかずでも果物でも四

等分して食べたものです。この様にして育てた子供達の今の子育てはまた違ってきます。これも生活の豊かさ、何でも手に入る時代のせいでしょうか。

平田 和田 盛行

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の十年代

二、父が支那事変で出征中でしたので、母がむしろを織って生計を立てていました。又農家の草取りや水稲の生育の加勢等で労賃を稼いでいました。

三、四人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん、カライモごはん

(2) ○おかず 大根のみそ汁、たかなの漬物

○ごはん 赤飯

○おかず ガネ(野菜)、煮しめ

五、

(1) いわしの丸干し

(2) お米と物々交換

六、冬はいろりに薪をくべて暖をとりながら、いわしを焼いて食べた。まれにしかなかったが、印象に残る最高の味でした。

七、カライモのあぶったものや、ガネ等でした。

八、戦時中、学徒動員で福岡県の香椎の軍需工場でこうりゃんと麦の中に、米は数えるほどのスイトンで耐えしのいだ苦しい頃がなつかしい。

九、当時、ラーメン等、聞いたこともなかったし、食べたこともなかった。現在はありと凡ゆる物が豊富に出廻っていて隔世の感がある。

都城市内 金 田 光 子

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の十年代

二、給料生活（呉服店の店員）

三、六人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん、芋ごはん

○おかず 味噌汁、つけもの、煮つけ、すのもの、いわしの干もの、さばの煮付け

(2) ○ごはん 赤飯、ばらずし

○おかず 煮物、がねのてんぷら

五、

(1) 米、肉、魚

(2) すべて配給でがまんした。一ヶ月に一回の肉。一ヶ月に一回の魚（ブリの切身）

六、座敷（茶の間）に丸いテーブルをかこんで兄、姉、弟達ときちんと坐って食べましたが、四ツ身の着物が合わなくなつて、ひざを出していると父のげんこつが容赦なくとんで「女の子のくせに、何故ひざを出しているか」とよく叱られたものです。泣き乍ら前かけをして食べていたことを思い出します。

七、さつまいものふかしたものの、からいもあめ、ペロペロアメ（からいも）、おにぎり

八、雨が降る日は外へ遊びに行けないので、父がよくゼンザイを作って食べさせてくれました。

九、戦争の最中にすごした故か、ぜいたく等考えた事もありま

せんでした。現在は金さえ出せば何でも手に入るし、物があふれています。今の食生活と比較して当時はよく病気もせずに育ったものだと思えます。

※ 私は終戦の翌年、旧満洲より体ひとつで引揚げて参りました。三日で帰れる処を六十日かかって、日本の土を踏んだ時のあの感激：三十八度線を歩き乍ら、食うや食わずの毎日、野宿しながら川の水のみメダカをすくい、大根の葉を口にしながら生きのびて来ました。その後、体ひとつで何にもない生活は大変なものでした。子供にも「今夜はこれしか食べる物がありませんからがまんするのよ」と云いきかすると子供たちはだまって親の与える物を食べてくれました。一ヶ月に一回、筋肉、魚一切れの配給があり、後は殆んど油いため等して食べました。米は配給を残しヤミで売ったりしたため食べない日もあり、夕方、貧血で倒れたりし乍らもどうにか食いつないで来ました。

千草長 友 ハツ子

一、

(1) 十二歳頃

(2) 昭和の十年代

二、私の両親と弟妹は大牟田の三池に住み、父は炭坑で働いていました。私は三才から十四才まで祖父母に育てられ、祖父は農業のかたわら荷馬車で山から材木を運び出す仕事もして居りました。祖母は年四回位は蚕を養って居りました。

三、三人くらい

四、

(1) ○ ごはん アワ飯、麦飯、カライモ飯

○ おかず 味そ汁、生魚、トーフ、ウルメカイワシの目

ざし、梅干、大根の漬物、ラッキョウ漬

(2) ○ ごはん 白飯、赤飯、巻ずし

○ おかず かしわ、魚のミリンぼし、玉子焼、テン普拉、

佃煮

六、座敷で食べていました。弟妹もいませんで、おいちゃん、ばあちゃん相手に何も話す事なく、唯黙って食べていました。

七、さつま芋。時にはアメかお菓子、センベイ。隠居のバアさ

んが私が学校から帰る頃には、毎日の様に焼芋をして待っていてくれました。それが楽しみで学校から帰るとバアサン所にかけて込み、焼芋を食べました。何よりも美味しい芋菓子でした。なつかしく思い出されます。

八、嬉しかった事…祖母が親戚や出征祝等に行った時など、出された玉子の煮物とかしわなど食わずに私に持って帰ってくれた事。

楽しかった事…正月とか彼岸など親戚に行くのが一番楽しかった。色々な御馳走が食べれるから指折り数えて待つたものです。

九、金さえ出せば何んでも手に入る食品。特にインスタント食品類、味のこった煮物、色の付いた漬物等、買って食べる気にはなれませんね。わが家で作った野菜に自分なりの味付けしたものが何よりも美味しく食べられます。又、健康の為にも良いのではないのでしょうか。

※ 戦後間もなく二十二年に母親となりました。其の頃はまだ米の供出制度がきびしく割当て分は必ず出荷しなくてはならず、保有米も充分に取れませんでした。少ない米を一年間食いつなぐには米と麦を少し入れてカボチャ、ミヤコ芋のイモガラ等を入れて、ずし飯をしたり、カラ

イモの粉を引いてダンゴ入り飯にしたりして食べさせました。育ち盛の子供達が腹へらして文句もいわずに食べている姿をみて、辛い思いをした事を思い出します。

小松原町 柳 田 佳 子

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の二十年代

二、商業(酒類、食料品)

三、六人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦入ごはん

○おかず みそ汁、野菜の沢山入った醤油のおつゆ、野

菜の煮物、干魚、煮魚、佃煮、ふりかけ

(2) ○ごはん 白ごはん、五目ずし

○おかず すまし汁、おさしみ、煮豆、鶏のうま煮

六、座敷

七、・さつまいも煮たもの、油であげたもの

・パン(中島パン店に小麦粉を持って行ってパンと交換で

きました。(

・くずねり

八、嬉しかったこと

・配給のサッカリンの箱をなめて甘かった思い出が強く残っています。

・じゃがいもをつぶし砂糖を入れて茶きんぼりを作ったり、いもようかんを楽しく作ったこと。

・ごはんを均等に人数分につき分けるのですが、他の人が多いのじゃないかと思わしたにがい思い出もあります。

九、子供のころに食べものについての執着が大人になっても続いているのだと思います。不自由を常として育ったので、何んでも有難くおいしく食べられ幸いです。防空壕の上に植えたカボチャやヒマなどで野菜作りの基礎も自然に学べたし、現在の便利な食生活がばったり止まっても、何んとか工夫して食べることが出来ると自負しています。

一、

(1) 十三歳頃

(2) 昭和の二十年代

二、農業

三、七人くらい

四、

(1) ○ごはん いも入りごはん、粟ごはん(白米六：粟四)

○おかず おみそ汁(野菜がたくさん入っていた)、夕

食にはプラスお魚の干物とか、週一回カレー

等

(2) ○ごはん 白ごはんをにぎる、まぜごはん、ちらしずし

○お煮しめ(野菜、鶏肉等)

五、

(1) 魚類、肉類

(2) 行商人のおばさんから、お米や大豆と交換。現金があれば肉屋さんに買いに行く。

六、夜だけはいろいろ端。朝や昼のあわただしい時間は土間。ただし、母は常に土間で食事をしていました。

七、夏、すいか、めろん等、家で採れたもの、とうもろこしの

だし、母は常に土間で食事をしていました。

七、夏、すいか、めろん等、家で採れたもの、とうもろこしの

ふかしたもの。秋、柿、さつまいものふかしたもの、粟等、山で採れたもの。冬、焼きいも、おもち。

八、嬉しかった事、お祭りの時や運動会の時など、母や祖母のせいっぱいの手作り料理を食べられた事。

楽しかった事、明日は遠足という日はおやつを自分で作って持って行き、友人に分けてあげた事。

九、現在の食生活は飽食の時代と言われるように、お金を出せば何でも手に入る時代です。食べ物はあり余る程あって、スーパ―などでは売れ残った品物は捨てられているそうです。私達の子供時代には考えられなかった事です。食事を作る立場の大人になった今、捨てるのは「もったいない」という気持ちからか、あるいは子供時代に食べられなかった分を取り戻そうとする意欲がそうさせるのかわかりませんが、健康診断などで「食べ過ぎ」「飲み過ぎ」を指摘されるようになってしまいました。

上川崎 福島 ハル子

(1) 十一歳

(2) 昭和の二十年代

二、少しばかりの農業の傍ら、父は石工をし現金収入を得て生計を立てていました。

三、六人くらい

四、

(1) ○ごはん

取れる米は家族六人が食べるぎりぎりなのに、現金収入がほしかったのでしよう、少しでも供出していました。残った米が一年分の食糧です。米と同量の麦を入れ、その上さつま芋の入ったご飯でした。

○おかず

週に一回か、十日に一度魚を食べさせてもらいました。野菜の油炒め、割と良く食べたのが天麩羅(がね)でした。魚は一日おきに、おじさんが自転車で売りに来て居ました。その時の魚は鰯の干物です。

(2) ○ごはん

学校の運動会には良く赤飯を作ってくれました。そして何かが有ると混ご飯でした。良くばた餅も作ってもらいました。

○おかず

鶏の入った煮め、天麩羅特に鰯の丸干しの天麩羅は赤飯と良く合っておいしかったもの

です。又、修学旅行や遠い親戚等に行つて帰宅の日にはサカムケとか言つて一寸普段と違つた物を作り、母は待つてくれていました。

五、

(1) 干ものの魚

(2) 米と物々交換

六、囲炉裏端の四畳半の部屋で卓袱台を囲み食べていました。

夏には一番下の弟（一才ぐらいだったでしょうか）を母は背負い汗を流して食べていた様子が今でも目に浮びます。

七、学校から帰ると母は何時も野良仕事で家にいなかったが、さつま芋の煮た物、又さつま芋を粉にして作った団子等がおいて有りました。それも無い時は残りの冷ご飯を手にのせ、沢庵を片手に食べたものです。それが何んともおいしかった事を覚えています。

八、嬉しかったのは、やっぱり正月です。庭で放し飼いにしていた鶏を色々な料理にして食べさせてもらいました。親戚の家に行ったら、又ご馳走が有り、うれしかったです。それにあの頃は余程貧乏していたのでしょう。母は真夜中に出る寝待月であり合わせの物でご馳走を作りお供えをしていました。朝そのお下がりを買えるのがうれしかったです。

九、今はスーパーに行けば何でも手に入る時代、そして飽食の時代、私の貧しかった子供の頃の食糧難の事は思い出し、時々子供達に話しはしています。今は家族の健康の為、せつせと料理を作りテーブルに並べている日々です。

※ 親は子育てに苦労するといっても、今の苦労は戦争前後、私たちの育ててくれた親の苦労に較べるとまだ容易なものです。男の子四人の子供も殆んど独立し、どの子も中学、高校の頃は良く食べて、主人の給料の殆んどが食料に消えていました。その頃、弁当のおかずや夕食等の文句を言った時には「贅沢しなかったら、自分が稼ぐ様に成つてから言いなさい。」と良く言つたものです。

東区坂元 信六

一、

(1) 十二歳頃

(2) 昭和の二十年代

二、農業

三、八人くらい

四、

(1) ○ごはん さつまいも入りのごはん、ぞうすい

○おかず みそ汁、つけもの

(2) ○ごはん 赤めし

○おかず トリ肉のにしめ

五、

(1) さとう

(2) どうして手に入れたかわかりません

六、いろいろ端を囲んで家中皆んなで食事をした。だまって食事するようにしつけられて育った。

七、さとうきび、さつまいも、とうもろこし

八、正月のおぞう煮や、たまにある肉料理が非常にうれしかった。おかずでもおやつでも兄弟が多いため、少しずつしかなかった辛い思い出。

九、物がなく、しんぼうする事を強いられた昔がほんとうにあつたのだろうかと今になるとふしぎなくらいです。

※物がありませんで子供がわがままになるのにいちばん心配した。

東区長 峯泰彦

一、

(1) 十歳頃

(2) 昭和の二十年代

三、二人くらい

四、

(1) ○ごはん 外米(細長い米)、麦の入った飯

○おかず みそ汁、つけもの、かつおぶし

六、座敷

七、畠にできたさとうきび、とうもろこし

愛知県 田中 ヨツ子

(旧姓 徳田・平田)

一、

(1) 十三歳頃

(2) 昭和の三十年代

二、農業

三、九人くらい

四、

(1) ○ごはん 麦ごはん、あわごはん、いもごはん、ずし

○おかず 味そづけ、ふだん草とトウフの白あえ、ナスと豚肉いため、スルメのしょうゆづけ、川魚(フナ、なまぎ)の天ぷら、うどん

(2) ○ごはん 赤飯、白米

○おかず 煮しめ(豆ふ、コンニャク、ゴボウ、人参、しいたけ、コンブ、かしわ、厚揚げ)入り、ウルメの天ぷら、数の子、おぼ、吸い物(かわ、厚あげ)

五、

(1) 魚、肉

(2) 魚屋さんが毎日の様に廻って見えて、米、玉子と交換してもらう。肉は庄内の肉屋さんにあった。

六、家族が九人と大家族だったので、いろいろ端で父親と弟達三

人、四・五畳の部屋に食卓を囲んで母親と残り四人別々に食事した。父はすごい短気で、子供達がおかずにもなくを言ったり、ごはんのお変りを少しだけと言うと「少しだけならもう食うな」と叱りつけるくらいでした。

七、からいも、里いもの煮た物、とうもろこし。母はむしパン、

おはぎ、ぼたもちなど色々作っていました。

八、小、中学の頃は夏はすいか、うりが家庭菜園になっており、毎日キャンデーを家族で一本ずつ食べるのがうれしかったです。又、私達が大きくなるに連れて、親せきに行かなくなると、お正月等は母が朝早く起きて料理して、一人一人お膳でお客さんみたいにして食べていた事を懐かしく想い出します。

九、私の中学の時は両親は朝早くから夕方遅くまで田、畑の仕事でした。母は暗くなってから庄内まで肉買い、乙房まで魚、ウドン、ソバを買いに行っていました。母の料理のとてもおいしかった事を記憶しています。

※ 子供が三人ですが、小、中学生ぐらいになると好みがそれぞれちがって来て、文句を言ったりして困る時もありました。今は、大人になって一週間に二日くらいは魚類、肉類の煮物を考えて料理しています。



読者よりの便り

宮崎市(関之尾出身) 肥 後 兼 行

(前畧) ご依頼の「庄内」第五号の原稿募集について、折角の機会に協力しなければとの思いから、敢えて不肖を省みず筆をとり、ここに原稿を送付しました。

貴重な「庄内」誌の編纂には胸を打たれるものがあります。

今後とも大変な事業とは存じますが、関係者皆様方のご健闘を心よりお祈り致します。

宮崎市(西区出身) 牧ノ瀬 正 雄

(前畧) 半世紀近くも郷土庄内を離れておりますと、世代の変わったせいもあってか町並みも人々もすっかり変わってしまいました。

ただ変わらぬものは、「元氣じゃったな」と親しい言葉と、遠くに霞む高千穂の峰、関之尾や川崎の穏やかな山なみ、夕暮れどき、遠くの農家からたなびく煙りだけが懐かしく見られるだけになりました。

「庄内の昔を語る会」の会誌に懐かしい方々の名前や寄稿を

拝見させてもらい、郷土を離れている者にとっては、得難い郷土の便りであります。

この機会に「庄内誌」のご発展と編集部の方々に深甚の敬意を表する次第であります。

宮崎市月見ヶ丘 入 来 ミ ネ

(前略) 走り書きにて認めましたので、さぞかし読みづらい事と思います。

幼少時代の思い出の事で充分とは言えませんが、悪しからず、校正方よろしくお願い申し上げます。

庄内の昔を語る会の御発展と会員の皆様方のご健康をお祈り申し上げます。

神戸市須磨区 野 嶋 タ ミ

(前畧) 庄内誌特集の原稿ですが、思いつくままに書いてみました。

この頃、字を書く機会がなかなかないので、頭の老化防止にでもなればと字典片手に書いている有様です。また会える日を楽しみにしております。

太郎坊町（東区出身） 井上 幸男

（前畧）私の父吉川重一は、昭和二十一年頃、庄内町助役をしていました関係で、その頃の町政に関する資料を沢山残してました。

今回その一部を貴会にご提供いたしますので、ご利用頂ければ幸いに存じます。

愛知県（平田出身） 田中 ヨツ子

三月末に会誌「庄内」の創刊号から第四号までまとめてお送り戴き有難うございました。

知っている方のお名前や懐かしい山や川が読むほどに沢山出てきて興味深く拝読させてもらいました。

今後ともこの会の御発展を遠く愛知よりお祈りします。

横浜市（今屋出身） 吉村 史朗

（前畧）子供の頃見聞いた何気ない話も、故郷を離れ、わが子が成長するにつれ貴重なものに思えて来る今日この頃です。

右会誌「庄内」御送付のお礼まで。

北九州市（西区出身） 牧ノ瀬 国夫

（前畧）会誌庄内、毎号懐かしい思いで読んでいます。第五号の発刊期待して心待ちしている所です。

編集委員の皆様、ご苦労様です。

御寄附の謝礼

庄内の昔を語る会

去る五月、東区帖佐ミヤ様を通して多額の御寄附を頂きました。佐世保市の長岡孝徳様に対し、心から厚くお礼申し上げます。

早速、史跡探訪等に必要なハンドマイクを購入し利用させて頂いています。

会のために役立つことに善用しようと検討致しているところです。ですので申し添えておきます。

編集後記

編集部

毎号、発註日を気遣いながらの編集ですが、八月末になって、一気に原稿が出揃い安堵しました。

特集「昔の食生活をさぐる」は戦前、戦後の食事情の苛酷さ、辛苦の連続であった貴重な体験を再現する思いでした。

その中には外地からの引揚げ、子育ての苦心談など胸のつまる思いで読んだ文章も数多くありました。

誰にも知られたくないプライベートな面や二度と見聞したくない苦しい体験を赤裸々に表現して頂いた方々に対し敬意を表すると共に深く感謝申し上げます。

特に、今回は江口高見委員の御努力により、遠く阪神地区からも投稿頂き、この会の輪の拡がりを強く感じました。

この会誌の「めだま」である「子や孫に語り伝える話」は会員をとりまく町民の関心もたかまり、貴重な資料や珍しい説話などが寄せられ内容の充実を編集委員一同喜んでいるところです。

終りに、高城町出身の郷土史家、市園辰夫氏の御逝去をお知らせすると共に、哀悼の意を表します。

平成五年九月吉日

編集長

臼杵徳光

坂元徳郎

副編集長

木幡敏正

清水省三

山元昭平

片ノ坂登

黒木聖

菓子野美和子

山元一信

馬籠英男

江口高見

大川原紀美男

庄内 第五号

平成五年十一月一日 印刷

平成五年十一月三日 刊行

刊行
編集
庄内の昔を語る会

都城市庄内町庄内地区公民館
電話(〇九八六)三七〇八八八番

印刷
有限会社 文昌堂

都城市東町十八街区一号
電話(〇九八六)三二一一二二番

